

---

# ウルトラマンゼロ～銀河を駆ける天馬～

銀色の闇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウルトラマンゼロ〜銀河を駆ける天馬〜

### 【Nコード】

N1843W

### 【作者名】

銀色の闇

### 【あらすじ】

天馬 ペガサスの鍵には二つの意志があった・・・一方は平和を願い、純白の心を持つ姫 プリンセス・ライト だが、もう一方は破壊を望み、漆黒の心を持つ姫 プリンセス・ダーク 他人を信じることができず、ただ人が嫌いな少女が光の国へ来て何を見つめるのか？ウルティメイトフォースゼロは天馬 ペガサスの鍵を帝王・ベリアルから守れるのか！？

## 天馬の鍵と光の国（前書き）

初めまして、銀色の闇です^^  
投稿が遅くなってもどうか温かい目で見てもらえると嬉しいです。

## 天馬の鍵と光の国

十年前のとある事件……。それが私の運命を大きく変えた……

五歳の誕生日、私のパパとママは天国に行ってしまった。

ザワザワとテレビで聞こえる人々の悲鳴。子供の泣き声、メデイアどもの騒ぎ声、カメラの音、偉い人の記者会見、そしてパパとママを乗せた飛行機が落ちていく映像。その時の私の頭の中は驚くぐらい真っ白になった。すべてを失う感じとはこう言う感じなのだろうか……。私は五歳ながらもその感情を知ってしまった。家の家政婦さんもおろおろしながら、心配そうに私を見る。

（ やめてよ……。そんな風な目で見ないでよ……。！ ）

けれど、口は動かなくてただ私はテレビの前で叫ぶように呼んだ。

「 パパア！！ママアアア！！！！……………」

その声は天には届かず、憎いほど真っ青な空に消える。

PPPPPPPP!!!!

???「んゝ．．．夢か．．．」

そつと目覚ましボタンを押し、音を止める少女。目を擦りながらだらしなく欠伸をする。さつさとパジャマから私服に着替える。ジヤージと同じ素材でできた黒く動きやすそうな半ズボンと青色のTシャツと言うかなりラフな格好だ。最後に薄紫色の不思議な色と形したペンダントを首にかける。

???「いただきますー」

適当に作った目玉焼きとパンを食べ、テレビをつけ食事を続ける。そのテレビのニュースの左下には『10年前の謎の飛行機事故の真実』と大きな見出しが張ってある。飛行機を研究している教授はこう偉そうに説明している。

教授「この事故の原因はこのエンジントラブルが原因でしょ．．．  
！そして．．．なにより．．．！」

???「．．．．．」

私はウザそうな顔をしてリモコンを取り、ピッとチャンネルを変えた。

??? (チツ・・・!あいつのせいで気分最悪・・・)

私は梅崎光、15歳。今年で高校一年生だ、今は夏休み真っ盛り。でも私は友達が少なく、ほとんど家にいる。私は他人と触れ合うのが嫌いで、外ではほとんど仏頂面。人を信じてもろくなことがないと知っている暗い後ろ向きな奴だ。私がこうなったのは10年前を起きた飛行機事故のせい・・・。全員死亡という大きな飛行機事故、それには私の父と母も乗っていた。私の五歳の誕生日を祝うため、急いで海外での仕事を終わらせ日本に戻ろうとしていた。でも、それは叶わなかった・・・。事故の原因は整備不良と発表された。でも、私はもつと違う嫌な物を感じた・・・多分気のせいだと思うけど・・・。

??? 「きゅ〜?」

私の足元から可愛い顔を覗かせるモンブラン色のリスがいる。

光「おいで、リリー」

こいつはリリー、私の唯一の家族で親友。両親が亡くなった後、寂しくないようにと親戚の人がくれた物だ。リリーは昔、病気を持っていて、他のより毛の色が少し薄いのはそのせいだ。でも、今はそれが嘘のように元気に走り回っている。

光（ああ・・・！本当、動物っていい！！裏切らないし、可愛いいし！！！！）

本当、人間とは大違い！人間は、信じようと努力してる上ですぐ裏切るし、暴言や暴力、あるいは権力で人を傷つける、そしてその傷つけられた人もまた人を傷つける・・・。なんで人々はそんなことにすら、気づかないのかしら？ただの悪循環じゃない・・・馬鹿らしい・・・。

光「まあ・・・こんなこと思っても仕方ないか・・・」

そう呟いて、何気なく上に飾ってある時計を見ると十時を過ぎていた。

光「ヤバッ・・・！」

急いでコップや皿を台所に持っていき、パンをなどしまい、大き

い買い物袋を持ち玄関に向かった。光は慣れた様子でバックを開け、リリーを手招きする。

光「リリー、GO!」

リリー「キュー!」

リリーも慣れた様子でバックの中へと入る。リリーは賢いのかお店の中に入ってる時は、いつも静かだ。光は、リリーが入ったのを確認すると、急いでお気に入りのスニーカーを履いて家から出た。もちろん、鍵をかけるのも忘れずに。

光「よっしやっ・・・!」

今日は近くのよろずやさんで特売をやっているのだ。光はいつもここで買い物をしている。幸い、父と母は莫大な遺産があり食べ物や住む家にも困らない。昔は家政婦がいたがお金をできるだけ節約したいため、やめてもらった。でも、どこで噂を聞いたのかよく詐欺などそういう手の者がくる。子供なので甘く見られるのが大嫌いなのだ、だから光は怪しいと思った者には、警察をすぐ呼んで、よく返り討ちにしている。

光「今日は肉や野菜の特売日……」

よろずやに到着し、さつそくお目当ての物を買う。その次には、ペットショップにリリーの餌を買いに行き、色んな場所へと寄り道し帰るのが夕方辺りになった。

光「ああく……疲れた」

たくさん荷物を抱え、家へ真っ直ぐに帰る光。そんな時、ぐにやりと道が歪むように黒い異空間のようなものが現れる。

光「何これ……？」

興味本意で触ろうとした時、頭の中に声が聞こえた。

???? (いけない!!それから離れてください!)

だが、時は既に遅く、光は何か黒い触手に手を掴まれた。黒い歪みの中から恐ろしい姿と声がでる。

???? 『やっと見つけたぞ……天馬の鍵……』  
ベガサス

光「何！？何なのよ！これ！！」

必死に抵抗するが、触手は離れず逆にずるずると光を黒い歪みに引きずり込む。歪みの中から邪悪な風に伸びきった鋭い爪をした巨大な手が現れる。

???? 「俺様の手……！ようやく……！！」

光「いやあああああ！！！！！！」

その声に答えるかのようにペンダントの石が光を放ち、巨大な手を弾く。

???? 「何ッ！？」

ペンダントから古代文字みたくのようない思議な字が光を包み込む。ピカッと眩い光を放ち、その場から黒い歪みも光の姿も消えた。

.....

光「えっ？うわあああああ！！！？」

光は自動転送され、今空から下に落ちていた。

光（やばい！この距離から落ちたら死ぬって！！）

光「きあああああ！！！」

持っていた荷物にしがみつき、死ぬ覚悟をした時だった。ポンツと誰かに受け止められたような感じがした。ゆっくり目を開けるとそこには巨大な炎の巨人、グレンファイヤーが不思議そうに光を見た。

グレンファイヤー「なんで地球人がこんなところにいんだ？」

光（な、何これ・・・！？3D・・・いやこんなリアルなのは無理か・・・）

実は、光はウルトラマンというものを知らない。できるだけ外の世界と触れ合いたくないのでニュースは必要な時以外見ない。

光（とにかく逃げないと・・・！）

光はバツクをあさると有るものに目が止まる。夕ご飯に食べようと思っていたオレンジだった。光はこれだと思い、皮を剥き、効くかどうか迷ったけどグレンファイヤーにそれを向けた。

グレンファイヤー「ああ？なんだ？」

光「喰らえ！！」

ぐしゃりとグレンファイヤーの目の前で潰した。ペチャリとグレンファイヤーの顔全体にオレンジの汁が飛び散った。光はハラハラした。

光「き、効いたか・・・？」

目なんか分からないわよ！！と心の中で叫ぶ光。

グレンファイヤー「いつ、痛えええええ！！！！！！」

光（（き、効いた！！！！））

グレンファイヤーは目を抑え、急降下し光を適当に地面に下す。

光「よし・・・！しめた・・・！！」

荷物を持ち、ささつとその場から近くの草木が生えているところに身を隠す光。グレンファイヤーは顔を擦り、光を睨む。

グレンファイヤー「痛ってえな！何すんだって・・・いねえし！

」

天馬の鍵と光の国（後書き）

ゼロ「ん？今なんか空が光ったような・・・？」

レオ「こらあ！訓練中によそ見るな！！！」

レオの蹴りがゼロの顔を掠る。

ゼロ「って危ねえな！！！」

ゼロは怒りを露わにする。

レオ「よそ見る方が悪い」

ゼロとレオは光の国にある特殊なバトルエリアで手合わせをしていた。

レオ「それとも、セブン兄さんの説教でも聞くか？」

ゼロ「ツ！おい！ズルいぞ！オヤジの名前を出すなんて！！」

ゼロはセブンの説教が苦手だ。正座をさせられて、その上2、3時間がみがみと説教させられ、訓練の時よりずっと疲れる。この前は足がビリビリ痺れ、ひどい目にあっただばかりだ。

レオ「だったら、頑張るんだな」

ゼロ「他人事みたいに言いやがって〜！！」

レオ「他人事だ」

ゼロ「ツ〜！！！！／／／／うるせえ！！！」

ゼロはレオに遊ばれてるとも知らずに頑張るのですた。

リリー、行方不明

森の中に姿を隠し、安堵の息をつく、光。バツクの中の大事な相棒に声を掛ける。

光「助かった〜！たくっ・・・なんなのよ〜・・・あれっ・・・！！・・・  
ねえ？リリー？・・・」

光はリリーに声を掛ける。でもいつまで経っても、バツクの中から姿を現さないリリー。おかしい、いつもだったらすぐ出てくるはずなのに。光は必死にバツクの中を探る。

光「リリー・・・？どこなのリリー・・・！？冗談やめて出てきてよ！！！」

光は一生懸命にリリーの姿を探すが出てこない。その時、光の頭の中に嫌な予感が浮かぶ。

光「まさかっ・・・！！」

もしさっきの落ちる時に空の上ではぐねていたら・・・？

光は荷物のことなど忘れて、ただ高い建物が建っている方に走りだした。多分リリーがいるならあそこだと感じて。

光（嘘でしょ・・・？リリー・・・あなたも私を裏切るの？私をあ  
あの暗くて何も見えない世界に戻すの・・・？）

知らない内に目尻が熱くなった。可笑しいな、こんな感情を捨てるために人を嫌いになったのに・・・？

光「お願いよう・・・リリー・・・！！私を・・・私を一人にしないでよっ！！」

ああ、あの時と同じだ・・・。また私は大事なものを失ってしま  
うのかしら・・・？

あの時の暗く、寂しくたった一人ぼっちの世界にはもう戻りたく  
ない・・・！！

一人、少女は光の国に行く・・・

.....

ゼロ「ふうく・・・」

午後のレオとの特殊訓練が一番キツイゼロ。そんなゼロを可笑しそうに見るレオ。

ゼロ「んだよ・・・人の顔ジロジロ見て・・・」

レオ「いや、お前も随分変わったなと思って・・・」

ゼロ「はあ?」

いきなりそんなことを言われたので顔を顰めるゼロ。

レオ「昔、よく一人で突きつて無茶ばっかしてたお前がこんな

に立派になって・・・仲間もできて・・・性格も昔より丸くなったし」

ゼロ「悪かったな・・・、性格悪くて・・・！」

不機嫌そうに顔を逸らしているが、レオは知っている。照れているのだ、ゼロは。裏ではよく陰口を叩かれていたゼロだ、きつとこ  
ういつのには慣れていないのだろう。

ジャンボット「失礼します」

そんな中、ウルティメイトフォースゼロの一人ジャンボットが来た。

ゼロ「どうしたんだ、ジャンボット？」

ジャンボット「いや、ウルトラマンセブンとエースから至急ウルティメイトフォースゼロを集めて宇宙警備隊本部に来いとこの命令が来てな・・・」

ゼロ「わかった・・・レオ・・・！」

レオ「わかっている、行って来いゼロ」

ゼロ「あぁ・・・！」

そう言ってジャンボットと一緒に空に消えるゼロ。レオはその姿を優しく見守った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

宇宙警備隊本部につくとそこにはウルティメイトフォースゼロの二人ミラーナイトがいた。

ゼロ「ミラーナイト！」

ミラーナイト「ゼロ！久しぶりですね！」

ミラーナイトはエメラナ姫の護衛、ゼロは訓練に忙しく最近会っていないかった。

ジャンボット「そう言えばグレンファイヤーは？」

ミラーナイト「いや、私は知らないな・・・」

ゼロ「俺も」

そんな話をしてる中、ウルトラマンセブンとウルトラマンエースが何か難しい顔をして入ってきた。

セブン「ん・・・？一人少ないような・・・？」

ミラーナイト「すみません、一人不在でして・・・」

ジャンボット（たくっ・・・！何やっているんだ！あのアホは！！！！）

エース「まあいい・・・。今は時間がない、取り合えず話そう」

若干、エースの声がいつもより焦っている。ゼロたちは何か起きたということを感じ取った。

エース「POINT・4849エリアに超高密度エネルギーを

確認した。君たちには、調査および辺りの探索を頼む」

セブン「本当なら実習生を行かせるべきなのだがここのバリアを破ったぐらいだ、危なすぎる。我々も忙しく様子を見にはいけない。この件をウルティメイトフォースゼロに任せたいと思う」

ゼロ「わかったぜ、オヤジ」

快く依頼を引き受けるゼロ。後ろでミラーナイトは何かを思い出すような難しそうな顔をする。

ミラーナイト「でも確かPOINT・4849とは・・・」

エース「ああ、あそこだ」

エースはゆっくりと光の国のご真ん中の空を指す。

ゼロ「あんなところに？」

エース「では、頼んだぞ。ウルティメイトフォースゼロの諸君たちよ」

そう言い残し、その場を後にするエースとセブン。セブンはその場から出る時、ゼロに探知機を渡した。

ゼロ「これは・・・」

セブン「これで超高密度エネルギーが発生した場所が分かるはずだ」

ゼロ「わかった」

セブン「じゃあ後は任せたぞ」

.....

ゼロは探知機を手に取り、空を見上げる。

ゼロ「よし！ウルティメイトフォースゼロ出動だー！」

ジャンボット・ミラーナイト「「おおー！ー！」」



## ウルトラマンゼロと地球人の出会い

光「……………」

ほとんど建物がまるで東京みたいなでっかいビルばかりだが、やはりここは日本ではない違うところと言つことが周りの雰囲気から感じられた。

光（何も考えずにここまで来ちゃったけど……これからどうするか……それにしてもさっきから）

ヒソヒソ話が雑音のように聞こえ、突き刺さる視線は蜂の針みたくにチクリと体に刺さる。

光（目線がめっちゃ痛い……！）

次々と通り過ぎるウルトラマンからまるで珍獣のようかの目で見られている。本当、一人でここを通るのはきつい。

光（踏みつぶされそうになるわ、目線は痛いわ、そして何より上から目線がムカつくわ……）

光「はあ……今日は厄日だな」

うんざりした顔でしばらく歩き続けると、上の建物から微かに何かの鳴き声が聞こえる。光はこの声を知っている。

光「リリー・・・？」

よく見ると隙間に小さな何かが建物のてっぺんにしがみ付いている。

光「あれってもしかして・・・!？」

.....

ゼロ「うん・・・」

ゼロたちはさっそくPOINT・4849エリアの調査に来たが、さっきから探知機は全く反応しない。

ミラーナイト「おかしいですね・・・?あれほどの超高密度エネルギーに反応しないなんて・・・」

ジャンボット「その探知機壊れているんじゃないか？」

全く反応がない探知機を渋い顔で見るジャンボット。

ゼロ「辺りにも変わった様子もないしな・・・」

周囲を見渡すがこれほどと言って怪しいものは見当たらない。いつもと何の変わりもない。ミラーナイトは、思いついたように自分の意見を言った。

ミラーナイト「もしかして、あの超高密度エネルギーは何かの物体から引き出されたものなんじゃないですかね？」

ゼロ・ジャンボット「え？」「」

ミラーナイト「これは私の推測ですが、超高密度エネルギーを体内に持つもの、あるいは自然に起こったものなら必ず痕跡があるはずですが、今回は全くその跡が見当たりません。でも、超高密度エネルギーから出来た物体になら外に漏れた超高密度エネルギーをしまいこむことができます」

ゼロ「つまり、その超高密度エネルギーを入れられる箱みたいなものがここに落ちたってことか？」

ミラーナイト「簡単に言えばそういうことですね」

ジャンボット「じゃあ、早く見つけ出そう！そんなものが落ちていたらいつ悪用されるかわからないからな」

そう言い、ウルティメイトフォーセゼロたちは光の国に降り立った。

.....

グレンファイヤー「よー、お疲れさん」

地上に降り立った時、いつの間にグレンファイヤーが目の前にケロツとした様子で立っていた。

ジャンボット「お疲れさんじゃない！お前はそのままどこに行ってたんだ！！」

グレンファイヤー「うるせえなー、焼き鳥。俺にも色々合ったんだっつーの！」

ジャンボット「だから、私は焼き鳥じゃない！ジャンボットだ！いい加減名前を覚えたらどうだ！..！」

これ以上この二人をほっといたら乱闘になりそうなので急いでミラーナイトが仲裁に入る。

ゼロ「はあく・・・この先うまくやっていけんのか・・・？」

ゼロが呆れた風に溜息をついていると、ざわざわと集まり、騒ぐウルトラマンたちの声が聞こえる。

ゼロ「なんだ・・・？あれ・・・」

気になって近くに行ってみると野次馬の中にウルトラマンメビウスがいた。

ゼロ「おい！メビウス」

メビウス「あ！ゼロ」

野次馬たちを避けメビウスのところに近づくゼロ。

ゼロ「一体何なんだこの騒ぎ？」

メビウス「ああ、あれを見てくれ！」

メビウスに指された方向を見るとそこにはビルのてっぺんに固まりついている何かが見える。

ゼロ「あれは・・・地球人！？でも、なんでこんなところに・・・」

グレンファイヤー「ああー！！あいつー！！」

突然大きな声を上げ、ビルのてっぺんをわなわなと指すグレンファイヤー。



リリーを片手に持ち、プルプル震えているとウルトラマンたちが異変に気づき集まってきた。最悪だと思っていると野次馬たちの中から何か猛スピードで近づいてきた。

光（ん？）

目の錯覚かと思い目を擦り、もう一度見ると突如目の前に巨大な顔がこちらを覗くように見えていた。

ゼロ「こんなところで何やってんだ、死ぬぞ」

できるだけ相手を怖がらせないようにゼロは声を掛け、手を差し伸べるが

光「いやあ！触らないで！」

反射的に落ちないように握っていたてっぺんの棒を離してしまった光。光の視界が一気に天と地が逆になる。

光「きゃあああああー！ー！ー！」

ゼロ「しまったっ・・・！」

急降下する光の体を追いかけて、手を伸ばすが、体が小さくうまく狙いが定まらない。

ゼロ（このままじゃ・・・ぶつかる・・・！）

ゼロがそう思った時、突然少女のペンダントから光が発する。

光「ベガサス天馬の鍵よ・・・我、プリンセス・ライト純白の姫が命ずる・・・！」

確かに光の口からその声は出ていたが雰囲気はどことなく違う。だが、ペンダントはその声に反応するかのように点滅をし始める。

光「我を守り、その力を示せ！」

そう呟くように言うとペンダントから文字が浮き出てき、やがてそれは光の球体になり、白い球体が彼女の体を包み込んだ。

ゼロ「何っ！・・・うわぁ！？」

眩しく輝く光がゼロの視界を遮る。

ジャンボット「一体何が起こっているんだ！」

地上にいるジャンボットたちもあまりの眩しさに手で顔を抑える。球体がゆっくりと地面に降り、球体はまるで卵の殻のように割れ、中から閃光と共に少女が現れる。

光「……………ってあれ……？なんでこんなところになってうわぁ！」

巨大な足と顔がこちらを一斉に凝視している。

光（（怖っ！！））

ウルトラマンを全く知らない光にとってはウルトラマンも怪獣のようには見えないのである。そんな状況の中突如足が地面から離れる感覚に襲われた。それはそうだ、なぜならゼロが光のTシャツの部分をつまみ、つまみ上げているのだから。

光「うわぁ！」

ゼロ「お前一体何者だ？何の目的で来た！」

光「は・な・せ！私に触れるな！近づくな！」

ジタバタとリリーを抱きながら暴れる光。んっ・・・？ちよつと待てよ・・・今この怪物喋った？あれ・・・？確かさつき会ったあの暑苦しい怪獣みたいなのも喋ってたような・・・？

光「ねえ、あんた喋れるの？」

ゼロ「？当たり前だ」

光「怪物なのに？」

ゼロ「怪物？違う！俺たちは光の国の戦士、ウルトラ戦士だ！」

光「はあ？ウルトラ戦士？何それ・・・？取り合えず、ダサイ」

ゼロ「なんだとっ！」

ミラーナイト「まあまあ！落ち着いてください、ゼロ」

またも仲裁に入るミラーナイト。

ミラーナイト「取り合えず、その子を本部に連れて行きましよう」

ジャンボット「そうしよう、ゼロ」

ゼロ「わーてつるよ！」

睨みつけるように光を見る。光を摘み上げたまま本部へと向かう  
ウルティメイトフォー스ゼロ。

光「だから……私に触るなアアアア！！！！！」

光の怒号と野次馬をその場に残す……。

## 少女の記憶の欠片

エース「知っていることだけでいい・我々に話してくれないか？」

光「だからあ、知らないっーの！」

宇宙警備隊本部に連れてこられた光はエース、キングに尋問を受けていた。ウルティメイトフォーエスゼロはその様子を見ている。

キング「でも、君のペンダントから確かに超高密度エネルギーが感知されている」

キングの片手に持っている探知機がとてつもない超高密度エネルギーを示している。

光「そんなこと言われたって本当に知らないのよ！ここがどこかも、今私がどこにいるのかも！」

エース「ここは、M78星雲光の国という星だ。君の知っている場所じゃない」

光「はあ〜!?!」

セブン「君はどうやってこの星に来たんだ?」

光「それも知らない・・・ただ私はあの黒い影から逃げよつと必死で・・・」

????『やっと見つけたぞ・・・天馬ベガサスの鍵よ・・・』

ぶるり・・・!あの声を思い出すだけで背筋が震え上がる。そう・・・もう面倒事はごめんよ!!

ゼロ「おい、どうしたんだ?」

光「・・・何でもないわよ」

ゼロ「どこ行くんだよ!」

フリリと会議室から出てて行く光を止めるゼロ。

光「私がどこへ行くこうと私の勝手でしょう、ほっといて」

グレンファイヤー「なんだと！それが心配してやってる奴に言うセリフかっ！」

光「誰もそんなこと頼んでないし、恩着せがましく言わないで。結局、ウルトラマンも同じね、自分勝手に強欲で馬鹿な人間と！」

グレンファイヤー「てめっ・・・！」

ミラーナイト「お、落ち着いてください！グレンファイヤー」

ジャンボット「そうだ、相手は地球人だぞっ！」

光「ふん・・・」

必死に殴りかかるグレンファイヤーを二人係で止めるミラーナイトたち。光はその場から立ち去ろうと背を向けたが、また声が掛かる。

エース「じゃあせめてそのペンダントだけでも貸してくれないか？」

光「何言ってるの！そんなの無理に決まってるじゃない！」

さつきまでそんなに感情を見せなかった光が嘘のように声を荒上げ、威嚇する。まるで、卵を必死に守ろうとする鷹のように。ウルトラマンたちもその剣幕な表情を見て、ビククリしている。だけど、ゼロは負けじと声を出す。

ゼロ「そんなわけのわからない物持ってたら危ねえだろ！第一、なんでダメなんだ！訳を言え！！」

光「これはねえ・・・！あれ・・・？これは・・・」

光（これは誰から貰ったんだけ・・・？）

なぜだろう？これは確かに大切なものだ。でも誰に貰ったのか、いつどこで、何で貰ったのかさえも覚えていない。なんでだろう・・・？とても大切な物はずなのに・・・。私何か大切なことを忘れ・・・。

光「あっ・・・！うっ・・・ッ！！・・・」

その時だった、私の頭の中に激しい頭痛が襲う。何かの記憶が私の頭にフラッシュバック現象のように入り込んでくる。テレビの砂嵐のように掠れて顔までは、はっきりわからない。でも、なぜか私は知っている。

??? 『お母様・・・お父・・・様・・・！私今・・・日ね・・・！』

??? 『見て・・・見て・・・！ビー・・・ス・・・ト』

??? 『こっちよ・・・！アハハ・・・ハ・・・！！』

無邪気に笑う少女。まるで一輪の花みたくに素敵な笑顔だ。私より少し小さい・・・そう・・・中学生ぐらいかな？

??? 『こ・・・らっ・・・まった・・・』

??? 『し・・・た・・・ないわねえ・・・  
は・・・』

「????」そう・・・で・・・ね・・・  
・・・は・・・」

誰・・・?この人たち・・・男の人が二人・・・?女の人もある・・・

なぜ・・・?こんなに幸せな気分になるんだろう・・・?私じゃないのに、なぜ・・・?

ゼロ「おい!おい!どうしたんだ!」

光「うつ・・・!うつ!」

光が頭を抑え膝をつき、苦しむのと同時にペンダントも輝く。エースの持つ探知機もそれに反応し、さっきから物凄い異常値を発している。

セブン」一体どうしたと言っただ!？」

???? 『逃げ・・・おお・・・!』

辺りが煉獄の炎に包まれていく

民衆たちは何もできず、悲鳴を上げ、どんとどんと焼死んでいく。

???? 『なんで・・・?なんで・・・こんなことに・・・!』

笑顔がとても素敵な女の子が泣いている

真っ白の純白なドレスは黒く煤が付き、ところどころ焼き焦げている

だが、そんなこと気にせずただ少女は泣き叫ぶ

本当・・・なんでこんなことになってしまったんだろう・・・？

なんで・・・！なんでっ・・・！！

必死に手を伸ばすが虚しくもあの子には届かない・・・

????『い・・・のち・・・かえ・・・も・・・守る・・・！』

画面がどんどん砂嵐のせいで見えなくなり、掠れていく

少女は最後の力を振り絞り、体から光を放った



何かを伝えようとパクパクと口を動かす光。

ゼロ「どうしたんだ！？何が言いたい！」

光「天・・・馬の・・・鍵っ！・・・導くのは・・・三つの・・・鍵・・・」

ゼロ「どういう意味だ・・・！？」

突然言われた言葉に戸惑ったが、光が途端に苦しむのをやめた。

光「あれ・・・？私・・・」

ゼロ「だ、大丈夫なのか？」

光「え？ええ・・・まあ・・・」

「頭を抑え、立ち上がり外へ向かう光。」

ゼロ「なあ、さっきの言葉はどういう意味だ」

光「はあ？何言ってるの？私あなたになんか言ったけ？」

怪訝そうな目でゼロを見る光。どうやら嘘をついてる様子はないようだ。

光「……………」

ゼロ「って…………どこ行くつもりだ！」

光「…………たく！外で風に当たりに行くだけよ！！まったく煩いわね〜！」

そう言い残すとさっさと外へ消えて行ってしまった。

グレンファイヤー「なんだったんだ〜？あの女……」

セブン・エース・キング「……」

三人は無言のまま頷き合って、ウルティメイトフォースゼロに向き直る。

キング「君たち諸君に新しい任務を言い渡す……」

ゼロ「新しい……」

ミラーナイト「任務ですか……?」

キング「そうだ……。君たちにはあの地球人の護衛および監視に付いて欲しい……!」

ゼロ&グレン「はあああああ!!?!?!?」

ジャンボット「あ、あの地球人ですか……!?!?」

エース「迷子になられては困るからな」

グレン「俺は嫌だね！いつからウルティメイトフォーゼロは便利屋さんになったんだよ！！」

ミラーナイト「まあまあ、任務なんですから」

グレン「嫌だああああ！！！！」

まあ・・・グレンはミラーナイトに任せて問題はあの光と言う地球人だな。

ゼロ「地球人はみんなあんななのか？」

セブン「いや、逆にああいう風の方が珍しい」

父、セブンがいつの間にか自分の隣に立っていた。

セブン「まるであの子は昔のお前みたいだ・・・」

ただ力を望み、仲間も作らず、禁忌にまで手を出そうとしたお前に・・・

ゼロ「俺が・・・あいつに・・・」

セブン「だが、大丈夫だ。お前は仲間ができた、守りたいものも」

ゼロのカラータイマーの辺りにゆっくりと軽く拳をつけるセブン。

セブン「お前だけは必ずあの子を信じてやれ」

ゼロ「オヤジ・・・」

セブン「周りの奴が疑ってもお前だけは信じてやれ、でないとならば彼女は絶対お前に心を開かない」

ゼロ「あぁ・・・!」

さきまでのもやもやが嘘のように晴れていく・・・やっぱり、オヤジはスゲー・・・

セブン「それにしても驚いた」

ゼロ「???何がだ」

セブン「お前もグレンと一緒に殴りかかると私は思ったんだが・  
」

ゼロ「なあ!?!?!?!?!俺はそこまで子供じゃねええええ  
!?!?!?!」

セブン「ハハハハ・!?!」

二人のウルトラマンの親子の声が綺麗な空に響く。

少女の記憶の欠片（後書き）

セブン「そう言えば、ゼロ・・・あの子はさっき何か言っていたか？」

ゼロ「いや、意味不明なことなら言ってたぜ・・・」

セブン「意味不明？どんなことだ」

ゼロ「ええっと・・・確か・・・天馬ペガサスの鍵・・・導くのは三つの鍵とかなんとか」

セブン「天馬ペガサスの鍵か・・・」

セブン（）何事も起こらなければいいんだが・・・（）

## 愛を忘れた子

ゼロ「あいつ・・・どこまで行ったんだ・・・！」

ゼロはいつまでも戻ってこない光を探していた。この建物の中にいるのは間違いないのだが。

ゼロ「ん・・・？この声は・・・」

歌が微かに聞こえる。その声を頼りにし、行くと何百階もある建物で命綱なしで平気な様子で空に足をブラブラと出している光の後姿があった。ゼロはすぐに注意しようと思いつくが、光の後姿がさっきまでとまるで違った。凜として強気な生意気娘だったのに今のその後姿はいつ壊れてもおかしくないぐらい果かなかった。表情も悲しそうで歌を口遊んでいた。

ある昔      ある時代

迷子の一匹の天馬が      泉で羽を休ませた

泉にいつも移るのは      空を駆ける星々たち

天馬が通れば、地が潤い、湖は清らかに、草木は恵まれん

天馬は孤高の騎士　いつも一匹　いつも孤独　いつも仲間を  
探した

だが、

誰もが天馬を欲し　命を狙い　傷つけた

怒り狂った天馬は　復讐を誓い　いくつもの国を滅ぼした

天馬が地を駆ければ　地は崩れ、国の王たちは死んでいく

天馬が空に羽ばたけば　風が荒れ狂った

天馬が人を呪えば　人々が死んでいった

人々は許しを請うが　天馬は人々を苦しめ続けた

羽は黒く、霞<sup>かす</sup>み　穢れ　天に戻れぬと　天馬は嘆いた

赤き瞳から 血を流し、植物は 悲しみに枯れていった・

天馬は 国を作り 傷を癒さんと 眠りについた そして 封  
印された

国の 囚われの姫 プリンセス

白木蓮 はくもくれんのドレス着て 今日も嘆き、唄う

決して目覚めらせてはならぬと… 哀れな天馬を

次 扉開くとき 運命は死に 王の印 目覚めん

ゼロ「……………」

光の口から綴られていく歌。ゼロは思わずその場で立ち尽くした。  
光はゆっくりと後ろを振り返る。

光「盗み聞きとは、ウルトラマンってお行儀が悪いのね」

その場は動かず、ただゼロを見つめた。その目は、何もかも見透かしたよな目で・・・

ゼロ「違いよ！お前がいつまで経っても帰ってこないから、様子を見に来て・・・そしたら偶然・・・」

光「あつそ」

興味なさそうに返事をし、また足をブラブラさせ、空を見上げた。ゼロは光の隣に腰を下ろした。

光「・・・ちょっと、何隣にちゃっかり座ってんのよ・・・」

ゼロ「うるせえ、俺も暇な時にここにきて、ここに座って空を見てんだよ」

光「・・・好きにすれば・・・もう」

ゼロ「そう言われなくてもそつする」

何か言われたら言い返す二人。ある意味、セブンの言つとおり似

た者同士なのかもしれないこの二人は。

ゼロ「・・・お前、さっ」

光「どうせ歌のことでしょ」

言いたいことさっきに言われ少しムツとしたゼロだが、黙って光の話聞いた。

光「いいわよ、聞かせてあげる。私のすべてを」

光は自分の過去と歌のことをあざ笑うかのように淡々と話した。

光「私の両親は私が五歳の時、亡くなったわ。その後、私は親戚の家をたらい回しにされたわ。まあ、当然ね。財産がなかったら、別に私を育てる義理なんてないんだもの、当たり前よね？私はマスコミからいいネタされた。悲劇の少女！五歳にて両親失う！とかなんだ言つて・・・あの人たちも何にも分かってない・・・。・・・うんざりよ・・・、私があんたたちに何したって言うのよ・・・！」

光の拳にギユウと力が入る。その手がわずかに震えていることにゼロは気が付く。

ゼロ「おい・・・ひか・・・」

光「私はその時から人を信じるのをやめた。信じたって裏切られるだけだから！私はいつも一人。友達はリリーだけでいい。それ以上、何もいらぬい・・・！」

そう、私の時はあの時から止まったんだ・・・

どんとんと光の音が荒々しくなっていく。

光「そうよ、あのペンダントも誰から貰ったか知らない！この歌も誰か教えてもらったのかさえ覚えてない！！ママはいつもこの歌を歌うと褒めてくれたけど、でも・・・でも・・・その時、いつも・・・！」

悲しい顔だった

ママだけじゃない、パパもだ

どうして、あんな悲しそうな顔をしたのだろう・・・どうして・・・？

そんな時、

ゼロ「もういい！やめろっ！！」

ゼロはもう言わなくてもいいと言わんばかりに怒鳴り声で光を止める。

光「あら？なんで・・・？あんたが知りたいって思ったんでしょ・・・？」

そう言つと光はその場から立ち上がり中へと戻っていった。そんな光をゼロは呼び止める。

ゼロ「おい！光！！」

光「・・・何よ・・・」

ゼロ「俺は決めたぜえ・・・！絶対お前を俺の仲間に見せる！！」

そう言いゼロは、ビシリッと人差し指で光を指す。

光「……。言ったはずよ、私の友達はリリーだけでいい。それ以上、何もいらないうてね……！」

ゼロに冷たく言い放ち、その場を去る光。光の肩に乗るリリーだけが心配そうに光を見る。

そう……！私には仲間なんて必要ない……！！

ゼロは去る光の後ろ姿を見る。だが、その目は諦めてはいなかった。

見てろよ……光！！俺は絶対諦めねえ……！！

## ゼロの友達大作戦！

チュンチュン・

光「んっ・・・ここは・・・」

窓から漏れる太陽の温もり、青い空に羽ばたく雀たち、いつものベット。

・・・いつもの日常だ・・・やった・・・！夢だったんだ、あれは！！

光「フリー・・・よかった・・・」

私は平和な日常生活を密かに噛みしめる。よかった、そうよね、あんな非科学的なものが存在するわけないわよね？

いつものように着替えて朝食を食べ、外に出かける準備をした。今日は確か野菜が10%割引だったはず。

光「さてと・・・いつてきまーす・・・」

ガチャリとドアを開けた瞬間だった。

ゼロ「よう、よく眠れたか？」

バンツツツツ！！！

ドアを開けた時待ち受けていたのは巨大な顔。私は迷わず、すぐドアを閉めたわ。そうね、1秒の出来事だったかもね。

光「そうだっ・・・！確か昨日・・・」

昨日、光はウルトラマンエースからこれから住む場所の話を知られた。

エース『今日からここが君の部屋だ』

その話によるとこの部屋は異空間ゲートと言うものを使って、地球にある私の家の中と繋がっているらしい。だが、さすがのウルトラ

マンの技術でも地球全体と繋げるのは無理ということまで悪魔で私の家の中だけ。つまり、外には出れない。

光「しまったー・・・！忘れてたっ・・・！！」

これじゃちょっと恥ずかしいじゃない。さっきの自分が・・・！そう思って凹んでいると・・・。

バンバン！！

ゼロ「おい！ここ開けるー！！」

煩いのがまだいたわ・・・。お前は闇金かつーの！！

あまりに五月蠅いので私は思いつきりドアを開き、怒りをゼロにぶつけた。

光「うるさーいッッ！！近所迷惑よー！！！！」

ゼロ「ここに近所なんかねえよー！！！！」

もう傍から見るとどっかのお笑いコンビにしか見えない二人であ  
った……

……  
……  
……

ゼロ「……………」

光「……………」

ウルティメイトフォースゼロ「……（汗）」

さつきから二人は厳しい顔して一向に口を開けない。朝から何か  
あったようだが、ここまで火花を散らされるとこちらまで気ま  
ずくなる。

ミラーナイト「ど、どうしたんですか……？二人共、そんな怖  
い顔をされて……」

ここは恩恵派のミラーナイトが優しく声を掛けるが、呆気なく光  
の言葉でやられる。

光「うるさい、詭弁野郎きへん」

しくしくしく……。一人建物の端っこで体育座りになって落ち込むミラーナイト。

ジャンボット「こいつ……！なんてことを言うんだ！」

グレンファイヤー「そうだ、いい加減にしろ」

さすがの二人も黙ってられなくなったのか光を叱る。だが、全然反省の一つも見せない。

光「黙れ、焼き鳥」

ジャンボット「ぐはっ！」

グサッ！

光「あんたもさ……暑苦しい」

グレンファイヤー「がはっ！！」

グサグサッ！！

胸に何か刺さるものを感じる。あの年頃の女の子に言われるれ  
せいか、とても心が痛い。

ジャンボット（「じ、これは・・・！」）

グレンファイヤー（「ゼロより手ごわいかもしれない・・・！」）

胸を抑え、光を恐ろしい子っ！という目で見るとジャンボットとグ  
レンファイヤー。

グレンファイヤー「おいおい、ゼロ・・・！大丈夫なのかよ、あ  
れ・・・」

ひそひそと耳打ちで話しかけるグレンファイヤー。

ジャンボット「だいたい、お前がこの話を持ち出してきたんだそ  
・・・！」

それは昨日のことである。ゼロは外から戻って来たかと思えば、突然

ゼロ『俺はあいつを仲間にする！お前ら、協力しろ！』

と言い出したのである。その作戦名は「友達大作戦」。なんともピンとこない作戦名だ。ついでにこの作戦名を考えたのはミラーナイトである。みんな最初は突っ込もうと思っただけど、あまりの純粋な目と子供のようにどうですか！？どうですかあ！と聞いてきたので、ゼロたちは何も言えなくなってしまったのである。

だが、今はご覧のとおり。壊滅的な状態だ。

ミラーナイト「しくしくしく……そうですか、詭弁ですか・  
・私は・」

グレンファイヤー「ああ！もう、いい加減立ち直れよ！！ミラーナイト！！」

ジャンボット「どうするんだ・・ゼロ！！」

ゼロ「う、うん……」

ゼロがここまで友達関係で悩んだのは初めてだ。ウルティメイトフォースゼロたちが唸り声を上げていると、突然後ろにいた光が何

かを思い出したかのように大声を上げた。

光「ああああ!!!!」

ウルティメイトフォーゼロ「ククビクツ!!」「」「」

光「しまった・っ！買い物袋、あの森に置いたままだった！  
」

つつい忘れてた・。と呟く光。困っている光の様子を見てこ  
こだっ！と言わんばかりにグレンファイヤーが手を上げる。

グレンファイヤー「それはゼロに任せた方がいい！」

ゼロ「はあ!?!」

光「ええええく??」

めっちゃ嫌そうに顔を顰める光。

ミラーナイト（も、物凄い嫌そうな顔をされてますね・・・）

ジャンボット（仕方ないだろ・・・これしか方法はない）

光とゼロに聞こえないようこつそりと話すジャンボットたち。

ジャンボット「そうだな、光が一人でここを彷徨くと危ないしな・・・なあ？ミラーナイト」

ミラーナイト「そ、そうですね・・・ゼロなら安心して光さんを預けますし・・・」

グレンファイヤー「ということで後は頼んだぞ、ゼロ！」

ゼロ「お、おい！お前ら！！」

必死に呼び止めたがその前に空に逃げるグレンファイヤーたち。

やられた・・・。

これからどうするものと思っていたら、光からとんでもない言葉が出た。

光「チツ・・・！仕方ない・・・。行くわよ！」

・・・え？今なんて言った？こいつ・・・

光「何見てんのよ早く行・く・わ・よ!!！」

ゼロ「あっ！おい、待てよ!!！」

取り合えず、光の買い物袋探しに行くことになったゼロ。目標に  
一歩近づいたような近づいてないような？やり取りだった。

## ゼロの友達大作戦！（後書き）

ご感想いつでもお待ちしております

ついでにご感想をくれた人たちもどうもありがとうございます

^

記憶の中で・・・

光「あつ！あつた」

ゼロの手に乗っけてもらい約10分。案外簡単に探し物は見つかった。

光「よかった・・・。まだ中身は痛んでなさそう・・・」

ゼロ「よし、じゃあ帰るぞ」

光「ええ・・・」

行きと同じようにゼロの手のひらに乗せてもらう光。空にいる間、光はゼロにある疑問があった。

光「ねえ、あんたたちってさ・・・」

ナンデ、コンナワタシニカマウノ・・・？

イヤナコトタクサンイッタノニ？

そう・・・今までのたいていの人は私から離れていった。ひどい言葉、ひどい性格

人に裏切られたくなくて必死に人を拒絶した私

財産目当ての人やみんなに優しいと思われたくて私を利用する奴

嫌い・嫌い！嫌い！！全部大っ嫌い！！！

ゼロ「……………」

光「やっぱ……何でもない」

任務で仕方なくお前といるって言われたら？

どうしよう？…どうしよう？

嫌だ もう傷つきたくない やっぱり私は一人の方が向いてる

光は不安な気持ちでいっぱいになった。そんな時、突然目の前に落雷が降ってきた。

ゼロ「うわぁ!？」

光「きゃ！」

辺りの空をよく見ると灰色の鉛色の大きな雲が光の国に迫<sup>せま</sup>ってきてた。

ゼロ「なんだ！？あの雲は！！！」

光「なんだって・・・ただの雷雲じゃないの？」

ゼロ「違う・・・あの黒くて禍々しいオーラは・・・！」

光「っ！」

またあの時と同じ頭痛がする。

なんで・・・こんな時に・・・！

そう思いながらも映像がまた流れる。

ザザッ・・・ザー・・・！

あれと同じ黒い雲。ある国へ落雷が落ち、あっという間に国は火

の海なっていた。

人々の悲鳴、叫び声。そんな中落ちて着いて民衆に指示する者がいた。

「????」落ちて着いてください！みなさん！！私の指示に従って動いてください！」

ああ・・・またあの女の子

少女が大声を出すも、民衆たちは恐怖に怯え聞く耳など持たなかった。

その結果、建物が崩れ、下敷きになり死んでく人々

炎に身を焼かれ焼け死ぬ人

落雷に撃たれ、灰の様に体が脆くなり、焦げ死んでいる人

どんどんと民衆たちは死んでいく・・・

「????」お願い・・・みんな・・・！私の話を聞いてええ・・・！！

！！！  
』

その場にガクリと足が崩れる少女 その少女の瞳から止めどなく  
涙が零れる

無力だ・・・私の力は無力だ・・・！

そんな思いがあの子を襲う。

黒い雲から影が降ってきた。 邪悪なものを纏いながら少女に近づ  
いていく。

イケナイ・・・！ニゲナイト・・・！！

少女はなんとか立って、城の中へと逃げる。 だが、影も追っ  
てくる。

嫌・・・！嫌ああ！！

意識を持っていかれそうになる。 そんな時、

ゼロ「しつかりしろ！光！！」

光「・・・はあ・・・はあ・・・！」

戻った・・・。何なんだろう、あの映像は・・・まるで自分があの子になっているようだった。

ゼロ「取り合えず、戻るぞ！」

ゼロたちは急いで、光の国に向かった・・・。

## 覚醒 光と闇の姫

ゼロたちは急いで光の国に向かい、ミラーナイトたちと合流した。光の国は落ちた落雷によって崩れている建物が多数と負傷者で溢れかえっていた。

ゼロ「一体何があつたんだ!？」

ジャンボット「ゼロ・・・」

ミラーナイト「よかった!無事だったんですね!」

ジャンボットは脇腹辺りが負傷しており、ミラーナイトはそのジャンボットにバリアを張り、落雷が当たらないよう防いでいた。

ジャンボット「くっ・・・!」

ゼロ「大丈夫か!？」

光を手から降ろし、ジャンボットの様子を見に行くゼロ。でも、光は何故かその様子を不思議そうに見る光。ミラーナイトはその光の様子が気になって、声を光に掛けてみた。

ミラーナイト「何を不思議そうに見ているんですか?光さん」

光「……………」

光は黙ってゼロたちを指す。その指された先の光景はただゼロが仲間を心配している。まあ、普通の光景だ。

ミラーナイト「ゼロたちが何か変ですか？」

光「ねえ……？なんで他人のことを心配すんの？」

へっ……？

突然の質問に解答に困るミラーナイト。

光「自分が怪我をしたわけじゃないじゃない。別に心配なんかする必要なんかないじゃない」

そう……赤の他人なんか心配する必要なんかない……。

小さい時、私が親戚のところへ怪我をすると心配されるどころか、

『なんで厄介ごとを起こすのかねえ……何？私たちへの嫌が

らせ・・・？』

その時私は、思った。別に他人のことで心配なんかする必要なんかないことを、他人には無関心でいる方が良いということを。都合のいい時だけ助けて、都合の悪い時なんかは、すぐに見捨てるじゃない・・・そう、人間なんかはただその程度の生き物・・・きつと、ウルトラマンたちにもいるに決まっている。

。。。。  
そうよ、別に一銭の得にもならないじゃない。人助けなんか。。。。

なのに、なんであいつは。。。。

タニンヲシンパイスル・・・？ 何故・・・何故？

光「分からないわ・・・私には絶対・・・！」

ミラーナイト「・・・」

ミラーナイトを含むウルティメイトフォースゼロたちは、ゼロから光の過去の話聞いた。まだきつと全部ではないが大体の事情、光が何故あんなひん曲がった性格になってしまったかがわかった。多分、嫌でも殆どはそうなるであろう、あんな扱いを受けては・・・自分もゼロに助けて貰わなければ。闇の力を言い訳にせずと戦いから逃げてただろう。大切だったはずの姫からも目を背けて、自分の醜い姿を誰にも見られないように、自分だけの為にきつと逃げ

続けた。だから、光の話を聞いて思った。

そうか・・・ただこの子は・・・

人に優しくすることをまだ知らないだけなんですネ・・・

この力を大切なものを守るために使おう。この気持ちを思い出させてくれたゼロには本当に感謝している。ミラーナイトはだから、優しく光に教えてあげた。

ミラーナイト「仲間なんですから、心配するのは当然ですよ・・・  
きっとゼロは私やグレンファイヤーが倒れた時にも心配してくれますよ。もちろん・・・貴方の時にもねえ・・・？」

光「・・・フンツ！私はまだ仲間なんかじゃないし、これからもならない」

大丈夫・・・ゆっくりと話し合えば、この人は・・・。

そうミラーナイトが思っている時、光の上に一つ落雷が落ちる。

光「っ！？」

ミラーナイト（しまった・っ！！）

バリアじゃ間に合わない・っ！！

そんな中、ついに落雷が光のところに落ちた。光が恐る恐る目を開けると目の前には、庇うように背中を光に向けていたミラーナイトの姿があった。嫌な焦げた匂いがミラーナイトからする。もしかすると思いい、ミラーナイトの体をよく見ると右肩に大火傷を負っていた。

ゼロ「！ミラーナイトッ！！」

光「なっ・・・！あんた馬鹿じゃないっ！？・・・何？それで恩でもつくったつもり！！」

その声には戸惑いと焦った様な様子が感じ取れる。

ミラーナイト「違いますよ・・・、私の力はこういう時のためにある力ですから」

光「それはこういう風に人を守るために怪我をする力のことかよッ！！！！」

ミラーナイト「違います・・・大切なもの守るための力で・・・」

光「・・・!!」

光は眉を顰める。光にはまだ分からないのだ、何故他人のために本気にならなければならないのか。

グレンファイヤー「ぐあー!!」

どんっ!と音を立て、空から地面へ突き落させたグレンファイヤー。体中がボロボロだが、なんとかグレンファイヤーは上半身を起き上げさせる。

グレンファイヤー「痛え〜・・・!!」

ゼロ「グレンファイヤー・・・!!」

傍に近寄り、グレンファイヤーに聞いた。

ゼロ「どうした!? 誰にやられた!」

グレンファイヤーは黙って空に浮かんでいる黒い雲を指した。

ゼロ「あの雲・・・？」

グレンファイヤー「ああ・・・。しかも、ただの雲じゃない。何か邪悪なオーラで周りにバリアを張ってやがる・・・！」

どうやら体中にある傷はバリアに何回も突っ込んで出来たものであるらしい。ゼロが空の雲を睨んでいると黒い雲から聞いたことがある声が降ってきた。

ベリアル「よう・・・ゼロッ！また会ったな！！」

ねっとりとし、まるで悪魔のようかの声が黒い空に響く。

ゼロ「お前はっ・・・！カイザー・ベリアル！！」

グレンファイヤー「まだ生きてたのか・・・！」

ミラーナイト「そんなっ・・・！」

ジャンボット「くそっ！姿を見せる！！」

沈黙の光の国の中で、四人の声がよく響く。黒い空からついに姿を出す、ベリアル。

ベリアル「くつくつ・・・！良い様だなあ！ ウルティメイトフ  
ォースゼロ！！」

光の国、史上最悪の元ウルトラマン。力を求めすぎて、光の国を  
追放された悪魔がゼロに復讐を誓い、蘇り帰ってきたのだ。

ベリアル「ぎやははは！！お前らに今ここでこの前の借りを返  
したいところだが、今日の目的はそれじゃない・・・。俺の前へ姿を  
現せ！<sup>ベガサス</sup>天馬の鍵！！」

ピカッー！！

光「きゃああー！！な、なんなの！？」

ペンダントから今までにない禍々しい色の闇を発し光の体に纏<sup>まと</sup>わ  
りつく。光が宙に浮き、勝手にベリアルの元へ導かれる遊な感じで  
引き寄せられる。ベリアルは乱暴に手の中に入れ、グツと握り潰す  
ような感じに持つ。

光「うつ・・・！ああ・・・ッ！！」

ゼロ「光！！ベリアル・・・ッ！てめ・・・っ！」

光を助けにベリアルのところへ突っ込むがバリアで跳ね返され、光に近づくことさえできない。

ゼロ「くそっ！」

リリー「キィー！」

傍にいたリリーが威嚇の声を上げ、ベリアルの手を噛みつくがまったくもって効果がなかった。

ベリアル「邪魔だあ！」

リリー「キュウー！・・・」

光「リリーッ！！！」

軽く振り払らわれて、地面に落ちていくリリー。光は必死に片手を伸ばすが届かなかった。

光（そんなんっ・・・！！）

リリーが・・・リリーが・・・！！だが、そんなことを思っている暇などなかった。

ベリアル「やっと捕まえたぞお……！！ヘガサス天馬の鍵！！」

光「あ、あなたはあの時の……！？」

そつだ、間違いない！あの時私を捕まえようとした時の声と同じだ。

ベリアル「覚えてたか……、だがもう遅い！プリンセス全ては俺様の手に揃った！！さああ、目覚めろ！！漆黒の姫！」

光「いやあああああ……！！！！！！」

光の悲鳴とも合図に光が黒い球体に吸い込まれる。パリパリと私の中の何かが壊れ始める。

そして、ついに

パリンッッ！！！！

ゼロ「光ッ！！くそ……！開きやがれ！！」

ベリアルのバリアをガンガンと叩くが、傷の一つも付かない。

くそっ！・・・くそおお！！！！

黒い球体から突如、闇の衣のようなドレスをし、漆黒の髪をした少女が繭を破るようになって出てきた。瞳が開くと、まるで人の血のように鮮やかな綺麗な紅色な瞳がウルトラマンたちを捉える。

ミラーナイト「ひ、光さん・・・？」

ジャンボット「いや・・・、様子が変だぞ・・・？」

光の髪の色はこげ茶色だったはずだ。あんな真っ黒な髪の色ではなかった。服装も大分変っている。

「ダーク」わが名はプリンセス・ダーク！。天馬ベカサスの鍵の破壊の意志ッー！！

カツと目を開き、その場の空気を威圧する。その場にいた者たちは光の体の中にいる何かの存在感を感じ取った。まるでデカイドラゴンがこっちらを目の前で睨んでいるかのような錯覚を与える。

ジャンボット（な、なんだ・・・！？この威圧感は・・・！）

グレンファイヤー（今にも押しつぶされそうだぜ・・・！！）

ミラーナイト（ゼロ・・・！光さん・・・！！）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ダーク「貴様が・・・鎖リミッターを壊し、闇を私に与え、出したのは・・・」

ベリアル「そうだ！さあ、檻から出してやった！印を俺様によこせ・・・！」

ベリアルはダーク何かを欲している。印って一体なんのことだ！？

ゼロ「おい！しっかりしろっ！！光ッ！どうしちゃったんだ！？」

ダーク「うる煩い・・・！気安く話しかけるなあ・・・！」

黒い波動の衝撃波がベリアルとゼロを襲う。

ベリアル「なっ・・・！？くはっ・・・！」

ゼロ「ぐあッ・・・！」

吹き飛ばされたゼロたちを見て、ダークは嘲笑うかのように下から見下ろす。

ダーク「下等生物ごときが・・・！」

ゆっくりとベリアルスの傍へ近づき、小さな体で軽々とベリアルスの胸ぐらを宙へと掴みあげるダーク。

ミラーナイト（ベリアルをあんなにあっさりと・・・！）

ベリアルは目の前にいるダークを睨みつけ、言葉を吐き捨てる。

ベリアル「このくそがっ・・・！！」

ダーク「ほう・・・大概の奴はこれで怯えて、私に殺されていったのがな・・・。面白い、いいだろう。一億年ぶりにお前に印を授けよう・・・ただし・・・」

手のひらに雷のようにバチバチという闇のエネルギーがダークの手に見える。

ダーク「最高級の痛みと共になあ!!」

そう言い、ベリアルルの胸にそれを押し付ける。そうするとベリアルルの苦しそうな悲鳴が響く。

ベリアルル「ぐあああああああ!!!!!!」

少女の笑みは残酷に刻まれ、まるでベリアルルの苦痛を餌にしているかのように。

ダーク「はい・印の転送完了だ」

ベリアルル「はあ・・・!はあ・・・っ!!印が手に入ったぞ・・・!!  
ハハハハ!!!!!!」

ベリアルルは壊れたおもちゃのように笑った。ダークは永い眠りからようやく解放されて、クスクスと笑う。

ダーク「これで私はやっと・・・!うっ・・・!?!」

突如、苦しみ、その場に蹲まひくるダーク。

グレンファイヤー「なんだ、なんだ?今度は何が起こったんだ

!？」

さっきまで笑っていたダークの様子が変だ。プルプルと小刻みに震え始めた。そうすると今度は一人でぶつぶつと呟き始めた。

ダーク「な、何故、貴様がここに・・・!？」

ライト『私と貴方は光と影の様な存在です。あなたが出てくれば私も封じられていた力が出てこれる!さあ、中へとお戻りなさい!!ダーク!』

ダーク「く、くぞっ・・・おのれ、ライドッ・・・め!!あああああ  
ああ!!!!」

頭を抑え、悲鳴を上げるダーク。先ほどにはない明るく優しい光が光の体を包む。そして、今度中から出てきたのは、さっきと真逆な真っ白な髪と光の衣を被り、海のように深い青色の瞳がウルトラマンたちを見つめる。そして、ベリアルの前と立ちはだかる。

ベリアル「貴様・・・何のつもりだ・・・？」

ライト「私はもう一つの天馬ベガサスの鍵の意志!平和を望む者です!  
!」

ベリアル「純白の姫プリンセスの方か・・・！」

ゼロ（純白の姫プリンセス・・・？）

ベリアル「の笑みは一変し、苦虫を噛み潰したような表情を見せる。

ライト「ここへの攻撃は私が認めません。悪いことは言いません・・天馬ベガサスのことは忘れ、この星から今すぐ去りなさい」

ベリアル「うるせえ！俺様に指図するなあ！！また俺がお前たちを・・・」

ライト「っ！！・・・残念ですがあなたにはここから強制的に排除させていただきますっ！」

両手に光のパワーを集め、ベリアルにぶつける。光と共にベリアルベリアルの悲鳴が聞こえたが、すぐにそれは止んだ。それはそのはずだ・・何故なら本当にベリアルは消えていた。

ライト「・・・」

黒く覆っていた雲が晴れ、優しい光が漏れだす。まるで、時が動き出したかのように他のウルトラマンたちの声が聞こえ始めた。エースたちがこちらにようやく応援にきた。

セブン「ゼロ！」

ゼロ「オヤジ！遅えよんだよ！！！」

セブン「ダークロプスに手間取ってしまったてな……。んっ？あの子は……！？」

エース・メビウス・キング「……！！！！」

ライトの姿を見て身構える。ライトはそつとゼロたちの目の前へ近寄り、ドレスのスカート部分をちよっぴり持ちながら、ぺこりとお辞儀する。

ライト「初めまして、私は天馬<sup>ヘガサス</sup>の鍵の意志の一つのプリンセス・ライトと言います。昔は、天馬族という種族の国で出来ていた国の姫をしておりました……」

ジャンボット・ミラーナイト・グレンファイヤー「……えええええ！！！！？」

ゼロ（（ひ、光がお姫様！！？））



覚醒 光と闇の姫（後書き）

あああああ！！！ベリアルの喋り方があんまりよくわからない！！  
なんか変だったらごめんなさい！><！！！！！！

天馬の悲劇 (前書き)

光と闇・・・それは無を現すもの

光が消えれば、闇だけが残る静寂の世界 闇が消えれば、光だけが残る禁断の世界

二つは自分が生き残るために他方を殺そうとする

どちらかが消えれば、自分も存在できないはずなのに・・・

そう 二つの存在は とても矛盾している

矛盾シテイルハズナノニ・・・

決して離れはしないし、離れもできない

重なることのない世界と狭間そして、境目

光と影 白と黒 理想と現実 天使と悪魔 愛と裏切り 喜びと嘆  
き……………

全部……全部っ！ この世界は矛盾している

一体誰と誰がこんな化<sup>もの</sup>け物を生み出したのであろう……？

いつ どこで なののために……………？

もし、これが神様が作った物語なら私は間違いなく神様を恨ん  
だろう……………

私ガ、イツドコデアンタニナニヲシタ？

ナンデ コンナカナシイオモイヲシナケレバナラナイ？

悲しみは一億経っても10年経っても癒されない……………

一億年前……………？

なんだろう そんな前になんか存在してるはずがないのに なん  
でだろう この感情

とても とても 悲しい・・・

知らないのに知っている 知っているはずがないのに知ってし  
まっている

胸が痛い・・・ どうして・・・？

ドウシテ コンナニ イタイノダロウ・・・？

## 天馬の悲劇

ゼロ「お前は一体誰なんだ……？」

ゼロには感じる。ライトは抑えているつもりだが、中に凄まじいほどの力が眠っている。これならダークという奴とも互角に戦えるであろう。

ライト「いいでしょう……。お話します。でも、始めは私の正体ではなく、もっと昔……。そう、一億千年前の話」

グレンファイヤー「い、一億千年前……！？マジかよ……」

ライトは関係のないウルトラマンたちに聞こえないよう周りにバリアに近い膜のようなものを張った。そして、ライトは悲しそうに話し始めた……。天馬族が出来た真の事実を……。

ライト「私たちの先祖はかつてレイブラット星人という種族にとても近い存在の力の持ち主でした」

ミラーナイト「レ、レイブラット星人ですか・・・!?」

ゼロ「なんだ？そのレイブラットって・・・」

ミラーナイト「わ、私もあまり詳しく知りませんがこの前、古い本を調べていたら載っていたんです！レイブラット星人とは、幾つもの星を破壊するほどの恐ろしいパワーを持っていると・・・っ！」

ミラーナイトの話にゆっくりと頷くライト。

ライト「そうです・・・。レイブラット星人はただ破壊と殺戮と支配を楽しむ、恐ろしいものたちでした」

くしゃりと眉を顰めるライト。どうやら、かなりひどいものだったらしい・・・。

ライト「だけど、私たちの先祖は違いました。決して無意味なものなどは破壊せず、ただ平穩に生きていました。・・・だけど、そこにある悲劇が起こりました。・・。」

キング「その悲劇とは。・・？」

ライト「はい。・・。私たち、種族の先祖たちは群れで生きるものたちでした。・・。そこに突如、巨大な彗星がぶつかり、ある一つの天馬が逸れて、ある星に墜落しました。それが私たちの先祖になり、そして私たちが暮らす星となったのです」

エース「。・・。・。」

ジャンボット「だが、それがなんで悲劇なんだ？どっちかと言うと自分たちが生まれることが出来たのはそのおかげだろう？」

ライト「そうですね。・・。でも」

ライトは口では笑っているが、瞳はとても悲しそうに歪ませる。

ライト「大いなる力があれば必ず、大いなる悲しみも呼んでしまつのですよ。・・。」

ゼロ「!・・・」

ライトは瞳を地面に伏せながら、話す。

ライト「その星にはもう人間と同じ生き物が住んでいたのですよ。戦争もしていたし、各国で争いごともありました・・・。そんな中、天馬の噂はすぐに広まりました・・・ゼロ、あなたはあの歌を聞きましたよね？」

ゼロ「ま、まさか!?!あの歌は・・・ッ!!!」

ライト「そう・・・本当にあった話を元にして出来た、悲劇の歌です」

ライトは歌を知らないウルトラマンやもう一度ゼロに聞かせるため天馬の悲劇を唄った。

ある昔      ある時代

迷子の一匹の天馬が 泉で羽を休ませた

泉にいつも移るのは 空を駆ける星々たち

天馬が通れば、地が潤い、湖は清らかに、草木は恵まれん

天馬は孤高の騎士 いつも一匹 いつも孤独 いつも仲間を  
探した

だが、

誰もが天馬を欲し 命を狙い 傷つけた

怒り狂った天馬は 復讐を誓い いくつもの国を滅ぼした

天馬が地を駆ければ 地は崩れ、国の王たちは死んでいく

天馬が空に羽ばたけば 風が荒れ狂った

天馬が人を呪えば 人々が死んでいった

人々は許しを請うが 天馬は人々を苦しめ続けた

羽は黒く、霞かすみ 穢れ 天に戻れぬと 天馬は嘆いた

赤き瞳から 血を流し、植物は 悲しみに枯れていった・

天馬は 国を作り 傷を癒さんと 眠りについた そして 封  
印された

国の 囚われの姫プリンセス

白木蓮はくもくれんのドレス着て 今日も嘆き、唄う

決して目覚めらせてはならぬと… 哀れな天馬を

次 扉開くとき 運命は死に 王の印 目覚めん

ライト「この歌は私たち王族のものだけが知る歌です・」

ゼロ「なんでだ・・・？逃げることもできただろ！なんでわざわざくる・・・」

確かに天馬を利用した奴らも悪いが、さすがにやりすぎだと思っつい、ゼロも声を荒上げる。

ライト「無理ですよ・・・、ゼロ」

ゼロ「なっ・・・！？」

ミラーナイト「なんですか！・・・」

ライト「だって私たちの先祖は・・・機械生命体だったんですもの」

メビウス「えっ！？・・・」

セブン「何・・・！？」

キング「本当なのか・・・！それは・・・」

「どうやらオヤジたちは機械生命体がどういうものなのかを知っているらしい。」

ゼロ「オヤジ、機械生命体って・・・？」

セブン「・・・機械生命体とは、体は機械そのものだが、感情や知性は人間と・・・いや、人間以上のものを持ち、そして生命力もとても強いとされている、でもどうやら人間の言葉は喋れなく、石や宝石などの姿や性質が似ているらしい。だが、実際にいるとは思っていなかった・・・架空のものと本には記されていたからな」

ライト「残念ながら、すでにもうこの時代には機械生命体は滅んでいきます」

そのライトの一言にグレンファイヤーは疑問を持つ。

グレンファイヤー「待ってよ・・・？なんで滅んじゃったんだよ？機械生命体には、強い生命力があったんだろっ？」

ライト「確かに強い生命力はありますが、無敵なわけではありません。傷つけば、弱り、死にますし、お互いに戦い合って、滅んでしまった機械生命体たちも数多くあります・・・」

ミラーナイト「なんだか・・・とても悲しいですね。同じものなのに争ってどっちも滅んでしまうなんて・・・」

ライト「はい・・・まったくもってその通りです。でも、機械生命体じゃなくてもあつてもきつと変わらなかつたと思います・・・。多分、天馬を利用しようとしたものたち、あるいは利用した奴らは気付かなかつたんでしょう・・・。その石に意志があつたということ・・・。そして、他の機械生命体も・・・人間も・・・ちよつとした違いも認められず、傷つけてしまうものや力を求めてしまうものがあれば、ずっとこの過ちは繰り返されてしまいます・・・」

そんな話の中、また新たな疑問がライトに来る。

ジャンボット「じゃあ、昔の君は機械だったのか？」

機械で出来ているジャンボットがこんな質問をするのも何か少し違和感を感じるが、ジャンボットの目は真剣なので黙っておこう。



。印を持っていないかぎり、決して扉は姿を現しません。悔しいですが、今のところ印さしごを持っているのはベリアルだけです」

ミラーナイト「そんな・・・」

ずんと一気に重い空気になり、ライトが必死になってこう付け加える。

ライト「ちよっ！みなさん・・・！？そ、そんなに落ち込まないでください、実はまだ印は作ることができるんです」

ゼロ「ほ、本当か！？」

ガツと顔を上げ、ライトに詰め寄る。ライトは元気よく「はい！ハ！」と頷いた。エースたちは安堵を付き、グレンファイヤーは炎の頭を癖なのか上と撫で上げる。

グレンファイヤー「たくっ・・・そうなら先に言えよ。まあ、俺はそうだと思ったがな！」

ジャンボット「嘘つけっ！そんな風にはまったく見えなかったぞー！」

グレンファイヤー「いちいちづるせえな！焼き鳥ー！」

ジャンボット「だ・か・ら、ジャンボットだと言ってるだろう  
この馬鹿がッー！」

キーキー言う二人にはもう慣れてきた。でも、ライトが非常に言  
いにくそうにこうも続けた。

ライト「でも、印はもともと一つしかないものなので、私が悪  
魔で用意するのは合鍵のようなものです、一人にしか託すこと  
ができないんです。すみません、今の私力では印は一つを作るで  
精一杯なんです・・・><」

ウルティメイトフォースゼロ「……えっ……？」

ウルティメイトフォースゼロは互いに他の者たちを見つめ合う。  
だが、すぐに答えはでた。

グレンファイヤー「ほらよ」

ゼロ「うわぁー!？」

グレンファイヤーに背中を押され、みんなより一歩前ぐらいに出

される。

ゼロ「何しやがる!」

ジャンボット「何ってお前が印を受け取るのだろう?早く済ませて来い」

ゼロ「えっ・・・?」

ミラーナイト「隠しても無駄ですよ。一番やりたいって顔をされてましたし、それに私たちのリーダーはゼロだけですから」

ゼロ「……………」

ゼロは真剣な表情を見せ、仲間の顔を見る。そして、新たに決意を改めライトに向き直る。

ゼロ「ライト……………」

ライト「覚悟は決まっていますよね……。わかりました……………」

ライトの手に金色の光が包み込む。それをちよこんと優しくゼロの手のひらに乗せる。

ライト「ゼロ・・・！あなたに光の印を差し上げます・・・」

ゼロ「おうー！」

ゼロの手に不思議な模様が浮かび上がり、ゼロの手のひらから漏れていた金色の光は不思議な模様と共に徐々に弱まり、消えていく。

ライト「印、転送完了です・・・」

ゼロ「・・・」

不思議そうに自分の右手を見るゼロ。ベリアルは印を受け取ったとき苦しそうにしていたが、今回痛みはまったく感じられなかった。

ライト「うっ！」

宙に軽々浮いていた光の体がどんと急降下していた。

ゼロ「うおー！」

なんとかライトを手の内にキャッチできたが、また光の体の様子がおかしくなってきた。

ゼロ「どうした！おい！！」

ライト「はあ・・・はあ・・・！光・・・が目覚めます・・・ッ！！」

ミラーナイト「光さんが！？」

ライトは苦しい息継ぎの中、ゼロたちに頼みごとをした。それは、

ジャンボット「光にこのことを話さないでいてほしい・・・？」

ライト「そうです・・・ッ、あの子がこの話を聞けばもしかしたら精神が混乱し、大変なことになってしまうかもしれません・・・ッ！！そう・・・きつとあのことも思い出してしまう・・・！！」

ゼロ「あのこと・・・？」

ライト「ッ！・・・何でもありません。私が最後にこの子に力を  
さ・・・ずけ・・・ます・・・後は・・・取り合えず、お願い・・・しま・・・  
っ・・・！」

プツリと突然切れたテレビのように何も動かなくなる光の体。回  
りを包み膜が消え、そして、突然と光の体から真っ白な光が漏れだ  
す。

ゼロ「うっ！」

エース「くっ・・・！」

ジャンボット「なんだ！？この光は・・・っ！」

ズツシリ・・・

突然、手に重たいものを感じる。なんとそこには、さっきまで米  
粒サイズだった光の体が自分たちと同じぐらいの大きさになってい  
る。

ゼロ「なっ・・・！！？」

光「んっ・・・！！」は・・・」

パチクリと目を覚ます光。どうやら、いつもの光らしい。姿も格好もいつの間にもやら元にも戻っている。

光「なんであんたが・・・って！」

光はすぐ気づきいた。この格好もしかして・・・お姫様抱っこ？

光「嫌アアアアア！！！！！！」

鳥肌が立つ肌を抑えながら、私はゼロにアツパーを決めた。

ゼロ「グハッ！！」

光「って言うか、なんで私デカくなってるんだああ！！」

「ぎああああ！！」と光の悲鳴にも近い声もその場に響き渡る。そこにいたウルトラマンたちはみなゼロを見て、なんとも理不尽なと思ったのは言うまでもない。

天馬の悲劇（後書き）

ミラーナイトに混乱している光の鎮静を頼むが、きっと長くは持たないであろう。

ゼロ「あっ！..！」

グレンファイヤー「な、なんだよ！」

ゼロ「しまった..！あいつの正体まだ聞いてなかった..！」

ゼロ（そう言えば、光..あの歌を知ってたのか..？）

他のことを考えていて動きが少し止まるが、次のグレンのセリフで我に戻る。

グレンファイヤー「.....。何やってんだお前..！」

カッチン！！

ゼロ「何だよ！！人のこと言えんのかよ！グレンファイヤーは..！」

グレンファイヤー「フン！お前みたいに正体聞き忘れる奴みたいな奴ではねえよ！俺はな！！」

ゼロ「なんだと・・・てめえ！もういっぺん言ってみろ！！」

グレンファイヤー「ああ！言ってる！！」

小さい子供みたいに火花を散らすゼロとグレンファイヤー。負傷を負っているジャンボットだけがその様子を見て、思う。

ジャンボット（本当にこの先大丈夫なのか？このチーム・・・）

と今回はジャンボットが頭を抱える。

頼りにならない奴

ミラーナイト「光さん・・・これ」

ミラーナイトの手からリリーがひょこりと顔を見せる。

光「!!!」

目をキラキラさせて、何も言わずそれをミラーナイトから受け取る光。自分がデカくなってしまったせいか、もの凄くリリーが小さく見える。

光「あんだ一番頼りなさそうに見えるけど、役に立つときゃー役に立つのね」

ミラーナイト「あははは・・・」

ミラーナイト（い、今は褒められたんでしょうか・・・？）

そんなことを疑問に思うミラーナイトだが、光はまだ何か不安そうだ。

ミラーナイト「????どうしたんですか?」

光「どうしたもなにも……こんなに大きくなちゃって……これからどうしろって言うのよ!」

これじゃ食事や風呂や着替えどころか、自分の部屋に入ることすらできない。光にとってはなんとというありがた迷惑な力だった。

光「もっつ!!!どうやって戻ればいいのよー!!!(怒)」

そう心から思った時だった、さっきのように光の体から光りが溢れ出た。そして、光の姿がどんどんと縮んでいく。光が止んだ時にはミラーナイトの視界から光の姿が消えていた。

ミラーナイト「ひ、光さん!?!」

メビウス「どうしたんだっ!?!」

突然の光とミラーナイトの慌てぶりに近くにメビウスもその場に駆けつける。

光「ここよ！どこ見てんのよ、こっち！！ミラーなんとかと  
んとか！！」

え？っと思いだを見るとまた光は元の大きさの姿に戻っていた。  
あつ、でも私ミラーなんとかじゃなくて、ミラーナイトなんですけ  
れども……。後、隣の人はメビウスですよ……。

ミラーナイト「よかった……ただ元の大きさに戻っただけなん  
ですね？」

メビウス「もしかして……。っ！ライトが最後に言っていた力  
をって……。このことだったんじゃないか？」

ミラーナイト「えっ……。？あつ……。！！」

察しが良いミラーナイトはメビウスの言いたいことがすぐ分かっ  
た。そういえば、ライトは何か最後に言っていた。

ライト「私が最後にこの子に力をさ……ずけ……ます……」

力というのはこのことか・・・とすぐ理解した。こうなったら光にお願いして確かめるしかない。

ミラーナイト「すみません、光さん。さつきとは逆に大きくなりたいと思ってくれませんか？」

光「はあ！？嫌よ！せつかく元に戻れたのになんでそんなこと・・・っ！」

メビウス「そこをなんとかっ！」

ミラーナイト「お願いします、光さん！」

光「うっ・・・！」

さつきミラーナイトにはリリーを助けてくれた（一応自分も）という恩がある。気に食わないがそれはれっきとした事実であった。

光「わ、わかったわよ！やりやいいんでしょ！やりやあー！」

こうなったらやけくそだと思い、さつきとは逆に大きくなりたいと願う光。そうするとまただ。

光「えっ？えええ！！？」

！  
ミラーナイトとメビウスが少し高い大きさ。と言うことはまた・

光「お、大きくなってらうううう！！！！！」

今度は肩に乗ってたりリーも一緒だ。私、同様何故が大きくなってる。だが、そんなことよりも私はミラーナイトに憤慨していた。

光「何すんじゃ！！このポケット！どアホツツ！！！」

私はミラーナイトに蹴りを何発も入れる。

ミラーナイト「痛あ！！痛いですよっ><！光さん！！！」

光「当たり前じゃ！この馬鹿タレツ！！本気で蹴ってたんだから！！！！！」

メビウス（こ、怖っ・・・！！！！）

さすがのメビウスもこれは怖い。でも、これではつきりした。多分ライトが光に授けた力とは・

自分の意志で体の大きさを変えられる力

ここで生きていくには確かにちよつと不便な大きさだったので、丁度いい力だ。これで光が間違つても踏みつぶされるといふ心配はなくなった。

メビウス（（それにしても・・））

ミラーナイト「ちよつ・・！ひ、光さん！？い、石は本当にマズいですって・・！！」（汗）

両手に大きな石を持ち、それを目の前にいるミラーナイトに投げ飛ばそうとしている光の姿がある。

光「大丈夫よ・・地球には鏡を治す職人さんがいっぱい居たし・  
・・ここで壊れてもきつと誰かにすぐに直して貰えるはずよ・・？」

ゴゴゴゴオオ・・・と黒いオーラとキラリと光る野獣のような目。ニッコリと今までにない笑顔だが、何故かその天使のような笑みが逆に怖い。

うん、きつと睨むだけであれば人を殺れる目だ。

メビウスもあんなに怯えているミラーナイトは初めて見たぐらいだ。

メビウス（ち、地球の女性ってこんなに怖かったけ？・・・）  
（汗）（汗）

あれならきつとほとんどの怪獣は腰を抜かすか、逃げ帰るであろう。

ミラーナイト「ちよっ！！あの・・・っ！！？あああああッッ！！！！？？・・・」

ミラーナイトは、その後の記憶がないと遠い目で語ったのでした。  
チャンチャン

頼りにならない奴（後書き）

なんかすみません……。光の大きさを説明するにはミラーナイトを生贄にするしかなかったんです……！

あつ、まあ^^次にはちゃんと復活してるんですけどすけれども（笑）  
でも、ミラーナイトファンの人本当ごめんなさいい〜！！

悪夢と光の国（前書き）

許さない・・・許さない・・・っ！絶対に許さない・・・！！

声が聞こえる・・・あなたは誰・・・？

憎しみに満ちた声だったが、何故か震えていた　そう　これは泣いているんだ

様々な声がざわざわと耳障りのように聞こえる

殺してやる　裏切った　憎い　信じてたのに　怒り　苦しい  
悲しい　辛い　痛い　助けて・・・

憎悪の言葉が並べられる　でも　その子は泣いていた

どうしてなのよ・・・っ！　兄様・・・　なんで・・・？　なんで  
私を・・・っ！

暗闇の中、黒いドレスを着てしゃがんで涙を流してる女の子がは

つきりと何故が見えた

あなたは 一体 誰・・・？

声を掛けた そしたら、少女は 振り返り 怒り 怪物の様な醜  
い声で叫んだ

！！ 見たな・・・？ 偽物風情がああ・・・っ！勝手に私の心を覗  
くなあああ！！！！！！

強い風がその場に起こり、吹き飛ばされそうになる

その風に乗る、そして

黒い子は 私に襲いかかってきた

## 悪夢と光の国

光「はあゝ・・・」

いつもより深いため息をつく光。今日は、ゼロたちが私が大きくなれたので光の国を案内してくれるというのだ。まったく・・・余計なお世話だっと思ってんのに・・・。

グレンファイヤー「どうしたんだ？そんな溜息ついてると幸せが逃げていくぜ」

光「うっさい。そんなことで人の幸せが逃げていくはずないでしょ、バーカ」

グレンファイヤー「チツ・・・！可愛くねえの！」

光「あつそ」

そうなのだ、私はこの頃変な夢ばっか見ているような気がする。はつきりとはしないが薄らと記憶があるようなないような・・・？とにかく微妙なところである。おかげさまで今日は、寝不足だ。

光（「ったく・・・。私は、ゆっくり寝てたいのにあいつらは何

考えてんだか（）

そうこれはゼロたちの作戦でもあった。これを機に、光との中を縮めよう。

ミラーナイト（）「ここは、光の国のいい場所を教えた方が得策でしょうー（）」

ゼロ（）「ああ！そうだな！（）」

ジャンボット（）「本当に大丈夫なのか・・・？（）」

ラウンド1 光の国の子供のウルトラマンと触れ合おう！

目には目を子供には子供を！いい案だと思ったが、その相手のウルトラマンの子供がかなりの生意気小僧たちだった。

ウルトラマン 子供A「やゝい！ここまで追いでゝー！（）あっかんべー！（）」

ウルトラマン 子供B「あいつ、変な格好してるぜ！あははははー！！」

ウルトラマン 子供C「本当だ！ぎゃははははー！！」

光「……………」

光はさすがに子供に手を出すのはマズいと思っていたのか、ぎゅと手に拳を作り体を震えさせていたが、次の言葉で光がキレる。

ウルトラマン 子供A「あっ！あいつ震えてやがるぜ！！ダッ  
セー！（笑）」

ブチッ！！

ミラーナイト（あっ！）

ゼロ・ジャンボット・グレンファイヤー（マ、マズい……ッ  
！！）

動き出す光の体をゼロとジャンボットとグレンファイヤー三人係で止める。必死でミラーナイトは光を宥める。

ミラーナイト「お、落ち着いてください！！光さん！」

ジャンボット「そうだ！一旦、落ち着け！！光」

光「何言ってるの？あの子たちが言ったのよ・・・？ここまでおいでって・・・だからね、ちょっとあいつら生け捕ってくるわ・・・」

おいおいおい！！なんか最後に言ってることが怖えぞお！？

やばい、光の目がマジだ・・・。まあ、俺もあんなこと言われたらキレルと思うけど・・・。光の怒りのパワーは思いのほか強く、俺たちが三人係で止めてると言うのにずると光の足は止まらない。このままでは、地球人がウルトラマンの子供を半殺しにするという前代未聞の事件が起こってしまう！なんとしてもそれだけは防がなくては・・・！！

ゼロ「止まねって・・・！！」

グレンファイヤー「光！ガキ相手に何マジになってんだよ！！（汗）」

光「煩いわ、今ここで奴らに人生の厳しさというものを教えてやる・・・」

ドッカソツツツツ！！！！！！

ゼロ「うわああああ！！！！？？」

ウルトラマン 子供B「わあ！？何すんだ！いつつ僕らに地球を守ってもらっているクセに！！」

光「うるせええ！！あんたみたいな奴に守ってもらつづぐらいなら、地球が滅びたほうがマシよ！」

ウルトラマン 子供C「うわああんっっ！！！！」

ジャンボット「誰かあいつを止めるおおー！！」

ミラーナイト「死ぬうううう！！！！」

グレンファイヤー「光様がご乱心じゃあああ！！！！？？」

あまりに恐ろしいことが起こっていますのでよい子の読者には教えられないよ

なので、その後の出来事は読者のみなさんのご想像にお任せします。。。

ラウンド2 ウルトラマンの歴史や宇宙について知ろう！

ここは光の国ある国立図書館。ミラーナイトやジャンボットはよくここで宇宙の歴史など難しい勉強をしている。光はさっそく本を手取るが、眉をすぐ顰める。

光「あのさ・・私、ウルトラマン語なんてわからないわよ・・  
？」

ミラーナイト・ジャンボット「・・・あつ!?!?」

しまった・・そこは、盲点だった。がっくりとミラーナイトたちは頂垂れる。

ゼロ「意外とあいつらって・・・」

グレンファイヤー「ああ。馬鹿だよな・・」

ミラーナイト・ジャンボット「ガン!?!?!」

馬鹿な二人に馬鹿と言われたのが余程ショックだったのか、その場に石像のように固まるミラーナイトとジャンボット。呆れた風に溜息をつき、本を本棚に戻す光。

光（ああ、本当にもう地球に帰ってえ・・・）

生まれて初めて平和が一番と思う光だった・・。肩に乗っているリリーも苦笑いしてるように見える。気のせいか・・?

ラウンド3 ウルトラマンの偉い人と会おう!!

光「で、今度は何？」

冷え切った目で光に見られるウルティメイトフォースゼロたち。

グレンファイヤー（おい、あの目・・・）

ジャンボット（ああ・・・完全に私たち、呆れられているな・・・汗）

ゼロ「こ、今度はあるウルトラマンに会いに行くぞ!!」

そんな冷え切った気分の中、気分を少しでも良くしようと仕切り直しのように声を上げて、あるところへと向かう。そこは、いつもレオと組手などをしている特殊な訓練場だった。中に入るとそこには、なんと・・・。

ウルトラの父「遅かったな、ゼロ」

光「誰？あのウルトラマン」

光はウルトラマンの姿を見ても、ウルトラマンに関する知識がないため全く分からない。ミラーナイトは光に優しくてかつ、分かりやすく説明をした。

ミラーナイト「あのウルトラマンの名前はウルトラの父。名前の通り、ウルトラマンの父とも呼ばれていて、ウルトラマンの誰からも尊敬させているもの凄いウルトラマンなんですよ。今は、光の国の宇宙警備隊の大隊長を及び最高司令官をやっています」

光「フーン・・・」

ミラーナイトの説明に興味なさそうに返事をする光。ウルトラの父も光の視線に気づく。

ウルトラの父「ほお・・・？そうか君が噂の地球人の少女か・・・」

ウルトラの父は目を細め、光の視線に合わせしゃがみ、優しく光に接する。だが、光はゼロの後ろに隠れ、まるで猫が威嚇するようにシャー！！と声を上げる。

ゼロ「な、なんなんだ？」

ウルトラの父「ははは！！！」

最初はキョトンとしたウルトラの父だが、だんだんとその様子が

可笑しくなったのか、ウルトラの父は珍しく笑った。

光「何が可笑しいのよ!!」（怒）

急に笑われ、光は憤慨とする。

ウルトラの父「いやあ、すまん。そうか・・・地球か・・・懐かしいな・・・」

つつい地球という言葉で昔を思い出してしまつ。

光「何？あんだ・・・地球に行ったことがあるの？」

ウルトラの父「ああ、昔に少しだけだったけどな・・・。私以外にも数多くのウルトラマンが地球に行き、色々逆に学ばせて貰ったものだ・・・」

光「へえ・・・」

地球とウルトラマンはそんな深い繋がりがあつたんだ・・・。

ウルトラの父「おや？もうこんな時間か・・・。すまないが時間だ。私は仕事に戻る」

そう言い出ていく前にウルトラの父は光に聞こえないようゼロの肩に手を置き、こつこつ囁く。

ウルトラの父（よかったな、ゼロ。まだチャンスはあるみたいだぞ・・・）（）

ゼロ「・・・はあ？」

それはどういう意味だ？と聞こうとしたが、ウルトラの父は黙って、手をひらひらさせて行ってしまった・・・。

ウルトラの父（ゼロたちは、まだ気づいてないみたいだな・・・あの子の心が・・・）（）

光は、あんな態度を取っているが、本当に嫌いならああいうタイプは完全に無視をするはずだ。でも、光はゼロたちに本気でぶつかっている。もちろん、あの地球人の方も気づいてはいないだろう。自分の本当の気持ちに。

ウルトラの父（あのゼロに懐いた地球人か・・・）（）

昔のゼロではそう考えられないが、面白い。ウルトラの父にはとても興味がそそられる話だ。

ウルトラの父「だが・・・」

ウルトラの父（あの子の気持ちに気づけないとは・・・まだまだあいつらも半人前だな）

ウルトラの父はゆっくりと仕事場に戻っていった。

## 悪夢と光の国（後書き）

感想、お気に入り登録、評価をしてくれたみなさん、ありがとうございます！  
ございました！！^^

まだまだ感想待ってますので暇だったらぜひお願いします！！

君にはきつと分からない(前書き)

私は人間が嫌いだ　　煩いし、嗜好きだし、その上、よく他人のことを知りたがる

おい、お前の家両親ないんだよな・・・？

こいつ知ってか、親戚にたらい回しにされて嫌々ここに来たらしいぜ？

さつさと転校しねえかな

実に鬱陶しい　不愉快な生き物だ

言ってもないことや思ってもないようなことを勝手に作り上げ、弱い人間を必ず虐める。

本当に怖いものって何？

人食い鮫？　幽霊？　化け物？　生きている人間？　違う・・・本当に恐ろしいのは

そんな人間を生み出してしまった世界の秩序と社会

この世界は見た目は美しいけれども、中身は疾うに腐っているの

だ

弱いものは死んで、強きものだけが生き残る まさに弱肉強食と言つ言葉が相応しいだろう

人は一人で生きられない・・・？そんなの偽善者の綺麗事だ・・・

じゃあなんで弱いものたちはあんな簡単に死ぬの？

何故この世の中に弱肉強食と言つ言葉が存在する？

答えはとても分かりやすい・・・最初から決まっているの 生き残る者と死ぬ者は

運命の輪は決して消えない 呪縛しゑの様なもの 人間の罪の印しゑ

私はそんな世界に呆れたのね・・・きつと・・・

昔、失くしたはずの涙が頬を伝う

そして、どこかで本当は願っている 世界が滅んでしまうことを

私の両親をあつさりと忘れた地球とこの世の中

こんな世界なんか壊れてしまえと・・・

私は証明してみせる 人は一人で生きられるということ

仲間なんて必要ないコトヲ・・・

君にはきつと分からない

光「……………」

今日もよく晴れている。こっちの世界の空は。私が青空を見上げているとゼロが注意してきた。

ゼロ「おい、上見て歩いてんとぶつかるぞ」

光「フン、余計なお世話よ」

ゼロたちの光の国の案内はいつになったら終わるのだろうか？と思いつながら付いていく光。これからなんとどっかの国のお姫様に会いにくらしい。ゼロの話によるとミラーナイトとジャンボットたちの国のお姫様で、名前はエメラナ姫。エメラル鉱石という鉱石がたくさん取れる国だという。

光（まあ、興味はないけど……）

早く終わらせて、家でゆっくりと寝たい。そう思いながら、歩くこと十分。なんか物凄いゴージャスな建物についた。

光（わぁ……汗）さすが、お姫様。住む世界が違うという

かなんというか・・・)

ぶっちゃけこの中に入りたくない。入ってもいいこと一つもなさそうだし、むしろ疲れるわ・・・。

ジャンボット「さっ！入るぞ。姫様はこの奥だ」

結局、中に入れられるし・・・うわぁ・・・！どこも真っ白。

神殿のよな建物の奥にどんどんと足を進めるゼロたち。その前に私は何故か小さくなるようにミラーナイトに頼まれた。ったく！小さくなるんじゃないやなくて元に戻るって言えっの！お前らが無駄に大きいんだなんだよ！！そんなイライラした中、一番奥の部屋から能天気で明るく元気な少女の声がした。

エメラナ姫「ゼロ！こっちですよー！！」

ゼロ「おうつ！久しぶりだな」

ひよこりと顔を出し、ぶんぶんと大きく手を振る真っ白なふわふわなドレスを着た女の子がいた。歳は、私と近そう。でも、そんな少女をジャンボットはすぐに注意する。

ジャンボット「姫様っ！はしたないですよ！！それにいつどこで姫のお命を狙っている不届き者がいるか分からないんですよ！」

ミラーナイト「まあまあ、落ち着いてください、ジャンボット。少し神経質になりすぎですよ」

慣れた手つきでゆっくりとジャンボットを宥めるミラーナイト。その少女は可愛い頬をプックラと膨らませ、プイツとジャンボットの反対方向を見る。

エメラナ姫「そうですよ、全然怪しい者なんていないじゃないですか。それなのにジャンボットやミラーナイトたちは外に出て楽しそうに……。私だけ除け者じゃないですか……」

さっきの明るい態度から一変、急にしゅんとなるエメラナ姫。そんな姫の姿を見て流石のジャンボットがうつ……。！と声を詰まらせる。

グレンファイヤー「うわぁ……。ジャンボットがエメラナ姫を虐めてる〜！」

光「最低ね……。男の風上にも置けないわ……」

ジャンボット」なっ・・・！違っっ！！私は姫様のことを思っ  
て」

光「あっ、そういう言い訳発言いいから。って言うかなんかそ  
の気持ち、重い・・・」

ジャンボット「！！！」

お、重いと言われた！この姫様の対する熱い思いが・・・！！

シユン・・・と端で密かに落ち込むジャンボットにゼロがドンマイ  
と言う風に肩に手を掛ける。そんなゼロたちは忘れられ、話はどん  
どんと進んでいく。

ミラーナイト「光さん、こちらはエメラナ姫。この前話した通  
り、エスメラルダ国の第二王女。私の国のお姫様です」

エメラナ姫「初めまして、エメラナと申します！あの・・・貴方  
の名前は・・・？」

光「・・・フィン・・・」

ああ・・・やっぱりですか・・・。

ミラーナイトは笑ってはいるが、困ったように眉らへんは八の字になっている。仕方がないから、ミラーナイトが光に変わって自己紹介をする。

ミラーナイト「姫。こちらは、梅崎光さん。地球という星から来たそうです」

エメラナ姫「まあ！お歳はお幾つなんですか？」

以上に目をキラキラさせ質問してくるので、気迫に負け光は一応答えた。

光「じゅ・・・十五歳・・・」

エメラナ姫「じゃあ、私と歳は近いのですね！」

ぱあとまた目を光らせ、嬉しそうに話を掛けてくるエメラナ姫。

な、なんか調子狂う・・・

はつきり言って今までにないタイプだ。こういう時はどういう対処を取ればいいのか？取り合えずここはいつもの毒舌で・・・！

光「はあっ・・・！どんなお姫様かと思ったら、能天気なお姫様ね！」

ジャンボット「光っ！」

ジャンボットは光を咎めるがエメラナ姫は光の言葉の意味に気づいてないのか、恥ずかしそうに答える。

エメラナ姫「えへへ・・・／＼／＼やっぱりそう思いますか？よくお父様やお母様にも言われました^^」

光「！！！！」

光（こ、こいつ・・・！？恐ろしいほどのスルースキルを持つてやがる！！！！）

これがまさに天然系というものなのか！！？

光はビククリし過ぎて声も出ない。ゼロたちもエメラナ姫の図太い神経に只々驚くばかりである。

ゼロ「エメラナ・・・」

グレンファイヤー「ある意味凄いぜ・・・」

ミラーナイト「あ、あはは・・・さすが姫様」

エメラナ姫「？」

もう保々苦笑いに近いゼロたちの表情にエメラナ姫は不思議にこっくりと頭を捻らせるだけだった。そんな中光が突然、エメラナ姫を片手で突き飛ばす。

バンツッ！！

エメラナ姫「きあっ！！」

悲鳴を上げ、その場に尻もちをつくエメラナ姫。ウルティメイトフォースゼロが姫の傍に寄る。

ゼロ「光！いきなりなんてことしや・・・！！」

さすがにこれは見過ごせないと思い、光を非難するゼロ。だが、しかし・・・

ゾクリッ・・・！

ゼロの背中に今までに感じたことのない恐ろしい殺気が流れる。その殺気は確かに光の目から出ている。まるで、闇に潜む殺戮者のようだ。光の漆黒の瞳が光なく冷たくゼロたちを見る。

光「あんたさ・・・やっぱり、私が一番っ大嫌いなタイプだわ」

光はエメラナ姫を凍てつきそうな冷たい目で見る。そして、その目はどこか寂しげな色を飾っていた・・・。

君にはきつと分らない(後書き)

この話を書いている時「あれ？ゼロってなんてエメラナ姫を呼んでたっけ？」と思った。誰かわかる人、情報をください><!!。

## 殺戮狼少女と無邪気なお姫様（前書き）

昔・・小さい時・・・そうあれは私が六歳時、一度だけグレたことがある。簡単に言えば、不良みたいな感じである。まあ、すぐ飽きてやめたけど・・・。

今はなんであんな言葉に乗ってしまったんだろうと思う・・

小学六年生の男子生徒六人を半殺し状態、全治約一か月だったらしい・・。理由はパパとママの悪口をしつこく言っていききたから。わざわざ小学一年生の教室の前まで来て悪口を言う奴らだ、あん時はほんとウザかった。

いつも言われていることなのに、ついカツとなりキレて・・そこから記憶がない。

気づいた時、そこにあっただのは血のついた自分の手。そして、その場に倒れ、恐怖に怯える少年たち。まるで化け物でも見ているかの様だ。

『お前らが私を本気にさせたんだろう・・？』

私の声であって、違うもの。その時、私はどこかで感じていた。一つ目は、自分は普通の人間ではないことそして、二つ目はきつとずっと私はひとりぼっちだということ……。学校ではすぐその噂は広がった。一年生が六年生六人を半殺しにしたという噂が。

私八、ナニモ悪イコトシテナイノニ・・・

その時、すぐ私は転校した。私が殴った子供の親から文句があったらしい。ほんと奴らはずる賢い、自分たちがやったことは棚に上げ、他の奴のことばかりだけ言う。それから親戚の人も私を気味悪がりはじめ、居づらくなり出てった・・・。

そして、奴らは裏で私をこう言った・・・ 殺戮狼少女とね・・・

一匹狼のように行動し、決して仲間を作ろうとしない孤高の少女。何より彼らが恐れたのは、彼女の本気の殺意の籠った瞳。若干六歳でまるで本物の暗殺者のように冷徹な目と怒りと恨みに満ちた悍ましいほどの声。地球人では、ほとんどの人は絶対に私には近づかないだろう。

だけど、そんな十五歳の夏の日、私の手の中に光が差ししてきた。掴みとれないほどの大きな力が・・・

私にはその光は眩しすぎるわ・・・

目を背けようとした時、後ろのにあった手を急に誰かに掴まれる。

????『あき……ら……めな……い……でっ……!!』

光がその子から指してきて顔が見えない。

貴方は一体……?

## 殺戮狼少女と無邪気なお姫様

ムカムカするわ・・・！あの子を見てると！！

光は巨大化してすぐ神殿を出た。後ろからゼロが追ってくる。

ゼロ「待ってて言ってんだろ！！」

ゼロは私の手を掴んできたが、すぐに私はその手を振り払う。

光「もうこれ以上私に纏わりつかないでよっ！！」

光の怒号が辺りに響く。ゼロは、そんな光の背中を黙って見ている。ほらね、やっぱり私を仲間なんかにする事なんかできなかつたのよ。

私は光 だけど、中身は闇。光と言うのは、ただの外見だけ・・・  
・心の中は真っ黒

けどあの子はそんな私と鏡のように正反対の性格。まさに私より光という名が相応しいだろう・・・。だから、私はそんなあの子が

羨ましかったのかもしれない……。私なんかゼロたちとも馴染めてなんかいないのに彼女はあんな簡単にゼロたちと打ち解けてた・・。

彼女は日の光に当たって生きてきて、私は日陰に当たって生きてきた人間・・・

元から生きていく世界が違ったのだ

温室育ちのお嬢様と一人寂しく生きてきた、ただの地球人。仲良くすることなんて最初から無理だったのだ。そう・・そう思えばきつと楽だ。

光「お願いだから・・もう・・ほつといてよ・・っ！」

違う・・！本当はそんなこと思ってなんかない！！けど・・もう遅い、遅すぎたのだ・・。結局、誰も信じられなかった。また私とリリーだけとなってしまった・・。

光は光に慣れなかった・・。これが現実なのよ・・

光はさすがにもうゼロたちも自分に呆れて、離れていくだろうと思った。目頭が熱くなるのを抑え、その場から消えようとした。けど、さっきまで黙っていたゼロが突然口を開き、怒った。

ゼロ「ふざけんじゃねええ!!」

光「っ!!?!?・・・」

ビリビリと鏡までゼロの声で振動する。はつきり言って物凄く煩い!!だが、ゼロはそれでもまだ止まらず、闇を振り切るかのよう  
に手を目の前で振り払った。

ゼロ「自分だけ言いたいこと言ってんじゃねーよ!!いつつも  
勝手にしやがって・・・!てめえはよ!!」

そんなゼロの怒号の声に光も震える声で声を荒上げ、ゼロにあた  
る。

光「なんでよ・・・?なんでそんなに私にこだわるのよ!あんた  
やあの子は仲間や家族だっているじゃない!!私なんかいなくなっ  
ていいじゃないッ!!」

やめてよ・・・!もうこれ以上、私の心を掻き乱さないでよ!!

こんなのいつもの私なんかじゃない・・・!そんなこと私が一番  
分かっていることなのに!!

ゼロ「光・・・お前・・・もしかして・・・」

ゼロが光に近づいたその時、頭に頭痛が突如、出始めた。誰かの記憶と感情がゼロの中に逆流してきている・・・この記憶は・・・。

光だ。小さい時のあいつの記憶だ・・・

砂嵐のように掠れているが映像は一応見えるは見える。

ゼロ（これも天馬の鍵の力だっていうのか・・・？）

光の記憶の中。そこには、光の奥底に眠る悲しみのすべてが眠っていた。葬式の中、一人寂しく誰にも気づかれぬよう声も出さず泣いている時、誕生日の日は、暗い部屋の中一人ぼっちで蝋燭の火を消した、あの光の表情・・・お帰りなさいやいつてらっしゃいもない、ただ家にいるのリスのりりーだけ。

そうか・・・こいつの傍には・・・ 誰もいなかったんだ・・・

誰にも悩み事を相談できず、涙を拭いてくれる人や、寂しい時も悲しい時も慰めてくれる家族も居ず、人なりの愛さえ貰えず、ただみなに毛嫌いされ、育っていった悲しい悲しいお姫様。

ゼロ「……………」

ゼロはわかっていたようでわかっていなかったのだ。光のずつと背よつてきた重い十字架に……。そんな光をゼロは急に抱きしめた。まるで泣いている赤子を宥めるかのように……。

光「なあっ!?……ちょ!?!?離れなさいよっ……!」

必死に引きはがそうとするが、ゼロは離そうとしない。キックやパンチも何発かをゼロに本気で殴ったが、ゼロはそれでも光を離さない。

光（これがゼロの本気だっついうの……!?!?）

認めない……っ!そんなの私は認めない!!

ドカツ!ドジュツ!ドコツ!!

鈍い音がゼロの体からする。これは、グレンファイヤーのキックや拳より重くて痛いかもしれない……。ゼロの鍛えられた肉体に傷がつき始める。光は動物が威嚇するように低い声を鳴らす。今なら聞こえるあいつの……光の悲痛な心の声が……。

「この・・・!!」のっ！ 離れる・・・! 離れる・・・ッ!!

ゼロ「くっ・・・!」

離れるッッ!! 私から離れる!!

ゼロ「ぐふっ!・・・」

なんで?なんで・・・っ!? 痛ければ、私を離せばいい・・・それだけののに・・・っ!

痛みを堪え、ゼロはゆっくりと口を開き昔の自分のことを語り始めた。

ゼロ「俺は昔・・・。いつもお前のように一人だった・・・。ただ力だけを求め、決して手を出してはならないプラズマスパーク・エネルギーコアに手を出し、M78宇宙警備法違反によって捕まっつて、俺は追放処分された・・・」

だんだんと光の怒りに歪んだ瞳と顔が大人しくなっていた……。それからも次々とゼロは話した、レオとの訓練で感じたことやセブンとゼロの真実など、そしてウルティメイトフォースゼロのメンバーたちの出会いも。気づいた時にはもう光は完全に暴れなくなっていた。前髪に隠れ今はどんな表情をしているかはわからない。

光「……………」

ゼロ「光・お前がもし、エメラナがなんも考えてないただの能天気なお姫様だと思っただけなら……。それは大間違いだぜ」

光「えっ……？」

ゼロ「あいつはベリアルに星を襲われ、一人だけで逃げてきたんだ。大切な家族や民衆を置いて、悲しい気持ちや悔しい気持ちがいつぱいの中、広大な宇宙の中をたった一人ぼっちで……。それがどんなに辛いかお前には、分かるだろ……。？光……」

あの時、両親が死んだ時……。その時の私の頭の中はただ真っ白だった。そして、残されたものに来る本当の悲しみはほんのしばらく経ってからだ。

私はそんな同じ痛みを持つ子にひどいことを言ったの……

光「けど・・・もう無理よ。きっとあの子は私なんか許してくれない・・・許してくれるはずがないもの・・・」

光の顔は相変わらず俯いたまま見えない。だが、そんな光をゼロは真っ直ぐな瞳で見る。

ゼロ「そんなことねえよ・・・エメラナは、少なくともそんな奴じゃない。俺が保証してやる!」

いつもの自由奔放なゼロだ。間違いない・・・。

本当・・・なんでこんな奴なのに、安心できるんだろう・・・？

いつもなら、誰かに触られると嫌悪感が出て、嫌がる光だが何故か今回、ゼロに触られるのは嫌悪感がでなかった。そんな話をして  
いる中、なんと・・・

エメラナ姫「ぜえ・・・!ぜえっ・・・!!光さん!ゼロ!」

光（げっ!なんちゅー奴だ!!走って追って来たのか!?このお嬢様っ!?まだ心の準備もできてないのに・・・っ!）



照れている赤い頬をゼロに見られないよう反対方向を向く光。その反対方向には、エメラナ姫の姿がある。光はすぐ真剣な表情に戻り、姿を元の大きさにしエメラナ姫にゆっくり近づく。その時だ、微かに天からコンクリートの欠片のようなものが落ちていた。

光「・・・？」

光が上を見ると建物の上に妙な人影があつた。よく見ていたら、人影は私の視線に気づいたのかその場から消えた。その直後、何故か人影が見えた建物が一部が破壊され、エメラナ姫に向かって崩れた。

光「！！！」

いち早く気付いたのは、光だった。その後、ゼロたちもすぐ気づく。

グレンファイヤー「おいっ・・・！あれ！！！」

ゼロ「ヤバいッ！・・・逃げる、エメラナ！！！」

ジャンボット・ミラーナイト「姫様っ！！！」

エメラナ姫「きああああー！！！」

緊迫感が募る中、光が驚きの行動に出た。

光「邪魔よ・・・馬鹿・・・」

エメラナ姫「えっ・・・？」

ドンッ・・・

光はいつの間にかにエメラナ姫の傍に寄り、小さく呟いたその次の瞬間、光がエメラナ姫の体を強く突き飛ばした。そのおかげで、エメラナ姫は建物の下敷きにならず地面に突き飛ばされるだけで済んだが、その代り、さつき居たエメラナ姫の場所に光が残った。つまり、身代わりになったのだ光は。

エメラナ姫「光さあぁんッ！！！！」

ゼロ「光ッ・・・！？このっ・・・！！馬っ鹿野郎おおー！！！！」

光に瓦礫が当たる三秒前、二秒前、一秒前・・・。

ゼロ（ダメだっ・・・！間に合わない！！）

ゼロ「くそおおおー！！！！」

ゼロがそう叫んだ時だった。光の体に閃光が走る。

??? ( 姫は私が守る・・・！ )

光「この声は・・・!?!」

??? ( いけない！！それから離れてください！ )

間違いない、地球でベリアルに襲われた時、助けにくれたあの時の声だ。光の発生源を見るとそれはなんと、信じられないものからだった・・・。

## 殺戮狼少女と無邪気なお姫様（後書き）

さっ！次回からまたオリキャラ追加ですよ！！^^  
みなさん、楽しみにお待ちください！！

読者の人たちからの感想も楽しみに待っております。

偽りの友・・・？（前書き）

ねえ・・・？もし、あなたの友達が自分の知らない顔を持っていたら

貴方はどうしますか・・・？

偽りの友・・・？

光り輝く閃光に目を開けられないゼロたち。光が弱まり、気づいた時には、瓦礫の姿はもうなかった。だが、代わりにそこにいたのは見知らぬウルトラマンの姿だった。

エメラナ姫「ウルトラマン・・・？」

上半身に薄黄色のラインと下半身には銀色に輝くシルバーが強調されていて、瞳は他のウルトラマンに負けないほどの光を持っている。光は瓦礫の上に降るされ、そのウルトラマンと向き合う姿になっている。

ゼロ「誰だ・・・？あいつ・・・」

この国では、見かけたことのないウルトラマンだった。そんな中、絶句している光がゆっくりと呟く・・・。

光「そんな・・・嘘・・・あなた、もしかして・・・」

光は頭の中では、そんなはずないと否定しているが何故かそうだとわかってしまった・・・。いつもより心臓が早くそして激しく動いている錯覚に刈られる。

わかる・・・私にはわかる・・・。

ドクンッ！ドクンッ！！

光「リリー・・・なの？」

リリー「・・・はい。姫様」

ガシヤァン・・・！！

その時、何か光の中で壊れた。何か大切な物が壊れていった・・・。  
だが、そんなことも知れず、ゼロたちは騒ぎ立てた。

ゼロ「はあ・・・？ええええええええ！！？？」

グレンファイヤー「マジかよ・・・！」

ミラーナイト「そ、それはなんと・・・っ！」

ジャンボット「そんなことが・・・！！！」

まさかあの小さくて非力な動物が実は自分たちと同じウルトラマン  
だとは思わなくて、ゼロたちはすっかり興奮している。そんな時、  
パーン・・・と何かが弾かれる音がその場に響く。光がなんとリリ  
ーを平手打ちしたのだ。小さい手だが、見事にリリーの顔面を打っ  
た。

ゼロ「なっ・・・!?」

ゼロたちは予想もしてなかった展開にビックリしてしばらく停止した。光は小さくぶつぶつと呟く。

うそ・・・つき・・・!・・・しん・・・てたのに・・・っ!!

光は、キツと怒りに満ちた瞳でリリーを睨みつける。その目尻には、きらりと光る何かが付いていた。

光「嘘つき!信じてたのに・・・ッ!!」

ゼロ「お、おい!光ッ!」

グレンファイヤー「どこ行くんだよ!!」

エメラナ姫「待ってください!光さん!!」

ジャンボット「ひ、姫様!」

そう言い残してどこかへ走り出してしまふ光。ゼロたちも追いかけてようとしたが、何せ今の光の体は小さくすぐに見失ってしまった。エメラナ姫以外は・・・。離れようにも、あのウルトラマン・・・リリーもほっとけは置けない。

ミラーナイト「だ、大丈夫ですか？」

近くに寄り、リリーの顔を窺うミラーナイト。よく見ると蚊に刺されたのかのように一か所が腫れている。多分さつき光にぶたれたところだろう。

リリー「大丈夫です……。お見苦しいところをお見せしてしまつて、どうもすみませんでした」

ミラーナイト「い、いえ！とんでもない……」

いきなりペコリと頭を下げたので逆に恐縮してしまつミラーナイト。

ミラーナイト「よかつたら我々に話してくれませんか？あなたはどこから来たのか、あなたは一体何者なのか……」

リリー「そうですね……。あなた方はあのベリアルからも姫を守ってくださいましたし……。それにもう、潮時かも知れませんかね……」

リリーはゆっくりと立ち上がりゼロたちをもう一度見つめなおす。

リリー「さあ、お話ししましょう。私たち、天馬族の真実を……」

.....

光「.....」

適当に走り回って、どこか知らないとにかく見渡しのよい綺麗な場所に出た。光はそこで一人しやがみ俯いたままだ。風もヒューヒューと光の髪に当たって心地よい風と共に靡く。だが、今の光にはそんなものは感じられなかった。

光「.....リリー」

たった一人の家族で親友。でも、もう違う。そんな関係ではない。れない。

光「.....姫って誰なのよッ.....！」

私はただの地球人、これからもその先もずっとそうだと思ってきた.....でも、何かが違う.....何か引掛かる。思い出せない、とても大切なことなのに.....。

私はなんか姫じゃない.....！お願いよ、リリー.....

光って.....呼んでよ.....

ズキン.....ッ!!

光「うあ・・・っ!!」

またあの頭痛・・・！今度は何・・・？何を見せるつもりなの・・・？

ザザツザー・・・!!

砂嵐の記憶の中、無限に咲き誇る花畑に二つの影が見える。一つはあのドレスを着た少女ともう一つは・・・

リリー・・・？

その記憶に移っているリリーの顔はとても幸せそうであつた。毎日のようだ。その隣に座っているあの子も笑顔で花で作った王冠をリリーにあげる。リリーの大きさには合わないが、リリーはそれを嬉しそうに貰う。

何よ・・・！これじゃ私だけじゃない・・・!!一人ぼっちなのは・・・ッ!!!!

ざわりと光の心に孤独の波が打ち寄せてくる。鼻がツンとして痛い、涙を我慢するのが辛い。記憶はそこで終わり、ただそこに残されるのは喪失感と孤立感。

光「・・・ッ!」

我慢しきれなくなり嗚咽が漏れそうになるその時。

エメラナ姫「そんなところに居たんですね、光さん」

光「!!!」

ビクリと体を跳ね、後ろを振り返るとそこにはエメラナ姫が立っていた。

光「何の用・・・」

エメラナ姫「私と一緒に帰りましょう？ゼロたちも心配してると思いますし・・・」

光「私はいい・・・」

エメラナ姫「どうしてですか・・・？」

光「見たのよ・・・」

エメラナ姫「見た・・・？何をですか？」

光「リリーは多分昔、私と違う女の子と暮らしてた・・・。何らかの事情で今は私といるけど、きつとリリーは彼女と居たかった」

あんなリリーの幸せそうな顔、初めて見た。その時、私はなんとなくわかった。私のつけ込む隙なんてない。



ラナ姫の綺麗な目からポロポロ涙が零れていた。

光「なんでお前が泣くんだよ!!?」

むしろ、こっちが泣きたいわ! まあ、おかげさまで、今ので引  
っ込んじゃったけどね!!」

エメラナ姫「だったのではなく、なのでしょう・・・?」

光「え・・・?」

エメラナ姫「リリーは大切な家族なのでしょ! だったらなんで  
信じてあげられないのですか!!」

怒られた・・・。あの、のほほんとした能天気お姫様に怒られ  
た!?! この私が!!」

光はエメラナ姫に怒られたのが余程、衝撃的な出来事だったのか  
呆然としたままエメラナ姫の話聞く。

エメラナ姫「家族じゃないなんて冗談でも言っではいけません  
!! 失ってからも手遅れなんですよ! 確かにリリーは何かあなた  
にまだ隠し事をしているかも知れません! でも、それはきつと何か  
訳があつて話せないだけなんだと思います!!」



？

九年間も私なんかのために傍にいてくれたの……？リリー……

光「……帰る」

エメラナ姫「え……？」

光「だ・か・ら……」

光は顔をちよっぴり赤らめ、エメラナ姫に向かって言う。

光「帰ってやるって言ってんの！」

エメラナ姫「……はい！！^^」

そう言って、立ち上がるとゼロたちが自分たちを探している声が聞こえた。

エメラナ姫「さあ！行きましょう」

光「あっ……！ちよっと待って！」

エメラナ姫「？なんですかー？」

頭をこっくりと捻っているエメラナ姫。光はゴニョゴニョとエメ

ラナ姫にこう言った。

光「その・・・あの時は突き飛ばして悪かった。それと私のことは光でいい・・・」

エメラナ姫「え・・・！？それって私を友達に・・・！！」

光「ちよっ！まだそれは認めてはないから！！」

慌てて訂正する光。だって、このままじゃ本当にそうさせられてしまいそうな気がしたから。

光「後・・・それと・・・」

今までの声よりさらに小さくなる。さすがのエメラナ姫も聞こえない。

エメラナ姫「？なんて言いました??」

光「内緒！」

エメラナ姫「え、ええー!?!」

光の後を追いながら、本当になんだっただろうと考えるエメラ

ナ  
姫。

『  
あ  
り  
が  
と  
う  
．  
．  
．  
．  
．  
』

朽ちた種族（前書き）

いつか一人のウルトラマンは　ここがどこかも分からない宇宙の  
中で誓った

私は永遠と存在する者　だから私は・・・私だけは貴方の傍に  
いましょう・・・

例え　この身が朽ち果てようとも　ただ貴方の傍に・・・

ただ貴方の声だけを探しましょう　決して　どんなことが在  
ろうとも・・・

## 朽ちた種族

光とエメラナ姫の時間から少し遡り、ゼロたちの方はというと・

リリー「さあ、お話ししましょう。私たち、天馬族の真実を・  
」!

グレンファイヤー「天馬族の真実・・・？」

ジャンボット「この前、ライトが話したのとは違うのか？」

リリー「いえ、私が話すのはその話の千年後・・・。私と姫がい  
た時代の話です」

・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・

約一億年前の話・・・惑星カントルナ

私は天馬族の王女を守るために天馬の体の一部から生まれた孤高の戦士でした。私はただその時代の王女の命令にしたがい、邪魔者は始末してきました・・・でも、そんな私に心というものを教えてくれたのがカントルダ国第一王女プリンセス・ペガル・ティアラ様でした。天馬族の第一王女は、不思議な力を持って誕生します。その力が天馬の魂を・・・王の王冠クラウン・クラウンを復活させることができる力なのです！

ゼロ「ちよつと待てよ！光とそのティアラっていう奴がなんの関係があるんだよ！」

リリー「光様は・・・そのティアラ様の魂を持っています」

ウルティメイトフォースゼロ「！！！！！！！！！！」

ミラーナイト「つまり光さんはそのティアラという人の生まれ変わり・・・？」

リリー「はい、光様の前世と言っても過言はないでしょう・・・」

ジャンボット「じゃあ何故、前世の筈のティアラの力が今の光に・・・！？？」

リリー「多分、ティアラ様は・・・使ってはいけない禁忌の法を使ってしまったのでしょう・・・」

グレンファイヤー「多分・・・？多分ってどういうことだ！お前はそいつの傍にいたんじゃないかねえのか！」

グレンファイヤーは声をつい荒上げてしまう。いきなりの展開に付いていけないのだろう・・・。リリーは続きを話すように静かに語り始めた。

その時、国に突如攻撃してきた者がいたのです。私は姫を守るため、そいつと戦いました・・・けど、私の力は足りず、戦いに敗れ、どこか別の遠い宇宙の中に飛ばされてしまいました・・・。私は必死に探し続けました。ここがどこすら分からないのにただティアラ様の魂を頼りにして一億年という月日が経ち・・・そんな時、地球にティアラ様の魂のオーラがしたので、私は地球に降り立ちリスに変身して姫様を探しました。そして、そんな生活を六年間・・・ついに私は姫様を見つけました。けど、そこにいたのは・・・見知らぬ少女でした。見た目も性格もまったく異なっていました。でも、確かにその女の子から姫様と同じオーラが流れてました。私はその時、今度こそ姫をお守りすると決めたのです・・・。例え、姫様が私のことを覚えていなくても・・・私は・・・私は・・・っ!!

ミラーナイト「・・・」

ジャンボット「・・・」

二人には、その気持ちが痛いほどよく分かった。姫を守りたいという気持ちは誰にも負けてはいないから・

グレンファイヤー「それで、その禁忌の法ってなんなんだよ・  
？」

リリー「禁忌の法・自分の肉体を捨てる代わりに、魂を違うものに移す法のことです」

ゼロ「なんでそんなことを・・！」

リリー「姫様は・・王の王冠クラウン・クラウンだけは守ろうとしたのです・。あれは、絶対に目覚めさせてはならないものなのです・・！！！」

ジャンボット「命を懸けても守られなければならないもの・・か」

ゼロ「その、お前たちの星を襲ったのは誰なんだ・・？」

そのゼロの声には、怒りが少し含まれている。リリーはゆっくりと答えた。

リリー「カイザー・ベリアル・です」

ゼロ「・・・!!」

ジャンボット「そんな・・・!どうやって・・・!?!」

ミラーナイト「もしかすると・・・この前の戦いの時、ベリアルは大量に体内の中にエメラル鉱石を入れてていました。ウルティメイトゼロの攻撃とエメラル鉱石がぶつかり、多次元宇宙の扉がわずかに開いてしまって、リリーたちが住んでいた宇宙に繋がってしまったのではないのでしょうか・・・?」

おまけに一億年という長い時のせいで、ベリアルの体は修復され、前よりレベルアップしてしまった。

ゼロ「そんな・・・!」

俺たちの戦いのせいでリリーたちの世界は壊れてしまったのか・・・!?!?

ゼロはリリーの前であつくりと頂垂れる。他のメンバーも顔を伏せる。

ゼロ「すまねえ・・・!!リリー・・・俺たちのせいで・・・」

リリー「!?!ど、どうしたんですか?」

ゼロたちはリリーに説明した。ベリアルがどういう奴か、そして元光の国のウルトラ戦士だということ、どうしてベリアルがそちらの宇宙に行ってしまったかも何もかも説明した。

リリー「そうだったんですか・・・」

ゼロ「本当にすまねえ・・・!!」

リリー「いえ・・・もう一億年前の話ですし、私の力不足だったんです。それに、不自然な点が一つあるんです」

ミラーナイト「不自然な点・・・?」

リリー「カンタルダ国には、結界が張っていて、そう簡単には破れないはずなんです・・・。つまり、天馬族の中に裏切り者がいた・・・」

グレンファイヤー「・・・!!」

ジャンボット「そうか・・・!それなら辻褄つじつまが合う・・・」

何故天馬族が滅んでしまったか・・・　これで謎は解けた

リリー「まだ、全部を話し終えたわけではありませんが・・・お願いします。私に・・・いえ天馬族代表として力を貸してください！」

グレンファイヤー「何水臭いこと言ってんだよ！バーカ」

リリー「いたっ！」

ゴチン とリリーの頭に拳を軽くぶつけ、リリーの肩に手を組むグレンファイヤー。

リリー「それじゃあ・・・！」

ジャンボット「ああ、喜んで力を貸そう・・・。元々私たちのせいになっただけだから・・・」

ミラーナイト「姫を守る戦士同士、仲良くしましょう」

ゼロ「ということだ・・・よろしくなあ！リリー！！！」

リリー「みなさん・・・！！クスンツ・・・！」

感激のあまり感涙してしまうリリー。

グレンファイヤー「おいおい、泣くなよ」

ジャンボット「そうだぞ、孤高の戦士ならしっかりしろ」

リリー「はい!」

ゼロ「よし!光たちを探しに行くぞ!」

おおー!」

.....

一方その頃、どこかの宇宙にある廃墟の星では……。

ダークロプス 「天馬の鍵、捕獲、失敗しました」

ベリアル「この役立たずが!」

ベリアルは容赦なく鋭い爪でダークロプスの顔面を切りつける。  
ダークロプスはガガツ……!と鈍い音を漏らしながら、その場に倒れ二度と動かなかった。

ベリアル「チツ・・・！」

ベリアル（印を手に入れたのはいいが・・・まだ肝心な鍵は奴ら  
らがつってる）

ベリアル「なんとしても必ずゼロより先に王の王冠クラウン・クラウンをこの手に  
・・・！」

薄気味の悪い場所にベリアルの赤く悪魔の様な瞳がよく似合う。  
ベリアルの邪悪な願いは、真っ暗な宇宙のどこかに溶け去っていた。  
。。。



## 歓迎パーティー

リリー「あの・・・その・・・ひ、姫・・・」

光「待った」

リリーはどう説明していいか分からず、うつろたえていると光はそれを察するように目の前で手を伸ばす。

光「話したくないなら今無理に話さなくていいわ」

リリー「え・・・？」

リリーだけじゃなく、その場にいたゼロたちも驚いている。光はリリーを真剣な表情で見つめる。

光「私は・・・リリーが自分から話してくれる日を待つわ・・・いつまでも・・・でも、勘違いしないでよね！まだ私は、嘘をついたことを許したわけじゃないわよ」

リリー「分かっています・・・」

光「あなたの名前は・・・？」

リリー「・・・？」

光「だから・・・あなたの名前は何!?!」

リリー「……リリー……、リリー・ビーストです!!」

リリーは、嬉しさのあまりまた泣き出してしまふ。光は何故かそんなリリーの姿を見ていると無性に抱きしめたくなった。気づいた時には、体が勝手にやっていた。

リリー「!……ひ、姫様……?」

光「分からない……。でも、なんでだろう……。?あんたをこう抱きしめたくてしかたないの……。本当馬鹿な理由よね。」

リリー「うう……!!」

初めて抱きしめるはずなのに、どうしてこんなに懐かしいのだろ……?」

どうしてこんなにも愛おしく、暖かく感じるのだろうか……?」

……  
……  
……  
……

なんかかんやで光の国で三日間過ぎた。家の時はいつも変わらずリスの姿をしているリリー。一つ違うのは言葉が話せるようになってきた。こんな生活にも光も慣れてた頃、突然ゼロがあのお話を持ってきた。

光「はあ？歓迎パーティー？私とリリーの・・・？」

ゼロ「ああ。結局、なんかかんやでやってなかったしな・・・。今日、やることになった」

光（きゅ、急ね・・・！！）

相変わらず、ウルトラマンたちのペースには付いていけない光。そして、何故か小さくなり堂々と光の家を私物化しているゼロたち。まあ、もうこれも慣れたという顔している。歓迎パーティーという話には困惑するように光は戸惑う。

光「いいわよ。私はそんなことされる歳でもないし・・・」

グレンファイヤー「そんなこと言うなよ。それに・・・」

グレンファイヤーは、黙って一点の方向に指を指す。私はああ？という感じで見るとそこには、リリーのくりくりとした黒い瞳がキラキラと輝いていた。

リリー「パーティーですか．．．！こついつの何年ぶりですかね、  
姫！！」

光（リリー！！！！？！？）

うああああ！！何あの瞳！？めっちゃ行くきやん！物凄く行き  
たいオーラー出してんじゃん！！くそおう．．．いや．．．まだ諦  
めるな私！！何か手があるはず．．．っ！！！

光「で、でもリリー．．．」

リリー「楽しみですね！姫様^^！！」

がはあっ！！ 口から血が出そうだわ．．．！ 今までにない  
おねだり攻撃が私を襲ってきた。

もうダメだ．．．。光は取り合えず、そう悟った。もう保々やけく  
そのようにゼロたちに言い放つ。

光「あああゝゝゝ！！！！もう、行けばいいんでしょ！行けば！  
！！！」

ちっくしょう！！！！ゼロめゝ．．．！！！！後で覚えてろおお！！！！

!!

こうして慌ただしく、パーティーの準備が始まったのであった。

.....

光「で、どこに連れて行くつもり？」

ゼロ「いや、パーティーのことなら女同士で話し合った方がいいってオヤジがいうから・・・」

私はゼロに連れられ、何故か立派な建物の中にいた。ドアが開くとそこには、女のウルトラマンと思われる二人のウルトラマンがこっちこっちと手を振っていた。

ユリアン「ゼロ！こっちよー！！」

ゼロ「ユリアン！それに・・・！！」

二人の女のウルトラマンがこちらに近づいてくる。一人は、おっとりとして優しいようで、もう一人は元気のあるお姉さん系のウルトラマンだ。

ウルトラの母「久しぶりですね、ゼロ。随分とこんなにたくましくなつて・・・」

ゼロ「よ、よせよ！こんなところで！！！！」

ウルトラの母に頭をなでなでされ、顔を真っ赤にさせるゼロ。そんなゼロの姿を見て、ユリアンはクスリと笑う。

ゼロ「ユリアン！！！！」

ユリアン「あら？ごめんなさい^^ついつい・・・」

ゼロ「~~~~！！！！」

光「あのさ、このウルトラマンたちは誰なのさ？ゼロ」

ゼロ「そうだった・・・ゴホンッ！！」

ゼロは咳払いをして空気を立て直し、光に説明をした。

ゼロ「こいつはユリアン。ここウルトラの星の王女だ。で、こっちはウルトラの母。いつもは、戦闘で傷ついたウルトラ戦士たちの救護や看護活動をなどをしてる」

光（（また王女かよ・・・））

頼むからいい加減ノーマル来てくれ!!と願う光の中に、ユリアンとウルトラの母が話しかけてくる。

ユリアン「初めまして!ユリアンよ、よろしく!」

ウルトラの母「マリーです。よく周りの人からウルトラの母と呼ばれています。よろしくお願いしますね、光」

光「ああ、はぁ・・・」

光は返事に困り、取り合えず適当に促した。

ユリアン「歓迎パーティーに着ていく服なんだけど、これはどう?」

さっそく、ユリアンの手に何か握られていた。それは、まるでアニメに出てきそうな真ッピンクな色でフリルがたくさん付いてるドレスだった。さすがの光もこれには、ドン引きだ。服を着ないゼロでさえ顔が引きつっている。

ウルトラの母「うーん・・・こっちの方もいいと思いますよ?」

今度は、赤紫色の大人っぽい服のドレスだ。確かにさっきのよりはマシだけど・・・いやいや！そういう問題じゃない！！私ドレスなんて着たことないし、それにだいいち、スカートは苦手だ。むしろ、大嫌い！動きずらいし、気を使わなければならなくて正直言って疲れる。ウルトラの母とユリアンがそんな光に急に話を振ってくる。

ユリアン・ウルトラの母「光は、どっちがいいと思う（思いますか）？」

光「だが、どっちも断る！！」

光は、その瞬間、誰も見たこともない物凄いスピードでその場から去る。その姿は、脱兎のごとくのようなようだ。

ゼロ「えええ！！！！？？」

ゼロ（逃げやがった！！！！あいつーー！！！！！！！！！！）

ゼロは、ツツコミながらも光をなんとか追いかけた。ユリアンとウルトラの母はドレスを手に握り、ただ二人の後ろ姿を見つめるだけだった。

.....

ゼロ「急に逃げ出すなよ!!」

光「うるせえ! あんたのせいで私は危うく、あのドレスの犠牲者になるところだったわっ!!」

ガタガタと恐怖に震える光、よほど嫌だったのだろう。

ゼロ「どんだけ嫌だったんだよ・・・(汗)」

そうゼロは、呟くが今の光にはそんなことは聞こえない。

光(ああ、思い出すだけで悪寒が・・・!!)

ブルブルと小刻みに体は震えた。どんなヤンキーよりも恐ろしい。。。

光「取り合えず、私、しばらくあの危険人物たちと会いたくないわ・・・」

光(エメラナ姫よりあのウルトラマンは、やばい! 服を選ぶときのあの野生の目!!)

エメラナは、半端ないスルースキルを持っているが、あれは違う意味で光の天敵だ。女のパワーと言うかなんというか・・・とにかく、エメラナ姫の次に油断できない人物たちだということはわかった。

光「でも・・・」

こんな風に女の人とちゃんと話したの久しぶりだった。最後に話した人は、確か・・・ママが亡くなる前だ。最後になった会話はどこにでもありそうな普通の会話・・・。

『服、小さくなっちゃったわね。今度、買いに行きましょっか

』！

『うん...』

『その時はパパに内緒でおいしいものでも食べちゃっつ？』

『ダメ〜！！パパも一緒がいいよー！』

『うふふ、光は優しいのね!』

その時はこんなことになるなんて夢にも思わなかった。淡く、脆く崩れていった日常。もし、あの時・あれが最後の会話になるってこと知っていたなら私は何を話していただろう・・・？

光「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼロ「？光・・・？」

ゼロに声を掛けられて、我に返る光。

いけない、いけない・・・っ！こんなことを今更考えるなんて・私・・・どうかしてるわ・・・

光「何でもないわよ」

光は笑って誤魔化した。光のそんな表情を見てたらゼロはそれ以上問い詰められなくなってしまうた・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・

時は昼から夜になり、パーティーの時間になった。場所は、エメラナ姫の泊まっている神殿の中。ゼロたちが着いた時には、もうみな殆んど来ていた。来ているのは、主にウルトラ戦士のみなさんやなんとウルトラ兄弟もいる。光は結局、最後までドレスなどのおめかしを嫌がりいつも着ている私服で来てしまった。

光「わりと広いのね……」

地球とは違う神秘的な感じがする。リリーは、落ち着かない様子で辺りをそわそわと見る。

光「何やってんのよ、リリー……」

リリー「あっ……いや、その……なんか嬉しくて……  
／／／すみません、姫様」

光「お前は子供か!!」

「つたく!こんなところに来てはしゃぐな!!」

光「それと後、その姫様やめい!」

リリー「いえ、姫様は姫様なので!」

そんなことキリツとした目で言われても困る。それと後、もう意味が分らん。

光とリリーの会話を聞いていたグレンファイヤーがゼロたちに聞こえないぐらいの小さな声で呟く。

グレンファイヤー「漫才・・・ww」

光「あ、あ？何か言ったか？ゴラア！」

グレンファイヤー「ちよっ・・・！お前地獄耳だな！」

ジャンボット「コラコラ！お祝いの場で喧嘩するな！！」

光「うっさい！鶏！！親子丼にすんわよ！！」

ジャンボット「ガーン！！・・・に、鶏って言われた・・・！」

ゼロ「お前、もうチンピラみたなセリフになってんぞ、光」

ミラーナイト「元気出してください、ジャンボット」

不毛な話をしている中、声を掛けてきたウルトラマンたちがいた。

ダイナ「おっ！お前たちが、地球人の女の子とウルトラマンって！」

コスモス「確か、名前は光とリリーだったけ？」

光「そうだけど・・・あんた達、誰？」

光がそう言うと、早速ミラーナイトが説明に入る。

ミラーナイト「こちらのウルトラマンは、ウルトラマンダイナ。そして、隣にいるのはウルトラマンコスモス。この人たちも地球にいた時があるんですよ」

光「ふーん」

ダイナ「まあ、そういうことだ！よろしくな」

コスモス「ようこそ、光の国へ。光」

光「・・・」

リリー「姫様・・・」

光「・・・分かってるわよ、言えばいいんでしょ！言えば！！！」

はぁーと溜息をつきながら、光は改めてダイナたちを見てお礼をいう。

光「ありがとうございます……」

かなり愛想のないお礼の言葉だったが、ダイナたちはニッコリと笑い「頑張れよ」と言い残し、どこかに消えた。

……

ゼロ「オヤジ！」

セブン「おお、やっと来たか」

セブンは周りにいたウルトラマンたちと、色々雑談していたようだ。

セブン「何かあったのか？」

ゼロ「いや、そこでダイナたちと会って、ちょっと話したら遅れただけだ」

セブン「そうか・・・そうだ、光君。あるウルトラマンたちに君を紹介したいんだがいいかね？」

光「誰に紹介するつもりよ」

セブン「ウルトラ兄弟たちにだ」

セブンがそう言つとさっきまでセブンの傍にいたウルトラマンたちが一斉に振り返る。

ゾフィー「こんにちは、光。私はゾフィー、ウルトラ兄弟の長男で今は宇宙警備隊の隊長をやっている」

タロウ「俺はタロウ。ウルトラ兄弟の六男だ」

レオ「私はレオ。七男でそこにいるゼロの師匠みたいなものだ」

ヒカリ「俺の名もヒカリと言うんだ。ウルトラ兄弟では、十一男。よろしく頼む」

次々と自己紹介するウルトラ兄弟。光は、ある人物の話にとても興味を持っていた。

光「へえ、ゼロに師匠なんかいたんだ」

ゼロ「いちや悪いかよ」

光「いや、別にー」

ゼロ「じゃあなんだよ！」

光「ただ、あんたみたいな奴に師匠をやってくれる人物がいるなんて意外だなあ〜っと思っつて」

ゼロ「なんだと!!」

光「何よ！」

火花を飛ばすように睨みあう二人。その他のウルトラマンはそれを面白そうに見ていた。

ヒカリ「なんかあの二人って、似た者同士ですね」

ミラーナイト「やっぱりそう思います?」

レオ「あれなら、訓練でも付けねばすぐ強くなりそうだな」

ゾフィー「女の子にそんな危険なこと教えちゃダメですよ、レオ」

レオ「ああ、分かってる。ただの冗談だ」

タロウ「本当に冗談か？」

半分疑惑の目でレオを見るタロウ。ゼロはタロウにこう言った。

ゼロ「大丈夫、本当にやってもこいつはそう簡単にくたばったりしねえよ」

光「あははは、ゼロ後でぶっ飛ばす（怒）」

ギョツと拳をつくつて、ニッコリと笑う光。何故か黒いオーラが光を取り巻いている。ゼロは慌ててその場を離れるが、光は猟犬みたいにゼロを追いかけ回す。また、始まったとグレンファイヤーが吹き、ジャンボットは呆れ、ミラーナイトはまるで小さい子を見守るようなの瞳で見る。リリーは「頑張ってくださいー！姫様ああ！！」と止めさせるどころか光の応援をする。他のウルトラ戦士たちも光とゼロの会話が面白かったのか、ただ笑っている。そんな楽しい夜のささやかなひとときに響くウルトラマンたちの笑い声は、しばらく止むことはなかった。



## 不良な師匠と真面目な弟子？

今日も変わらない普通の風景。だが、建物の影で一人のウルトラマンの少年に絡んでいる金色の怪人がいた。少年のウルトラマンは大声を出して、助けを呼ぼうとしたが怪人に口を抑えられ助けを呼ぶことができない。そんな少年をあざ笑うかのように勝ち誇った笑みを浮かべる。

ババルウ星人「くくっ・・・！こいつに化けて、やられた同胞たちに変わってウルトラマンたちに復讐してやる！！」

ウルトラマンボーイ「ううー！！うっ~~~~！！・・・」

ウルトラマンボーイは必死に抵抗してもがくが、虚しくもババルウ星人の前ではまったく通じない。

ババルウ星人「煩い奴だ、少し痛い目に合わせてやる！！」

ウルトラマンボーイ「！！」

右腕の鋭く光るカッターをウルトラマンボーイに振り上げた。

ウルトラマンボーイ（もうダメだ！！）

そう思ったその時。

ドンッ！！

ババルウ星人「いてっ！」

細い薄暗い道の中、いつの間にかバルウ星人の後ろ通ろうとマントを羽織っていた通行人がババルウ星人が偶然振り上げた肩にぶつかった。

ババルウ星人「どこ見てやがる！気をつける！！」

「????」はあ？

マントに隠れて顔は見えないが、凜とした澄んだ声に少し低めの声、子供独特の声の幼さぽっさが残っている。少女と思わしきその声は、相手はババルウ星人だともいうのに強気の声で言い返す。

「????」あんたが勝手にぶつかってきたんでしょ。なんで私が文句言われなきゃならなの？ちよつとあんた頭大丈夫？？」

ババルウ星人「この野郎ッ・・・！」

ババルウ星人は、その少女の顔を隠してあったマントを無理やり剥ぎ取る。少女は嫌がったが、ハラリと落ち、その場に顔をさらす。そこにあつたのは、肩まであたるぐらいの長めのこげ茶の髪に少し大人びた黒い切り目の瞳。顔立ちは、少女にしては凛としていて大人ほくかと言って子供ほくもある。だが、その顔には自分の意志が強く感じられるようで凛々しかった。

光「ちよつと何すんのよ！」

ウルトラマンボーイ（ち、地球人・・・！？でも、なんでこんなところに・・・）

しかも、僕たちと同じサイズだし・・・ウルトラマンボーイはそんなことを頭の中で廻らせるが、今はそんな時間はなかった。

ババルウ星人「丁度いい・・・。手始めにお前から切り刻んでやる・・・！」

ウルトラマンボーイ「あ、危ない！」

ババルウ星人は自慢のカッターで容赦なく光に襲いかかる。ウルトラマンボーイは思わず、声を上げるが、次の瞬間、光の姿が消えた。

ババルウ星人「な、何!？」

どこへ消えた!?!?

ババルウ星人は周りを見渡すが、光の姿が見えない。気配も音も全てを消して光はババルウ星人の背後につく。

光「うらあ!！」

ババルウ星人「ぐはあっ!！」

目にも留まらぬ速さでババルウ星人の頭に回し蹴りを繰り返す。メリツ・・・と嫌な音を立てて、壁の中にめり込む。綺麗に着地をし、ビシリと顔が壁にめり込んでいるババルウ星人に指を指す光。

光「元不良なめんな!！ゴラァ!！」

しなやかに体についた筋肉にきらりと日に当たり反射の影響で眩しく輝き、宙に靡くこげ茶の髪となんととも言えぬ不思議なオーラにウルトラマンボーイはただその凜々しい少女の姿に呆然と見とれていた。

ウルトラマンボーイ」……………」

か、かつこいい…!!

……………

光「……………(汗)」

ウルトラマンボーイ」……………」

視線が痛い……。なんか物凄いキラキラオーラを流してくるんだけどこの子……。

ウルトラマンボーイ「あ、あの!……………」

光「ああ……?何……?」

ウルトラマンボーイは一瞬躊躇ったように言葉を濁めるが、その後、少し間が開いき光はウルトラマンボーイに不審な目を持ちながら聞いた。

光「何か私に用なの？」

ウルトラマンボーイ「そのっ・・・！あの・・・」

ウルトラマンボーイはもう思い切って言った。

ウルトラマンボーイ「僕を弟子にしてください！-」

光「ふん・・・って、はあ・・・？」

光はしばらく目をパチクリパチクリ開き、やっと我に返る。

光（で、弟子！！！？？）

.....

何故こうなった？

光は考える。始まりはゼロとのくだらない口喧嘩。私は頭にきて、リリーを置いて一人で家を飛び出してここまで来てしまった。結局、

デタラメに歩いてきたせいで迷子になってしまい、適当に彷徨っていたらあいつとぶつかり、気に食わなかったのでボコツた、それだけだ。なのに、どうして……

「こうなるんだ!」

光「断る!」

ウルトラマンボーイ「な、なんで!?!」

光「私はそういうのに向いてないし、第一私は弟子なんて取らない!」

それより、早くここがどこなのかを知りたいし……。

光「ねえ、あんたここがどこかわかる?宇宙警備隊本部っていう場所がどこにあるか知ってる?」

ウルトラマンボーイ「え〜とっ……ごめんなさい、僕もここらへんの地域は初めて来たからわからないや」

光「なんだ〜……あんたも迷子なのかよ」

光はがつくり肩を落とし、とぼとぼと取り合えず前に歩く。だが・

光「なんで私についてくる!?!」

ウルトラマンボーイ「いや、なんとなく・・・」

光は頭を?きまわし、ウルトラマンボーイもう諦めた風に投げ捨てる。

光「勝手にしろ!!もう・・・!」

そうして、奇妙な組み合わせの二人は光の国をブラブラと彷徨うことになった。一緒に行動してる時、ウルトラマンボーイに質問攻めにされて、光はいつもよりどっと疲れる。

ウルトラマンボーイ「あっ!そう言えばまだ名前教えてもらってなかったね!君の名前は?」

光「梅崎光・・・」

ウルトラマンボーイ「じゃあ、光師匠だね!」

光「だからならないつつの!」

牙を剥いてウルトラマンボーイに抗議するが、ウルトラマンボーイ

イは特に悪びれる様子はなかった。

ウルトラマンボーイ「僕はウルトラマンボーイ！よろしくね」

光「はいはい・・・よろしくね、ガキンちょ」

ウルトラマンボーイ「ちよっ！僕の名前はウルトラマンボーイだよ！！ガキンちょじゃないよ！」

光「うっさい！あんたみたいなガキンちょは、がきんちょで十分よ！！！」

ウルトラマンボーイ「そんなのひどいやー！！><」

そんな会話をしている中、話の話題は光がどこから来てどうしてこんなところにいるのかに変わる。

ウルトラマンボーイ「なんで光は光の国にいるの？」

光「はあ？あんたには関係ない話でしょ」

ウルトラマンボーイ「でも普通、地球人の体には光の国の光は強すぎてそんな元気に歩けないはずなんだけど・・・」

なんか訳があるのかな・・・？

暫し考えたが、それより光が先にその質問に答える。

光「実は私も分からない……。つい最近までは、ずっと一緒にいた家族の正体まで知らなかったんだ……。ほんとここに来てから驚くことばっかだよ」

ウルトラマンボーイ「えっ!?もしかして、記憶喪失……。?」

光「いや、確かに何か大切なことを忘れてはいるんだが……。なんか、こう……。ボンヤリとしていて思い出せないんだ。まあ、私は地球人ではあることは確かなんだけど……」

光（つて、私……。子供に何言ってるんだか……）

はぁ……。と光は我ながら呆れ返る。ここに来てからというものの性格が……。いや、自分自身が知らない自分になつてきている様な気がする。暫らく、歩いていると二つの分かれ道に着いた。どちらに進むか悩んでいると光がどこから一本の棒きれを持ってきた。

ウルトラマンボーイ「それ、何に使うの?」

光「いいから見ときなさい」

光はそういうとその一本の棒きれを地面に落とした。カランコロンと音を立てて、棒きれは左に向いて倒れていった。

光「よし、左だ」

ウルトラマンボーイ「え、えええ!!!??」

て、適當すぎるよ!光!!

真剣な顔をして迷わず左に進もうとする光を必死に止めるウルトラマンボーイ。

ウルトラマンボーイ「ちょ、ちょっと待つてよ!ここは人に道を聞いた方が...!」

もつともな意見である。でも、光はそれを拒絶した。

光「そいつが嘘をついていたらどうすんのよ?」

ウルトラマンボーイ「そんな...!誰もそんなことしないよ!」

光「そんなことなんで分かるのよ。それとも何?あなたには他人の心が見えんでもすんのかい?」

ウルトラマンボーイ「そ、それは...」

確かに全ての人を信じられるかと言われたら無理だけど、光の言い方はあまりにひどく冷たいものだった。

光「ほら、やっぱり・・・無理だろ？」

ウルトラマンボーイ「！・・・それは確かに無理だけど、こここのウルトラマンたちはそんなこと絶対にしないよ！！」

光「ふん・・・あなたはここが大好きなんだね・・・」

ウルトラマンボーイ「うん！」

ここには尊敬するユリアンもいるし同じ宇宙警備隊になる夢を持っている仲間だっている。ウルトラマンボーイは純粹にここがただ好きだった。だけど、そんなウルトラマンボーイに光は冷たく言い放つ。

光「私は自分の星・・・地球が大嫌い。そして人も、みんな嫌い、大嫌い」

弱いものや醜いものは蔑みられ、反対に強いものや美しいものは褒め称えられるあの世界、あの社会が嫌いで仕方がなかった。

ウルトラマンボーイ「そんなことないよ！！地球のみんなは、  
一つに力を合わせてウルトラマンたちと一緒に怪獣と戦ってきたじ  
やないか！」

光「地球人がみんなそうって言うわけじゃないわ。あんたが思  
っているより地球人はね・・・黒くて汚い生き物なのよ・・・」

ポンツとウルトラマンボーイの頭に手を乗せる光。光はすぐに手  
を降ろし、そのまま左へと足を進めていく。その手は酷く優しく、  
そして悲しいものだった・・・。

光「ほら、さつさと先に行くわよ。ガキンちょ」

ウルトラマンボーイ「・・・」

そんな光の瞳を見て、何も言えなくなってしまったウルトラマン  
ボーイ。ゆっくりとただ光の後を歩いていったのだった。

.....

先に向かって歩いてみると、ふとウルトラマンボーイの目の前に顔見知りのウルトラマンの姿が見える。

ウルトラマンボーイ「ガイア！アグル！！」

ウルトラマンガイア「おっ！・・・」

ウルトラマンアグル「ボーイじゃないか・・・。どうしたんだ、こんな場所に何か用か？」

恥ずかしそうにウルトラマンボーイは正直に答える。

ウルトラマンボーイ「実は道に迷っちゃって・・・／＼／＼／＼」

ウルトラマンガイア「何やってんだ・・・って、ん？この子は？」

ウルトラマンアグル「ボーイの友達か？」

さすがにマントを羽織っている人物が隣にいると目立つ。ウルトラマンボーイは言葉に詰まり、苦笑いしながら話す。

ウルトラマンボーイ「う、うん・・・そんなとこかな・・・？」

ウルトラマンガイア「そうか。俺はウルトラマンガイア。よろ

しく」

ウルトラマンアグル「ウルトラマンアグルだ。よろしく頼む」

二人は一応、光に挨拶をした。ガイアたちの手にはたくさんの買  
い物袋がある。どうやら買い物でここに来たらしい。

ウルトラマンボーイ「それより、二人はここから宇宙警備隊本  
部にどうやって行けばいいか知ってる？」

ウルトラマンガイア「ああ、それならこの道をしばらく真っ直  
ぐ進んで、次を右に進むといい」

ウルトラマンボーイ「ありがとう！ガイア、アグル！！」

ウルトラマンボーイは光と手を繋ぎ、言われた通りに進む。だが、  
ガイアに呼び止められる。

ウルトラマンガイア「ちょっと待ってくれ！ボーイ！」

ウルトラマンアグル「私たちも買い物か丁度終わったところだ。  
一緒に行こう」

ウルトラマンボーイ「うん！分かった！！あつ、荷物持つよ！」

光「……」

結局、四人で荷物を少し分けながら宇宙警備隊本部に帰ることになった。本部の近くに行くとゼロとリリーの姿が見えた。ゼロとリリーが懸命になって光の姿を探している。そんなゼロたちの姿を見て、少し心苦しくなる。

光「がきんちよ。私はここまでいいわ・・・あんがと」

ウルトラマンボーイ「え？う、うん・・・」

光「今度は変な奴に絡まれるんじゃないわよ」

光は手に持っていた荷物をウルトラマンボーイに託し、最後は光が自らマントを取り、顔を晒した。光の黒い切り目の瞳がウルトラマンボーイをじっと見る。だが、それはさつきとは真逆で、とても優しいものだった。

光「がきんちよ、一つだけ先に言っとくけど私、地球は大嫌いだけど、別にここは嫌いじゃないわよ・・・。何より、ここには・・・」

守ってもいいかなくなって思えるものがある・・・

そう囁き、ウルトラマンボーイの隣を通り過ぎ、どこかへと向か

っっていく光。ウルトラマンボーイは慌てて光に声を掛ける。

ウルトラマンボーイ「ま、また会えるよね？」

光はその質問に一瞬ピタリと立ち止まったが、すぐにまた歩き出し、黙って前を歩きながらウルトラマンボーイに手をひらひらと振った。ゼロたちは光の姿を捕え、すぐさま近寄る。

リリー「姫様!!どこへ行かれてたのですか!?!心配したんですよ!!」

光「あゝ、はいはい」

ゼロ「勝手に外に出歩くなっつーの!!」

光「誰のせいであんなになったと思ってんのよ!だいたいあんたがねえ……!!」

ゼロ「なんだとお!!」

ギヤーギヤーと騒ぐ向こうの姿を見て、ボーイとガイアたちと言うつと……。

ウルトラマンガイア「あの子があの噂の地球人だったんだ……!!」

ウルトラマンアグル「ああ……。顔がマントに隠れて全然気づかなかった」

アグルたちはただ光の姿を見て、驚きを隠せないでいる。ボーイは……。

ウルトラマンボーイ「じゃあ……。またねーっ！光師匠おおく  
く!!!」

大声で光に別れの挨拶をするウルトラマンボーイ。ゼロはそれを聞き逃さなかった。

ゼロ「光が師匠……。!?プツ……。!」

微かに笑いを含んでいるゼロのその口調に光のスイッチが入る。

光「ウフフ……。ゼロオオ……。!やっぱり、ぶっ飛ばす……

^^  
」

リリー「ちょっ！姫様!!!どういうことですか師匠ってー!?!」

傍から見れば光の笑顔は黒い笑みにしか見えないが、ウルトラマ

ンボーイにはそれが照れ隠しのように見えたのであった。

不良な師匠と真面目な弟子？（後書き）

今回はかなりの長文になりました^^（フィー・・・疲れたあ・・・）  
ウルトラマンボーイとウルトラマンガイアの口調（特にガイア）っ  
てこんな感じでいいのかな？ちょっと不安・・・。

これから私は、テスト期間中（生き地獄）になってしまいますので  
もしかしたら、更新が遅れてしまいかもしれません><。けど、そ  
の分テストと小説も頑張りますのでよろしくお願いします！！

暑い夏のケーキ（前書き）

光「今年も来ちゃったわね・・・」

あれから十年前・・・、早いものね・・・

光（今年はお墓参り行けないかもしれないわねえ・・・）

光「甘いものは・・・まだ好きになれない・・・」

光はカレンダーをゆっくり見つめ、悲しそうな瞳でどこか遠くを見ている。日の光指す暑い夏の七月の下旬の中、少女が一番嫌いでつい弱音を吐きたくなってしまふ日に刻々と時は、近づいていった。

## 暑い夏のケーキ

リリー「今日は姫様の誕生日なんです!」

ゼロ「へえ〜・・・!」

リリーから突如出てきた光のお誕生日の話。久々の面白そうな話題に食いついてくるミラーナイトたち。

ミラーナイト「今日は光さんのお誕生日なんですか^^」

ジャンボット「そうか。光も一歩大人になったということか」

グレンファイヤー「あいつ、自分のこと何も言わねえからなあ・・・。何にも用意してねえぞ?」

何も持っていないことをアピールするかのように手をパアツと開き、リリーに見せるかのように広げるグレンファイヤー。

リリー「実は、みなさんに作って欲しいものがあるんです!」

ジャンボット「作って欲しいもの?」

ミラーナイト「なんですか?それは」

リリー「これですー!」

リリーは一冊の本を取り出して、あるページをゼロたちに見せた。そこに書いてあったのは……

ゼロ「ケーキ……?」

グレンファイヤー「なんだ?この……」ケーキ「って言うのは……???」

リリー「地球でのお祝い事や記念日とかに食べるお菓子です」

ミラーナイト「リリーは、これを作ったことがあるんですか?」

リリー「いいえ、ありません」

そこはキツパリと言うリリー。グレンファイヤーはほぼ呆れ顔で答える。

グレンファイヤー「じゃあ、無理じゃねえか!」

ジャンボット「そうだな……。この「ケーキ」というものは見た目からにして難しそうだしな……」



メビウス「ええっ！！ぼ、僕！？・・・ですか」

リリー「お願いします！メビウス！！」

リリーはこの通りと言う風にメビウスに頭を下げる。

ゼロ「メビウスは「ケーキ」食ったことがあるんじゃないか？」

メビウス「確かに食べたことはあるけど・・・」(サコミズ隊長の誕生日パーティーの時)

グレンファイヤー「おお！！」

メビウス「いや、でも僕はカレーしか作ったことが・・・」

渋るメビウス。自分の失敗で光の誕生日がぶち壊しになるのが嫌なのだろう。でも、優しいメビウスはウルトラマンとして困っている人をほうっておくこともできない。

ゼロ「いいじゃねえかよ、別に。暇なんだからおー」

メビウス「うん・・・！でもお・・・」

グレンファイヤー「よし、こうなったら強制連行だぁー！！」

ミラーナイト「失礼します」

ジャンボット「すみません、悪くは思わないでください」

メビウス「ええええ!!!??」

メビウスはジャンボットとミラーナイトにがちりと体を掴まれ、身動きが取れない。そんな場所に運悪く、ウルトラマンヒカリも出くわしてしまった。

ヒカリ「そんなところで何をやっているんだ?メビウス」

メビウス「た、助かった!ヒカリ助けてくれ!!」

メビウスがヒカリに助けを求める前にグレンファイヤーが動いた。

グレンファイヤー「確保おおお!!」

ゼロ「おおお!!!」

ヒカリ「な、なんだ!?!うわああああ!!!??」

有無も言わせずヒカリを捕まえるゼロ。こうして、ヒカリとメビウスはゼロたちの手によって保々無理やり光の家へと連れて行かれたのであった。

ヒカリ「うむ……。ケーキか……」

料理本を見て、黙り込むヒカリ。ヒカリは元科学者だった。だったら、こういう計算などは得意はずだ。

ヒカリ「まあ、できなくはないが……」

リリー「ほんとですか!」

ヒカリ「ああ、材料は一応全部ここにあるみたいだしな……」

料理本を手にして、読み始めるヒカリ。ここまで来たらもう引き返せない。メビウスも覚悟を決める。

ヒカリ「まず、二組に分かれよう。一つはクリーム係ともう一つはスポンジ係だ」

メビウス「じゃあ、僕はクリーム係にいきますね!」

ゼロ「俺はスポンジ係だ!」

グレンファイヤー「俺も」

リリー「私もスポンジ係の方にいきます!」

ミラーナイト「じゃ・・・私たちは」

ジャンボット「クリーム係にいこう」

ヒカリ「私はスポンジの方にいくとしよう・・・（ゼロたちだけじゃ心配だからな）」

班決めをし、各自の作業に取り掛かった。だが、普段料理などしたことのないウルトラマンたちにとってはかかってないほどの戦いだっただ。

ゼロ「うん・・・こんぐらいでいいっか」

ヒカリ「こら、ゼロ。ちゃんと計量器で測れ!」

ゼロ「面倒くさあ・・・」

ミラーナイト「メビウス、砂糖です」

メビウス「ミラーナイト、これは塩だよ・・・」

ミラーナイト「あっ!す、すみません」

リリー「あれ？なかなか材料が混ざらないな・・・もっとかき混ぜなきゃ！」

ゼロ「うわあっ！？リリー、もっと丁寧にやれよ！！生地が顔に飛んだ！><」

リリー「ごめんなさいー！」

グレンファイヤー「よっしゃー！！ようやく俺様の出番だな。グレンスパークウウー！！！」

ヒカリ「バカッ！やりすぎだ、グレンー！！」

グレンファイヤー「まだまだあああー！！！」

ジャンボット「・・・・・・・・」

メビウス「うわあー！良い感じにできてる。生クリーム泡立てるの上手ですね！ジャンボットは」

ジャンボット「・・・・・・・・」

メビウス「あのー、ジャンボット。も、もう良いんじゃないかな？かなり泡立ってきてるみたいだし・・・」

ジャンボット」・・・・・・・・・・」

メビウス「う、うわあああ！！！！？？」

ゼロ「な、生クリームのは水だ！！」

グレンファイヤー「に、逃げろおおお！！！！」

ヒカリ「その前に誰かあいつを止めてくれええ！」

ジャンボット「・・・・・・・・・・（楽しい）」

それから二時間後・・・・。なんとか、ケーキ(?)と思われる物  
体は完成した。

ゼロ「で、できた・・・」

メビウス「よかつた〜！」

グレンファイヤー「疲れたあ〜・・・」

ヒカリ「こんな小さなものを作るのにこれほどの時間を費やす  
とは・・・・・・・・」

フ〜とその場にいた者たちから安堵の息が漏れる。なんとか無事に  
完成した。後は本人の光が帰ってくるまでに部屋の飾りつけを・

誰もがそう思ったときだった。

光「ただいま」

リリー「!?!」

光「あっ・・・」

ゼロたち「「「「「「あ「「「「「」

・・・。。。

しばしの沈黙が流れる中、その場に硬直しているゼロたちを怪訝そうな目で見える光。すぐリリーに問いただす。その声には、微かに怒りが感じられる。

光「リリー・・・これはどういうこと？説明しなさい・・・」

リリー「・・・」

メビウス「こ、これはリリーやゼロたちが光ちゃんを喜ばせようと作ったケーキで・・・」

光「・・・ッ!?!。リリー・・・。今日がなんの日か忘れてしまったの・・・?」

光は怒りで震えた手で机を殴る。その衝撃で、机に乗っかっていたケーキがバランスを崩し、床へと落ちる。

光「今日は私のママとパパが亡くなった日ってことを!!」

ゼロ「・・・!!」

今日は、私が生まれた日であり、親が死んでしまった日。私のせいでママとパパは死んでしまったの。私のつまらない我が儘のせいで・・・。だからそんな私に誕生日なんて祝う資格などないのだ。

光「私が・・・あんな我が儘言わなければ、今もきっと・・・私の隣でパパもママも笑ってた・・・」

( ) ( そう・・・きっと笑ってたんだ・・・ )

誰よりも傍にいたかったのに、いれなくて　ごめんなさい

助けたかったのに助けられなくて　ごめんなさい・・・

「ごめんなさい・・・」

「ごめんなさいッ・・・!!」

誕生日になるといつも悪夢ばかりを見る。一人ぼっちで食べるケーキなんてちつともおいしく感じられなかった。だから、私は甘いものが嫌い……。人は甘いものを食べると幸せと言うけど私は逆に悲しくなってしまうから……。

光「私は・・・ケーキなんて大嫌いッ!!!」

リリー「姫様・・・」

光「出てって・・・!今は一人になりたいの・・・」

ゼロ「行くぞ、リリー・・・」

ヒカリ「今はそつととしてやろう・・・」

リリー「・・・」

ヒカリはリリーの肩に手を置き、一緒に部屋を出ていった。最後はまでリリーは心配そうに光を見たが、光は一度も振り返ることはなかった。

ゼロ「リリー……。どういうことなんだ？」

メビウス「光ちゃん、両親が亡くなった日って言ってましたけど……」

リリー「……姫様の両親は、姫様の誕生日の日に飛行機事故に巻き込まれて死んでしまわれたのです……」

リリーは静かに語り始めた……。

あれは十年前のできごとです。姫様のママさんとパパさんはその時、海外に出張中で姫様の約束を果たすため、急いで仕事を終わらせ日本行きの飛行機に乗って、日本に向かわれてました。だけど、飛行機は日本にへと着く前に海の真ん中で謎の爆発を上げ消えてしまったのです……。その時から、いつも誕生日の日が近づいてくると「甘いものは好きになれない……」と口癖のように言うのです。本人には、自覚はありませんがね……。

ジャンボット「そんなことが……」

ミラーナイト「なんとかできないんでしょうか？」

ヒカリ「それは無理だな……これは精神的な傷だ。例え、ウルトラマンであろうとなかろうと誰にも癒すことのできない大きな傷。誰にもどうしようもできない傷なんだ……」

グレンファイヤー「くそお……」

ゼロ「光……」

光は見えない両親の鎖で縛られ、今でも苦しみ続けている。でも、ヒカリの言う通り今のゼロたちには何もできない。ゼロはただ、光の家と繋がるドアを見つめる。

パタンツ……。

リリーたちが出ていき、そこに残されるのは静寂な部屋とゼロたちが作ったケーキだけ。本当、さっきまで騒がしかったのが嘘のようだ。

光「……」

毎年、誕生日に見る夢……。それは死ぬ前、ママとパパとした約束。

『早く帰って来てね！私、いい子にして待ってるから！！絶対遅れちゃダメだよっ！』

『はいはい』

『じゃあ、行ってきまーす!』

いつもと変わらない両親の背中姿。今でも、走馬灯のように蘇る。

光「……………掃除しなきゃ」

光は地面に落ちたケーキを丁寧に拾い、皿に盛りつけた。形はぐちゃぐちゃになってしまったが、味はそう変わってないはずだ。椅子には座らず、地面でままで光はホークを持ち、不格好なケーキをパクリと一口食べる。それはとても、甘かった。クリームもちよっと硬くて、スポンジも少し焦げている。

光「甘いものは好きじゃないって言ったのに……………」

でも、おいしかった…………

今まで、どんな料理よりおいしいと感じられた。形も見た目も悪くて、クリームも物凄い甘くて……………なのに……………。こんなケーキいつ以来だろう…………？

光「おいしい……」

気づくと瞳から涙が零れていた。だけど、私はそんなことは気にせず、ただひたすらケーキを食べ続けた。ケーキに自分の涙が零れ落ちて、途中からケーキが甘じょっぱくなっていた。

光「……うっっ……！うっあぁ……！！」

泣きじゃくりながらケーキを頬張る光。手で涙を拭いても涙は溢れてくるばかりだった。

なんて自分は馬鹿なことをしてしまっただろうと光は思った。私を祝おうとするリリーたちに当たって何も意味もないのに……。

( (こんなこと今更思っても遅いのに……) )

そんな暗い一人ぼっちの部屋の中、フツと急に声を掛けられた。

ゼロ「結局、なんだかんだ言って食ってんじゃねえかよ……」

光「!？」

なんと後ろを振り向けば、ゼロがこっちの顔を覗き込んでいるではないか。光は、慌てて自分の涙を拭き取る。

ゼロ「なんだ、お前・・・泣いてんのか？」

光「はあ！？何言ってるの！これは・・・そのっ・・・目にゴミが入ってなかなか取れないから、痛くて泣いてただけだよッ！」

ゼロに涙の理由を聞かれてかなり動揺する光。光の咄嗟とっさに考えついた言い訳を聞いて、ゼロも呆れかえる。

ゼロ（そんなセリフ・・・今どき誰も言わねえよ・・・汗）

でも、ゼロは知っている。ウルトラマンの誰かが昔、自分のことを「ツンデレ」と言っていた。普段はツンツンしてるが、いざという時はデレる。今はもしかしたら、その時なのかもしれない・・・。そう思ったゼロは、なるべく相手を刺激しない言葉を選ぶようにする。

ゼロ「そ、そんなことより！ケーキッ！！味、どうだったか！？」

光「・・・生クリームは少し泡立すぎて、クリームが固い。後、砂糖入れすぎ。スポンジの方は、中生焼け、外焼きすぎ・・・。もつとよく全体の材料が混ざるようにかき混ぜること」

ゼロ「ううっ……」

光のダメ出しが鋭くナイフのようにゼロの体に突き刺さる。どんどんとゼロの体が縮こまっていく。だけど、次の光の言葉でピタリとそれは止まる。

光「でも……おいしかった」

ゼロ「えっ……！」

ゼロは素早く顔を上げ、もう一度光に問いただす。

ゼロ「もう一度ッ！もう一度言ってくれ……！」

光「はぁ……？だからおいしかったって……」

ゼロ「おおお……！もう一度……」

光「煩いわ……！このポケット……！」

ゼロ「痛っ……！」

何回も同じ言葉を言ってだんだんと恥ずかしくなってきた光。ゼロの頭に拳を一つぶつける。

ゼロ（ たつく・・・素直じゃねえな・・・ほんと ）

この場にセブンとレオがいたら迷わずに「お前もだろ」っとツッコんでいただろう・・・。

ゼロは床に置いてあるケーキが乗った皿を持ち上げる。それを見た光はまれでお菓子をとり上げられた小さな子供のようになりキーンと怒る。

光「ちよつと！私まだ食べてる最中・・・」

ゼロ「食べるんだったら、ちゃんと机で食べる」

お前は犬かとゼロは言いたくなかったが、光が烈火のごとく怒りそうなのでやめておこう。光が机に座ると同時らへんにリリーやメビウスの姿が見え始めた。光はメビウスの瞳を見て、今度はちゃんと素直にメビウスやヒカリ、ジャンボットたちにもお礼を言った。

光「あのケーキ・・・ありがとう。おいしかった・・・」

メビウス「はい！^^」

本当に小さな声だったが、きちんと言えた。普段は小さなことだが、それがなかなかできない人にとっては大きなことなのだ。光は不思議に自然とみんな前でニッコリと優しい笑顔で笑うことができた。

光「今度は私が手本を見してあげる、覚悟しときなさい」

メビウス「は、はいっ！」

ヒカリ「メビウス、声が裏返ってるぞ」

ゼロ「ってか、光はお前の年下だろ？敬語なんで使っただよ」

メビウス「いや、僕・・・タロウ教官からほとんど物を教わってたのでつい・・・」

グレンファイヤー「緊張しすぎだろ」

光はクスリと誰にも気づかれぬ声で密かに笑う。そして、こんな時間が少しでも長く続いたらいいのに・・・とそっと心の内で願っていた。

## 暑い夏のケーキ（後書き）

ゼロ「なあなあ光！ケーキの切り方どうだった？」

光「どうだったって言われても……。私が床に落としてぐちゃぐちゃになっちゃたし……。分からないわよ」

ゼロ「ちえ……。せっかく俺がゼロスラッガーで切ってやったって言うのによ……」

光「え……。？ちよつと初耳なんですけど、その情報」

ゼロ「あれ……。言つてなかったか？」

光「一言も言つてないわよ……。ついでに聞いとおくけど、右？左？どっち？」

ゼロ「両方だ！」

（に、二刀流ツツ！！だと……。ツ！？）

あつ、でもホントにゼロスラッガー二つとも生クリームが付いてる。しかも、そんなことにも気づかないでゼロ、堂々と頭に装着してるし……。

光「ねえ・・・それってちゃんと消毒されてるわよねえ？」

ゼロ「どつという意味だっ！」

光「だつて一応武器なんでしょ？だつたら、怪獣や宇宙人のばい菌やなんやらで汚そうじゃん・・・」

ゼロ「お前つて・・・本当、容赦ないよな」

今ので宇宙全体の怪獣や宇宙人のメンタル面をノックダウンした  
だろう・・・。ゼロは普段は敵の筈の怪獣たちのあまりの言われよ  
うに、同情を覚えるばかりであった。

どうも、銀色の闇です。いや、また長文になってしまいました  
^^

今度はメビウスとヒカリも出させてもらいました！(ゼロと同  
じぐらい好きなんですよ^^!!この二人はww)

お知らせ

テストは終了したんで、小説を再開します！またお世話になります、読者のみなさん。では！！感想お待ちしております！！（誰でも大歓迎！！^^^）

熱き炎の海賊たち (前書き)

ここはどこ・・・？

暗い雲に覆われた空に亀裂が入った地・・・。そこはまるで世界が滅んでしまったかのようだった。しばらく歩いていると、地面へと倒れている人影が多数見えた。光は気になって、その場に寄った。そこには驚きの人物たちが倒れていた。

う、ウルトラマン・・・？

目に宿る光は失われ、カラータイマも色を失くし止まっている。光はもつと奥に進むと、ついに見たことのあるウルトラマンまで発見してしまった。

セブン、レオ、ゾフィー、ガイヤ、アグル、ダイナ、コスモス、  
メビウス・・・

この前知り合ったウルトラマンたちさえ、力を失くしその場に倒れている。

光「何よこれ・・・？何がどうなってんのよ！」

だんだんと光も怖くなってきた。自分の知らない場所でウルトラマンが屍のように倒れている。光は逃げ出すように奥に走る。

誰もいない……。生きてるのは私だけなの……。私だけしか……。いないの……。？

そんな不安を頭の中で募らせながら、走っているとそこには倒れていてほしくないとどこかで願っていた奴らがいた。

ゼロ、ミラーナイト、グレンファイヤー、ジャンボット、そしてエメラナ姫も……

戦いに敗れたかのように、その場に倒れており、体は乱暴に放置されていた。

光「ゼロツッ!!起きて!起きなさいよっ……。!!!!」

光はゼロたちの傍により声を掛け、体を激しく揺さぶる。だが、誰も答えを返してはくれなかった……。そんな中、誰かから小さなうめき声が聞こえた。

エメラナ姫「うう……。」

光「すっかりして!!何があったの!?!」

白いドレスは土で汚れ、体も傷だらけになっていた。光はエメラナ姫の頭を自分の膝に置き、問いかける。エメラナ姫は光に何か伝えるようにパクパクともう動かない唇を必死に動かし光に言った。

エメラナ姫「に……て……」

光「え……？」

エメラナ姫「にげ……て」

最後にそう言い残し、エメラナ姫は息を引き取った。光はそつとエメラナ姫の体を置き、拳を握りしめた。突如、ウルトラマンが山のように積み上げられてる頂上から、少女の声が聞こえた。光はすぐに振り返り、姿を見る。だが、暗雲の影に隠れて顔までは見えなかった。

光「あんたがやったの……？」

「……？」「フフ……何をそんなに怒っている？仲間が殺られて悔しいか？」

光「私が怒ってる……？勘違いしないで！私が怒っているのは今、私が聞いている質問にちゃんと答えないことと、アンタが勝手に私のおもちやたちに手を出したことよ……！！！」

????「フン、戯れ言を・・・」

少女と光は対立する。それでも、少女の方は口を閉じようとはしない。

????「殺したのは私じゃない・・・。私たちだ」

光「はあ・・・?」

意味不明なことを言う少女に光は怪訝な目で見る。次の瞬間に雷が落ちる。一瞬の光の瞬間に光は驚くべきものを見た。そこには少女に膝をつき、左手を地面につき頭を下げている、まるで少女に忠誠を誓うかのようにいるリリーの姿あった。そんな光の様子を笑うかのように少女は見る。

光「リリーッ・・・!?!」

????「どうした? 顔色が変わったぞ」

光「どうした・・・? ふざけるんじゃないわよ!! あんたリリーに一体何をしたッ!」

光は怒りでわなわなと震える。

「????」何もしてはいない……。こいつが勝手にやっているだけだ」

光「嘘をつくなッ！リリーは……リリーは私の家族なんだからそんなことするはずない!!」

「????」家族……?はあッ……!笑わせるなあ!!こいつはただの物だ。道具にしかすぎない」

光「なんですって……!もう一度言ってみろッ!!」

光が怒りに任せ、手を上げたその時だった……。

ドロツ……。

光「え……?」

光の手には血がべっとりついていていた。地面には綺麗な真紅色の花のように飛び散る、血の花びら。

「????」だから、言っただろ……?」

少女はゆっくりと光に近づき、距離を縮める。その少女の顔を見

て、光は衝撃を受けた。だって、そこには自分にそっくりな顔を  
した赤い瞳と黒い髪を持った少女がいたのだから……。

ダーク「殺したのは私じゃない……。私たちだと……」

光「きあああああ!!!!!!……」

光「はっ！」

そこはいつものベットの中だった。光は辺りを見渡すが少女の姿  
はなかった。代わりにあったのは光を心配そうに見ていたリスの  
リーの姿だった。

リリー「大丈夫ですか？うなされていたようですが……」

光「え、ええ……。大丈夫」

リリー「すみません。起こすかどうか迷ったんですが……起こ  
せばよかったですね」

光「もう大丈夫よ、あんまり気にしないで……」

リリー「あの、これから少しゼロたちと約束があるのですが……」

・行ってよろしいでしょうか？」

光「ああ・・・行ってらっしゃい」

もう大丈夫と言うかのように優しく笑顔を向ける。少しリリーは後ろ髪を引かれる思いだったが、「では・・・」と言い、元の姿に戻りその場を立ち去った。

( ) (悪夢か・・・。それにしては妙にリアルだったな・・・)

あの血の感触と風景・・・。そして、辺りに漂う僅かな死臭・・・。光にはあれが夢には思えなかった。一番気になったのは最後に言ったあの子の言葉。

『だから、言っただろう・・・？殺したのは私じゃない・・・。私たちだと・・・』

光「・・・・・・・・」

ギュッと光は布団を握った。布団はくしゃりと皺しわになって、残っていた・・・。

その頃、一方ゼロたちはと言うと……。

ジャンボット「お、来たな」

リリー「おはようございます、みなさん」

ミラーナイト「おはようございます、リリー」

リリーの朝の挨拶にミラーナイトも礼儀正しく挨拶をする。だが、グレンファイヤーはいつもより落ち着きがなく、リリーたちを急かす。

グレンファイヤー「そんなことより、早く行こうぜ！」

ゼロ「もう着いてるらしいぜ、炎の海賊が……！」

ミラーナイト「でも、よかつたんでしょうか……？光さんに内緒で行って……」

ジャンボット「これから何が起こるか分からないからな・・・。  
それにライトとの約束もあるし」

プリンセス・ライトとの約束・・・。それは光には天馬の鍵についてのことを教えないこと。

リリー「そうですね・・・。私も心が痛みますが、これも姫様のためです、仕方ありません」

グレンファイヤー「そうと決まれば早く行こうぜ!!」

ゼロ「お前はただ船長たちにただ会いたいだけだろ・・・（汗）」

ゼロたちはこうして、セブンとレオとそして、炎の海賊船がある場所にへと足を向けたのであった。

## 熱き炎の海賊たち

グレンファイヤー「久しぶりだな！！船長！」

ガル「おお！グレン！！元気にしてたか？」

光の国にはあまり似合わないデカイ海賊船が道に停まっていた。その中から現れたのは、別の宇宙で炎の海賊と恐れられ、そして元グレンファイヤーが用心棒として仕えていた船長のガル、ギル、グールの三人が出てきた。彼らに来てもらったのは他でもない、天馬の鍵についてだった。炎の海賊なら何かしているかもしれないとわざわざレオに連れてきてもらったのだ。

セブン「いい雰囲気の中悪いんだが・・・本題に入らせてもらおう」

ガル「ああ・・・天馬ベガサスの鍵のことじゃったな。まあ、中に入れ」

ゼロたちは人の入れる大きくなり、取り合えず船の中で話すことにした。

ゼロ「おっさんたちは天馬の鍵のことについて何か知ってるのか？」

ギル「知ってるも何も！海賊だったら誰でも一度は聞く代物だ！」

レオ「そんなに有名なものなのか？」

グル「うむ。伝説上の物でその恐ろしい破壊力と殺戮。そして、その反面、大地を癒す力と人々を栄光にへと導く・・・と語り継がれている」

三大船長たちは、熱く天馬の鍵のことを語り始める。宝物の話になるといつもこれだ。そんなことをグレンが思っていることを知るすべはなく、ガルたちは話し続ける。

ガル「天馬の鍵には、色んな名があるんじゃない！」

ギル「一つ目は血を吸いし、青き薔薇。これは、天馬の鍵の色を表わしている。石は、実際に青色でその色は血を浴びることに青い薔薇のように綺麗に咲き誇る。まるで、持ち主の精気を奪うかのよに・・・」

グル「二つ目は零れた大地の雫。渴ききつた大地を一瞬のごとく潤わせ、その地に栄光をもたらすと言われている」

ガル「そして、三つ目は死者のいにしえの魂。誰もいないはずなのに、声が聞こえる……。その声には、かつて天馬の鍵に滅ぼされていった者たちの声や天馬の鍵の意志の音が聞こえると言われ、その声を聞いたものたちは、必ず近いうちに死が訪れると恐れられている」

ギル「今、俺たち海賊の中での天馬の鍵の名は 混沌の石 だ」

グル「必ず持ち主を狂わせ、その時代の運命さえも破滅へと導くと恐れられ、誰も求めてはならない力……。グレン、悪いことは言わん。これには手を出すな」

ガル「ああ。それが正解だ」

ガルたちの話を聞き、セブンたちもどう対処するかを考え始めた。

セブン「そんなに危険なものだったのか……。天馬の鍵は」

ゼロ「でも、どうするオヤジ？ 光はあれが危険な物だからと言って、そう易々とは渡してくれないと思うぜ」

レオ「困ったな……」

リリー「多分、そこらへんなら問題ないと思います」

ゼロ「え？」

そこに居たもの全員がリリーの話に耳を向けた。

リリー「天馬の鍵はティアラ様の魂が石と化し眠っているもの・  
・。なら、その生まれ変わりの姫様なら天馬の鍵と魂を同調させら  
れます。なので、自分の身を滅ぼすことはまずありません」

レオ「それは本当なのか？リリー」

リリー「はい。姫様は天馬の鍵の正当な後継者とも言っては過  
言ではないでしょう」

セブン「そうか。それなら安心だな・・。だが、もし光君が天  
馬の鍵の意志・・破壊の意志を持つプリンセス・ダークに意識を持  
っていかれてしまったら・・どうするか」

そう、本題はそこだった。自分たちに強大な力を持つ、ましてや  
伝説上にまで語り継がれているそんな代物に勝てるかどうか分から  
なかった。だが、セブンの迷いを打ち消すかのようにゼロは光に満  
ちた目で語る。

ゼロ「オヤジ……。俺たちウルトラ戦士はそんなヤワじゃねえよ。特に俺たちウルティメイトフォースゼロはな!!」

ゼロが仲間の目を見る。グレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボットは黙って頷き合う。

( ( そうだ……。何があっても俺たちウルティメイトフォースゼロが止めてみせるッ!! ) )

セブン「そうだな……」

レオ「頑張れよ!ゼロ!ミラーナイト!ジャンボット!グレンファイヤー!」

ゼロ「任せときなあ!

ミラーナイト「はい!」

ジャンボット「ああ」

グレンファイヤー「おつよ」

みんなが新たに一致団結した時だった。船長たちは、難しい顔してグレンファイヤーにこう言った。

ガル「グレン……」

グレンファイヤー「なんだよ？今いいところなんだよ！」

ギル「俺たちと一緒にここを出よう」

ミラーナイト「え……？」

誰もがそこにいたものが驚いた。グレンファイヤー自身でさえも、突然の船長たちの申し出に驚きを隠せないでいた。

グレンファイヤー「な、何言ってるんだよ！船長！！俺は……ッ  
！」

ガル「お前はあれの真の恐ろしさを知らないからそう言えるんだ！  
！」

ギル「そうだ！俺たちはそれを言うためにもここに来たんだ！  
！」

ガル「グレン、あれは化け物だ……！絶対近づけばお前の身も保障されなくなる……！」

いつもにない船長たちの真剣な眼差し。これは悪魔でグレンファイヤーを真の仲間であるからこそ心配して言った言葉であった。グレンファイヤーはそんな船長たちの思いやりに感謝するが、自分の気持ちをはっきりと述べた。

グレンファイヤー「あんがとよ、船長……。でも、ここで逃げたら炎の海賊の名が廃っちまうんだ!!」

ギル「グレン……!!」

ギルはなんとかグレンを説得させようとするが、ガルがギルの肩に手を乗せ、頭を横に振る。

ガル「無駄だ、ギル……。俺たちがどんなに言ったて、こいつはもう止まらねえよ……」

ギル「だが……っ!!」

ガル「グレンを……ウルトラマンを信じよう!もしかしたらこいつらなら天馬の鍵を破壊できるかもしれない!!」

ダーク「ほお……。私を破壊する、か……」

ガル、ギル、ガルが目を合わせ頷き合った直後、背後から異常な

ほどの殺意がこもった声が船内に響いた。気配はまるで感じられなく、急いで振り返るゼロ。そこには、今日内緒で来たはずの光の姿があった。しかし、その体の中にあるのは光ではないことはすぐに分かった。

ダーク「偉くなったものだな、炎の海賊も」

ゼロ「お前は・・・！ダークツ！！」

セブン「何故ここに！」

誰もが予想していた最悪の出来事がさっそく起こってしまった。

ダーク「この私に隠し事ができると思ったのか？雑魚共め」

ダークはガルたちを獲物のような目で見る。鮮血の赤い瞳でギリと見られ、船長たちはらしくもなく震え上がる。

ダーク「ふふ・・・久しぶりだな、炎の海賊よ」

ガル「て、天馬の鍵・・・いや、混沌の石・・・ッ！！」

グレンファイヤー「なんだ！？船長たちはダークを知ってんのか？」

ガルたちは黙り込んだが、口を開き昔話をし始めた。

ガル「あれはまだ俺たちが海賊をやり始めたばかりのことだった……」

ギル「若さばかりに俺たちはビツクな宝……天馬の鍵を狙った」

。グル「だが、そのせいで多くの仲間たちが命を落としていった。天馬の鍵にみんな、皆殺しにされてなッ！」

グルは目に涙を溜め、ダークを睨むがダークは平然としていた。いや、逆に狂ったようにクスクスと笑う。そして、自分のことを語り始めた。

ダーク「この天馬わたしの鍵を使って己の精神に耐えられず死んだ者や人を恨み、殺して欲しいと願われそして、天馬わたしの鍵で殺され、滅ぼされていった民や種族たちの無念の気持ちや……そんな怨念から私は生まれ、出来たのだ」

レオ「それがどうした！」

ダーク「なのに何故？私は必要とされない……私はお前から出来たのに……何故？」

何故、人はみな私を悪とするのだ？

もし、私が誰からも必要されなくなったら、私は一体なんのために生まれたの……？

恨み、憎しみ、妬み、怒り、悲しみ、絶望……天馬の鍵で死んだり、滅ぼされていった奴らのあらゆる負の感情が集まり、ゆっくりと塗り固めていって、闇は生まれた。ダークは手にペンダントの石を持ち、眺める。ダークもただ、人に願われ、造られた存在。その心に反応するかのように天馬の鍵はドクンドクンと黒い闇を打つ。

（（そう、私は闇……人を殺すためだけに出来た人格……誰の心にも眠りし闇の心！！））

ダーク「だったら、私が私自身のために人を殺さなきゃいけない……私が存在するためにねッ！」

その場の空気が緊迫感で張り詰められる。セブンやレオ、リリーやウルティメイトフォーも身構える。

「ダーク」さあ、楽しい殺しの時間よ・・・」

どこまでも怪しく光る赤い瞳はゼロたちを離さなかった。

熱き炎の海賊たち (後書き)

はあゝ・・・誰かから感想来ないかな？（-\_-）  
暇で仕方がないのです。

誰かヘルプミイイイー！！！！

なんか眩きみたいですみませんッ！！

虐殺の姫（前書き）

何時、どこで生まれたが分からないが 私はそこにいた

白い世界の中、一つちよこんとある黒い世界に私はいた 私は  
何故かそこにいた

白い世界は楽しそうにしているのに 黒い世界は悲しい事ばかり

人の苦しみや悲しみで私は成長していった そして 学んでい  
った

気が付くと必ず転がっている無残に殺された死骸

自分で殺したくせに、私は死んでいるのも気づかず話しかける

モシモシ・・・ネエ・・・起キテ？一緒ニ遊ボウ・・・

いつも見るのは血まみれの死体 真っ赤な地面 私に許しや  
助けを請う者ばかりだった

だけど私は殺した・・殺すしかなかった  
兵器なのだから  
だって私は

誰かが言った 私の瞳は殺してきた人たちの血の色だと

誰かが言った 私のその瞳の濃さは人を殺めてきた証拠だと

と  
だから、私は考えた　なんで私が生まれたのだろう・・・？

私がもし　光だったら　誰かに感謝されてた？　誰かから  
必要とされてた？　誰かから愛されてた・・・？

もっと楽に生きられた・・・？とか・・

いつの間にか光に憧れた自分がいた

でも、私はやめた　考えるのをやめた

そして、思った　私は他の生物の憎悪や怨念から生まれた

私は他の者を狂わせるためにいる

だから私はそれに従おう      他を傷つけ      他を葬るだけに  
生きよう

だって私はそうしないと誰にも求められないから・・・

誰にも必要とされナイカラ・・・

その日、私は闇になった

闇と呼ばれるようになった

## 虐殺の姫

さあ、手始めに何をしよう？ やっぱりさくつと殺す？？ ゆ  
つくりと痛ぶって殺す？

いや、それだけじゃ詰まらない・・・ こいつらを不幸のどん底  
に突き落として、それからどんどんと絶望の色へと染めていつてや  
ろっ・・・！

ダークは分かっていた。こういう情熱的で仲間思いの奴らがどう  
いうことをされるのが嫌だということを。それは・・・仲間が傷つ  
けられることだ。自分より仲間が傷つけられるのが嫌・・・まさに偽  
善者たちにはお似合いだ。そんな奴らが、仲間をもし殺されたらど  
ういう反応するかダークは想像するだけで愉快となった。

ダーク「リリー・・・」

だから、ダークは軽くあしらうかのように手をゼロたちに向け、  
ただ恐ろしく冷たい声で、こう言った。

ダーク「私の邪魔をする者は、すべて殺してしまいなさい」

まるで命を物のように扱い、殺すのもダークはまったく厭わなかった。その発言を聞いたゼロは怒りを露わとする。

リリー「!?!」

グル「なっ・・・!?」

ゼロ「てめえ・・・!命をなんだと思つてやがるっ!?!」

ダーク「言つただろう?私は人を殺すためだけに生まれたも近い存在・・・。第一、邪魔なものを消して何が悪い・・・?弱いものなどには、なんの生きてる価値もない」

ゼロ「なんだとっ!」

セブン「無駄だ!ゼロッ!今の彼女は正気じゃない!」

ゼロ「くそお・・・!」

( ) (どうやってたら、光の正気を取り戻せるんだ・・・ッ! ) ( )

ダーク「こいつらを殺しなさい、リリー」

リリー「しっかりしてください・・・っ!姫様・・・!!悪しき心に負けないでください・・・!」

ダーク「煩い……！さっさと殺りなさい……！」

リリー「くっ……」

リリーはダークに言われるがままにいきなりゼロたちに攻撃を仕掛けてきた。

グレンファイヤー「なにしゃがる！？リリーッ！！そんな奴の言うことなんか聞くな……！」

リリー「すみません……っ！私の中に流れている天馬の血が……言うことを聞いてくれないんですッ……！」

リリーは勝手に動く自分の体を必死に止めようとするが、それでも操り人形のように体が動いてしまう。グレンファイヤーはこれは危ないと思い船長たちを先に非難させた。

レオ「きつとダークがリリーの中に眠る天馬の血を操っているんだ……！」

ゼロ「くっ……！これじゃあ手出しができない……」

ダーク「リリー……。命令変更よ……」

「光の国を滅ぼしなさい」

ゼロ「!!」

リリーの繰り出す攻撃にずっと耐えつつも、このままでは埒が明かない。セブンたちがなんとか一瞬の隙をつきリリーの背後に回り込み、体を抑えつける。

セブン「今だ！ゼロ!!」

レオ「我々がリリーを抑えてる内に!!早くッ！」

ダーク「ちっ・・・役立たずめ・・・！」

ダークが手を横に振り切ると、リリーの体もそれにつられるように勢いよく壁に叩きつけられる。セブンたちもリリーの巻き添えを喰らい、同じダメージを受けた。

セブン「ぐはぁー！」

れお「ぐぶっ・・・!!」

リリー「うっ・・・!!」

ゼロ「オヤジッ！レオ！！リリー！！」

砂煙からセブンの様子が見えた。そこまで大きな怪我はしていなそうで、ゼロは安心する。だが、すぐに気持ちを切り替えダークに怒号をぶつける。

ゼロ「お前・・・！リリーごとッ・・・！！あいつはお前の仲間なんだろう！なんで一緒にやりやがった！！」

ダーク「仲間・・・？違う、アイツは「物」よ。私はそれを有効的に使っただけだ」

ジャンボット「なんて奴だ・・・！自分の仲間を使い捨ての駒のように・・・ッ！！」

グレンファイヤー「悪魔な野郎だぜ・・・」

ダーク「どうする？ウルティメイトフォースゼロ。私を攻撃すれば、光の体が傷つくぞ。できぬよなあ・・・！優しいお前にはそんなこと！！」

ウルティメイトフォースゼロたちを嘲笑うかのように笑い声を上

げながら、ダークは黒い雷でゼロたちを容赦なく攻撃する。ゼロたちは、その攻撃を耐えるしかなかった。

ミラーナイト「くっ！なんとという卑劣な・・・！」

グレンファイヤー「畜生お・・・！」

ジャンボット「でもどうする！？このままでは我々も本当にやられてしまうぞ！ゼロッ！！」

ジャンボットはゼロに訴えかけるように言うが、ゼロはだがどうしても光は攻撃はできなかった。こうなったらもう光の心に自分たちの声を届かせ自ら正気を取り戻してもらおうしか手がなかった。

ゼロ「いい加減・・・目を覚ましやがれえええ！！光イイイ！！！！」

（戻ってくれ・・・ッ！リリーを本当の家族のように慕っている優しいお前に・・・！！）

ゼロの必死の叫び声に答えるかのようにバラージュの盾が反応した。今までにないほどの光の瞬きがダークを襲った。

ダーク「きあああああ!!!」

グレンファイヤー「な、なんだ!?何が起こってんだ?」

ゼロ「バラージュの盾が・・・」

ジャンボット「おいつ!あれを見ろ!」

今までにないぐらいカツと目をかき開き、バラージュの盾を睨みつけるダーク。

ダーク「ば、バラージュの盾だとッ・・・!?何故貴様がこれ  
を・・・!!!」

バラージュの盾の放つ光がだんだんと凝縮され、ダークを刺すように真っ直ぐにと光の体へと指す。光の体からジュー・・・と蒸発するかのように白い煙が僅かにたっている。ダークはそのバラージュの盾の光に呻き苦しんでいた。

ダーク「ぐおおお・・・ッッ!!おのれ・・・!先祖のように・・・  
私の邪魔をするか・・・ッ!!ウルトラマンノアめ・・・!」

もがき苦しむ中、ダークは血のように真っ赤な瞳でゼロたちを睨みつけ、最後にこう言った。

ダーク「今回は諦めて引き下がってやるう……。だが忘れるなッ……。!!私を生んだのは貴様ら他の生き物だということをおなッ……。!う、うあああつっ……。!!!」

ゼロたちに言い残し、悲鳴を上げダークは消えていった。光はその場に意識なく、横たわる。ゼロたちは傍へ近寄ろうとするが、ゼブンに止められた。

ゼロ「何しやがる!オヤジ!!そこを退いてくれ!」

ゼブン「ゼロ。やはり、彼女は危険かもしれない。やむを得ないが彼女を宇宙警備隊の保護観察へと移動させる」

グレンファイヤー「おい!それって……。ッ!」

二十四時間、狭い部屋の中に入れ続けられ、ウルトラ戦士たちに見張られている。そう。牢獄の中に入れられてるようなものだ。

レオ「仕方がない……。こんなに暴れてしまっっては、もう我々だけでは手が負えない」

ジャンボット「だからと言ってそれじゃあ、いくらなんでも横暴過ぎます!!!」

せつかく、光との絆が作れ始めたばかりなのにそれを壊して、ますますウルトラマンへの不安を募らせても逆効果だ。だが、レオたちは断固として首を縦には振らない。

レオ「これはもう決定事項なんだ」

ミラーナイト「そんな・・・」

ゼロ「ふざけんなッ！俺はまだ・・・！！」

セブン「ゼロッ！いい加減にしろッ！！」

セブンの怒号にゼロの体はビクリと跳ね上がる。珍しく、ゼロがセブンに押されていた。

セブン「我々だって本当はこんなことをしたくはないんだ・・・！分かってくれ、ゼロ・・・」

ゼロ「オヤジ・・・」

セブンは気絶している光の体を優しく抱きかかえ、レオに指示をする。

セブン「レオ、お前はゾフィー兄さんたちやウルトラの父にこのことを知らせるんだ」

レオ「分かったよ、セブン兄さん」

レオとセブンはお互いのやることをするため、反対方向へと飛んで行った。そして、その場に残されたゼロたちはセブンを止めることも出来ず、静寂となっていた。その数分後、壁に埋もれていたリリーがヨロヨロと不安定な様態で立ち上がり、光の姿を探す。

リリー「あれ・・・？姫様は・・・？姫様はどこに行かれたのですか！？」

ゼロ「オヤジが宇宙警備隊の本部の最下層へ連れて行った・・・」

リリー「最下層って・・・何故・・・何故、止めてくれなかったんですか！」

グレンファイヤー「・・・」

リリー「くそお・・・ッ！うっ・・・！！！」

リリーは先ほどダークから受けた攻撃がまだ体に残っているのか、脇腹を抑え地面へと蹲る。だが、リリーは自分のことよりも光の後を追いかけようと体を無理に動かす。

ミラーナイト「無理です！リリー！！そんな体では・・・！」



約束をまた破ってしまった・ ・ ・ あの時、あの場所で約束した  
のに

貴方を必ず守ると・ ・ ・

リリーの頭の中には、花畑で笑う無邪気な女の子の背が浮かぶ。  
でも、花びらが散りゆくようにどんどんとその後ろ姿は遠くなる。

私は・ ・ ・ また大切なものを守れないのか・ ・ ・ ?

ゆっくりとリリーの意識は闇の中へと落ちていった。



囚われの少女（前書き）

白い花の花びらの舞う中、あの少女は笑っていた

楽しそうに笑っていた・・・ リリーも幸せそうに 麗しそうに  
見つめ、少女の傍にいた

ああ・・・ どうしてこんな夢を見るのだろう・・・？

どうして・・・こんなにも切ない気持ちになるのだろう・・・？

トラトラ トラトラ

それでも 白い花は記憶のように散っていった・・・

そう ずっとと ずっと・・・

## 囚われの少女

光「ここは・・・」

目を開けると見慣れない天井と窓一つない壁に固く閉じられた鉄で出来た扉。無機質な部屋でベットや毛布以外何一つもなかった。起き上がると光は自分の頬が濡れていることに気づいた。

光「え・・・？」

振り返ってさつき使っていた枕を見ると数滴の涙で濡れた跡が残っていた。

光「やだ・・・何泣いてんの、私・・・？」

( ) ( ) さつきの夢のせい・・・？って・・・あれ？私どんな夢を見てたんだっただけ・・・ ) ( )

涙を拭き、目の前にある扉と向き合う光。やはり、かなり固く閉じられている様子でいつも力に自信がある光でさえ開けることは叶わなかった。

光「はあく・・・仕方ないわね・・・」

無理やり開けるのは諦め、外にいる人たちに声を掛けてみることにした。

光「おいー・・・！誰かいないの？」

何度も扉を力強く叩き、向こうにいる相手に話しかけるが返事はいつまで待っても返ってはこなかった。

光「ここはどこなのよ・・・！」

朝リリーと別れた後から記憶が消えていた。気が付いたら、一人この中へと閉じ込められていた。時間がコツコツと経つにつれ、光の不安は徐々に高まり、イラつきを覚え始める。

光「どうして誰も助けに来てくれないのッ・・・！」

ぼそりと光が呟くとそれに答えるかのように頭の中にある声が響いた。

ダーク『それはお前が見捨てられたからさ』

光「！！だ、誰！？」

周囲を見渡すがやはり自分以外しかいない。光が混乱してる中、また声が聞こえた。

ダーク『私・・・？私はお前だ・・・』

光『わ、私・・・？』

ダーク『そう・・・。お前の闇の部分だ・・・』

その声はひんやりと冷たく、すべてを飲み込むかのような悍ましい声だった・・・。光は直感的に、こいつはヤバいと思ったが、今は情報が欲しく奥底にある恐怖を仕舞いこみ、ダークに話しかけた。

光『さ、さっき・・・私が見捨てられたって言ってたけど・・・どういう事・・・？』

ダーク『言葉の通りさ・・・。お前はゼロに・・・いや、みんなに見捨てられたのさ』

光『は、はあ！？なんで私が見捨てなれなきゃいけないのよ・・・！意味分かんないっ！！』

突然みんなに自分は裏切られたと告げられ、ますます混乱する光でも、頭に響く声は相変わらず冷静だった。そして、逆にダークは光に問った。

ダーク『じゃあ何故、お前の記憶は朝の時からしかない？』

光『そ、それはっ・・・！』

ダーク『何故、お前の心と体はそんなに傷ついている？』

光『うっ・・・！』

ダーク『何故、何時まで経ってもお前の仲間は助けに来ない？』

光『う・・・うるさい・・・ッ！煩い煩い煩いッ！！黙れ！黙れええええ！！！！・・・』

ダークの声を遮るかのように耳を塞ぎ、大声を出す光。床に付き、悲しみに暮れる。確かにそうだった。ゼロたちは何時まで経っても迎えに来てくれない。だから反論もできないし、何より嫌だったのはどこかでリリーやゼロたちを疑っている自分自身だった。ダークはそんな傷ついた光の心を誘惑するように話を持ちかける。

ダーク『本当の真実を知りたいのdarou? 私だったら、お前に力を貸すことができる・・・』

光を巧みに言葉で追い詰め、操り、すべてダークの思惑通りだった。

ダーク『光は闇に生まれ変わることができる。さあ・・・！私の教えたとおりに言え！！』

光『わ、私は・・・！』

光の顔に汗が数滴床へ滴り落ちる。震える声でブルブルと動きが止まらない唇を動かさそうとした瞬間。ある声がそれを死守した。

ライト『いけません！その者の声に惑わされては！！』

光『！・・・』

はっと我に返り、意識を取り戻す光。ダークは舌打ちをつき忌々しそうにその声の人物の名を呟く。

ダーク『ライトめ・・・！余計な真似を・・・ッ！！』

ライト『残念でしたね・・・ダーク！！貴方の思惑通りにいかなくって！！』

光を置いて二人は対立し、火花を飛ばし始める。

ライト『貴方は一体何を考えているんですか・・・！！』

ダーク『言っただろ。私はただ純粹に此奴こいつに眞実を教えるだけだ・・・』

ライト『そんなことをしたらッ・・・!!』

ダーク『そんなことをしたら・・・なんなんだ?』

ライト『くっ・・・!!』

ライトは言葉に詰まり、悔しそうに口を閉じた。ダークは勝ち誇ったように光をまた誘惑する。

ダーク『ほらな・・・光。ここには眞実はない・・・あるのは偽りの姿と友だけだ・・・もう一度言うぞ、光・・・眞実を知りたければ私と来い』

光『・・・』

( (私は・・・私はッ・・・!!) )

光は黙ってフラリと立ち上がり、閉じられた扉の前に立つ。ライトは光が何をしようとしているかを察し、光を全力で止めようとする。

ライト『ダメ!!その者の言う通りにしてしまっは!!...!!』

ライトの呼びかけも虚しく、光はダークの手を取るかのように代わりに呪文を言う。

光「天馬ヘカサスの鍵よ・・・我、漆黒プリンセス・ダークの姫が命ずる・・・！！！」

光は両手を大きく伸ばし、悪意に満ちた邪悪なる剣ツメを円状に数十個出し、壁へと差し向ける。

光「全てを破壊し、我にその力を示せ！！！」

ギラリと黒き剣は扉と突き刺さり、向こう側にいた見張り役の若きウルトラマン二人は扉の下敷きになり、光の攻撃の巻添マキソいを喰らった。

ウルトラマンA「ぐはあっ・・・！！」

ウルトラマンB「な、なんだと・・・！？？」

砂煙の舞う中、恐る恐る振り返り煙を通して移る影を見た。倒れているウルトラマンたちには目もくれず、光はただフラフラと不安定に前に歩き出し、部屋から逃げ出す。

ウルトラマンA「このことをゾフィー隊長に教えなければ・・・っ！！」

扉の瓦礫の下敷きになっているが、このことを何としても上に伝えなければと動かない体に無理やり鞭を打ち、必死にゾフィーにウルトラサインを出す。幾度か意識がなくなりそうになるが、耐えついに書き終えゾフィーにへと送り、そのウルトラマンは意識を手放した……。

幾年の終わりごろ 月詠みの日

迷子の少女 深き森へと歩き 色とりどりの花たちを見て  
愛を知ってしまった

恋に落ち 戸惑う中、白き子狐が歌声を 上げる サイレーン  
のように美しく

「 穢れあり誓いの結びに気をつけて 黒き鴉に目を光ら  
せて 」

白き子狐は忠告した だが、愛おしかった記憶でさえも  
剥がれ落ち 失くし

やがて彼女は 誰にも愛されず、愛してはならない  
十字架を背負う

だって 彼女の愛は簡単に朽ち、全部 喰らってしまうのだ  
から……

後に 悲恋の 悲運の子 とも後付けられ、ひっそりと呼ばれ  
るようになった

愁嘆の中 嘘の笑顔ふりまくピエロは そっと少女に咳  
いた

「 穢れあり契りを結べ 真の姿を知りたければ 」

少女は目が眩み、黒き翼に手を出し 白き翼を代わりに？がれ  
二度と戻れぬ墮天使となつて

地を彷徨い…… 恋い焦がれる人の声を求めて ただ歩  
き出す

罪の楔くわくを足枷くわにし 黄昏少女は今日も迷い続ける

後悔も虚しく 再び鳴る鐘の音はそのまま

また貴方に会う

その日まで・・・

囚われの少女（後書き）

くあゝ・・・！眠い・・・！！ ウルトランマンAとBって・・・なんか  
悲しいー！！

修正はちよくちよくとしますよ？

では！

恐れ

リリー「ん・・ここは・・？」

グレン「おっ！やっと目を覚ましやがったな」

グレンは「目覚めたぞぉ〜」と後ろで控えていたゼロたちに告げ、急いでゼロ、ミラーナイト、ジャンボットはその場に駆けつけた。

ジャンボット「よかった・・！急に倒れたからビックリしたぞ、リリー」

ゼロ「気分悪くないか？」

リリー「いえ、大丈夫です・・。それより・・。」

リリーはゼロたちに頭を下げ、さっきのことを謝罪した。

リリー「すみません・・みなさんも姫様を大切に思ってください  
っているのに勝手なことを・・。」

自分の非礼を詫び続けるリリー。ミラーナイトはそっと優しくリリーに声を掛ける。

ミラーナイト「いいんですよ……。結局私たちには助けることができなかったのは事実ですし……」

……。

シーン……と辺りは沈黙する。重々しくゼロは口を開く。いつものハリがあり、自信満々の声はそこにはなかった。

ゼロ「俺は……何もできなかった……」

ジャンボット「何を言ってるんだ、ゼ……」

ゼロ「何もできなかったんだ!」

つい、八つ当たりしてしまう言い方をしてしまうゼロ。ウルトラの星を守り、みんなでベリアルと戦い、勝ってきた。けど、今回は

違う。比べものにはならない敵だ。何も守れていない自分がプライドが高いゼロにとっては腹が立ち、悔しかった。重たい空気の中、あることをゼロは持ち出た。

ゼロ「俺・・・あの時のダークの言葉が頭から離れてくれねえんだ・・・！」

グレン「あの時って・・・」

最後にダークが残した言葉・・・怒りと憎悪に満ちたあの声・・・。

ダーク「私を生んだのは貴様ら他の生き物だということになあッ・・・！」

ゼロ「確かにあいつを俺たち違う生物が生んでしまった・・・。それが怖いと知っている自分がある・・・光の姿がダークの姿に重くなって、恐ろしいんだ・・・！！」

俺たちの心にもあんな感情があると思うとそれが怖くて堪らなくなる・・・。

俺たちが生んでしまったものなのに、それを無責任のようによつてやつつけてしまっていていいんだろうか……？

ゼロは初めてこれが恐怖というものなのかと肌身で実感する。

ジャンボット「ゼロ……。お前……」

声を掛けようとするが、どうやって声を掛けてやればいいかジャンボットには分からなかった。それは、そう思ってしまったている自分たちが確かにいるからだ。ウルトラマンも所詮は生き物……。人を恨んだり、憎んだり、妬んだりする感情は完全には抑えられない。悔しいがダークの言うことにも一理あった。

ミラーナイト「……………」

グレンファイヤー「……………」

人々の間違った願いのせいで、造られてしまったダーク。ベリアルを遥かに上回る絶対的な闇の力……。傍に一番いたから感じられたでもある氷のように冷たい別の感情……。自分たちだけで本当に

解決できるのかという疑問が浮かび、自信が一気になくなってしまった。ゼロはリーダーとして必ずジャンボットたちを死なせてはならない。それが、リーダーの責任。そして、プレッシャーの圧力の上に恐怖の感情が徐々に芽生え始め、光とゼロたちの絆が徐々に崩れ始めているのは一目瞭然だった。丁度ゼロが言え終えた時、廊下から何かが割れるような音がした。

グレンファイヤー「誰だ!？」

廊下に出て、相手を威圧するかのようにグレンは大声で言ったものの、誰もそこにはいなかった。代わりに有ったのは、光の国で作られた硝子の花瓶ガラスが見事に中に割れていて、入っていた水もぶち撒いていた。

グレンファイヤー「あれ・・・?誰もいねえ・・・」

ミラーナイト「どうやらこれが落ちた音だったみたいですね」

ジャンボット「まったく、ひやひやさせる・・・でも、どうして落ちたんだ・・・?」

疑問は多少残ったが、今はそんなこと話している場合ではなかった。リリーは静かに吐いて、ゼロたちをもう一度見直す。

リリー「私も正直言って、怖いです・・・。でも、恐怖って悪

「いことだけじゃないと思うんです！」

こんなの昔、姫様を守れなく一人ぼっちで宇宙を漂流していた一億年の時より比べればどうってことなかった。いつの間にかにゼロたちもリリーの言葉に耳を傾けていた。

リリー「恐怖があるから人は・・・生き物は強くなるうとする。守りたいものがあるから頑張れる！」

リリーは自分の心にも投げかけるように言い、ついに勇気を出した。

リリー「ゼロ・・・みんな、確かに今の姫様は危険かもしれませんが・・・。だけど、それでも私のたった一人の主で姫様なんです！姫は私に心を・・・！家族の大切さを教えてくれました。だから、どうか姫様を信じてください！！何でもやれることならやります、私はどうなっても構いません！例えもう、昔のように普通には暮らせなくなっても私は・・・約束しましたから・・・。」

あなたを必ず守り抜くと・・・。

ゼロ「リリーッ・・・！」

リリーの真剣な思いにゼロたちは心を打たれた。そうすると自分は今まで何を迷っていたんだらうとアホらしく思えた。

ゼロ「そうだったな……。俺たちがいなくなったら誰がアイツの傍にいてやれるんだ……。こうなったら、オヤジをぶっ飛ばしてでも、光を助けに行くぞ！！お前ら！！」

グレンファイヤー「よっしゃ！とことん暴れてやるっぜ」

ミラーナイト「はい！」

ジャンボット「ああ！！」

リリー「私も・・・ッ！」

ミラーナイト「リリー！？」

立ち上がるうとした瞬間、脇腹辺りに鋭い痛みが走り傷を抑え蹲るリリー。ミラーナイトは慌てて駆け寄り、ベットへとリリーの体を元に戻した。

ミラーナイト「まだ駄目だ。体を動かしては・・・」

リリー「で、でも・・・！」

ゼロ「もう大丈夫だ、リリー。俺たちを誰だと思ってる？ウル  
テイメイトフォースゼロだぜ？」

グレンファイヤー「そうだそうだ、リリーは心配し過ぎなんだ  
よー！」

ウルテイメイトフォースゼロたちは格好良くを決め、リリーの不  
安を消そうとした。だが、リリーはその思いだけで十分に安心した。

リリー「ありがとうございます・・・ゼロ、グレン、ミラーナイ  
ト、ジャンボット。姫様をよろしく願います！」

ゼロ「おう、任せとけ！」

いつものゼロらしく自由奔放な感じで返事をする。すると突然何  
時にもなく焦って様子で入り口からタロウが息切れを起こしなが  
ら入ってきた。

タロウ「ゼロツ・・・！大変だ！！！」

ゼロ」ど、どつしたんだよ？急に・・・」

タロウ「・・・が・・・！」

グレンファイヤー「あ？」

聞こえないと言っばかりに耳をタロウの元に近づけるグレンファイヤー。タロウは息を整え、落ち着いてゼロたちにこう告げた。

タロウ「光君が逃走した・・・！」

ミラーナイト「え・・・？」

一瞬タロウが何を言ってるのか分からなかった。だが、ジャンボットはすぐにタロウの話に喰いつく。

ジャンボット「そ、そんなバカな！？あんな嚴重なラインをそう簡単に突破できるはずがない！！」

最下層で見張りのウルトラマンの数も半端ではないはずだし、第一あそこにいるのはかなりの手練れとエリート戦士とも言われているほど強い者ばかりだ。ただの地球人である光にはそんな力など持つてるとは考えられない。それは、例えば天馬の鍵を身につけていてもだった。だが、タロウの表情は変わらず事態の深刻さを語るかの

ように難しい顔をしていた。

タロウ「全滅した・・・」

ジャンボット「・・・！」

ミラーナイト「光さんは!？」

タロウ「それが話を聞くと突然、人が変わったように暴れ狂っていたらしい・・・」

リリー「そ、そんなつ・・・!!・・・姫様・・・」

グレンファイヤー「ま、マジかよ・・・!!」

さすがのグレンファイヤーも冷や汗を顔に垂らしている。いつもの余裕の表情はすっかりと消えていた。まったくもってウルトラマンたちにも訳が分からなかった。

ゼロ「光・・・！」

ミラーナイト「取り合えず、我々も光さんを一緒に探しましょ  
う！」

タロウ「そうだな・・だが我々にも光君の足取りは全く掴めて  
いない。どうやって探し出すつもりだ？」

考える途中、とあることをゼロは思い出す。地面に落ちた硝子の  
花瓶。すつと頭の中に浮かび上がって、まさかと思つて現場に行つ  
てみると、やはりさつきは全然見向きもしなかつたので気づかなか  
つたが、薄らと光る一本のこげ茶色の髪の毛を見つけた。

ミラーナイト「これ・・！」

ゼロ「間違いない。光のだ・・！」

( ) 一体どこに行ったんだ！光・・！！( )

ゼロたちはただ光の安否を心配するしかなかった・・。

恐れ（後書き）

よく主人公って勝てない敵がいると自信なくす時があるよねって話  
みたいなのを書いてみた^^

## 闇に呑まれるその光

時は少し遡り、光は最下層を彷徨っている時のこと・・・。

光「うう・・・」

小刻みに痛む頭を抱えながら、壁に体重をのけなんとか朦朧もろろとする意識の中歩き続ける光。出口らしきものを探すが一向に見つからない。

光「みんな・・・どこ・・・？」

ダーク『お前はゼロに・・・いや、みんなに見捨てられたのさ』

ダークの言葉が蘇る。光は慌てて首を横に振り、かき消した。

光「ないない・・・！あんな馬鹿でお人好しの奴が私を見捨てる訳ないよね・・・」

（（そう・・・だよな？）（）

ダークの吐いた言葉に不安を抱きながらも、足を前に動かし続け

る光。ふっと突然目の前が暗くなり顔を上げてみるとそこにはなんとベリアルがいた。

光「なんでアンタがここに・・・！」

ベリアル「場所が分かってても、鍵がなきゃ話にならないから・・・お前を取りに来た」

光は体を硬直させ、ベリアルに隙を与えまいとじっと睨みつける。ベリアルは余裕の顔で光にある話を話し始めた。

ベリアル「その目・・・あの女にそっくりだなあ・・・」

光「はあ・・・？誰のこと・・・？」

ベリアル「ああ・・・知らないんだったな。良いだろう、教えてやる」

ニッコリと悪魔のような笑顔を浮かべ、ベリアルはこう言った。

ベリアル「お前の母と父を殺したのは、この俺様だ」

光「え・・・？」

雷が落ちたように衝撃が光に走る。歪な笑い声を上げ、ベリアル

は面白そうに語った。

ベリアル「俺様はあの事故の前、お前の親に会っていたのさ。お前を渡せば命だけは助けてやるって言ったのに嫌だとこの俺を拒みやがって……。だから、ちよつとした細工を飛行機にして殺してやった。まったく馬鹿な親だなあ！お前をさつさと差し出せば死なずに済んだのにも！！」

何が可笑しいのかわからないが、ベリアルは狂ったように笑い残酷な笑みを刻む。光はただ呆然とするしかなかった。ずつと事故だと思っていたあれは嘘でベリアルの仕業だった……。？じゃあ私のこの十年間の思いはなんだつたの……？

ベリアル「どうだ？真相を知った気分は？だが、何故あいつらはお前など守ったんだろうな……？」

ユルサナイ……

ベリアル「赤の他人のお前など守る意味なんか何にもないのになー！！」

ユルサナイ……ッ！

ベリアル「本当に馬鹿で愚かな奴らだ！」



ナイス「おっと！動くなッ！俺たち意外と強いぜ・・・？」

光「じゃま・・・するな・・・」

ナイス「ああ？」

光「私の・・・邪魔をするなああああ！！！！！！」

ネオス・マックス・ナイス「うわあああ！！！！！！」

殺してやるッ・・・！殺してやる！ベリアル！！

光「ぐおおおおおおおツツ！！！！！！」

もはや、野獣の咆哮みたいに醜い声を上げ鳴き叫ぶ。黒い瘴気を辺りにまき散らし、親の仇のベリアルの姿を探す。目の前に倒れているネオスたちなどもう光の眼中には入ってはなかった。

何処ダ！奴八何処ニ行ツタ！！

殺シテヤル！

私ノ人生ヲ壊シタ アノ愚力者ニ裁キヲ！！

憎しみに全てを支配され、破壊行為を止めない光に誰もがもう止められないと思った時、光の異常なほどまでよく聞こえる耳にある者の声が入ってきた。

『気分悪くないか？』

( (ぜ、ろ・・・?) )

その刹那、さっきまで破壊へと使われていた光の手が不意に止んだ。声の主を求め、光は上と足を運んだ。

( (何処ダ・・・？何処ニ居ル、ゼロ・・・) )

ゼロの声がする階に着き、姿を求め背骨を老婆のように丸め髪はだらしなく垂れ、隙間から暗い瞳が漏れる感じになっていた。息を乱しながらもよくやく一つ明かりが付いている部屋を見つけた。

光「皆・・・」

ゼロたちに会ったら最初に何を言おう？

まず、文句を言ってそんで一人ずつに回し蹴りでも喰らわせてやる

それからまたいつもみたいに私があいつらを馬鹿にして・・・

そういられると信じたかった・・・ だが、

ゼロ「俺は・・・何もできなかった・・・」

何故だろう？私はその場には居てはいけない気がして、思わず壁際の影にと隠れてしまった。ゼロたちは何やらとても大切な会話をしているらしい。聞いてはいけないとどこかで警報が鳴っているが、ちよつとした好奇心に負け、私はついつい怒りを沈め盗み聞きをしてしまった。だが、それが全ての間違いだった。

ゼロ「確かにあいつを俺たち違う生物が生んでしまった・・・。それが怖いと思っっている自分がある・・・。光の姿がダークの姿に重なって、恐ろしいんだ・・・!!」

( 怖い・・・？わ、私が・・・怖い？ )

裏切られた・・・まさに絶望の淵に落とされた瞬間だった。ゼロなら、あいつらならありのままの私を受け止めてくれる思っていた。けど、それは単なる思い違いだった。光は体を小刻みに震わせ、口

を静かに抑える。その震える唇から小さな嗚咽が漏れそうになって。  
。一歩一歩下がってゆく内に、綺麗な硝子で出来た花瓶が乗っ  
ている白いテーブルにぶつかる。そこで、口を抑えていた両手を片手  
にし、右手はテーブルの上にとゆっくりと置かれる。

光「うつ．．！い、痛い．．！！」

目の前の景色がぐにやりと歪み、視界が掠れる。何かを知らせる  
ように今までにないほどの頭痛が光を襲う。そして、光の頭の中に  
物凄い量の前世の記憶が一気に流れ込んできた。

『知ってる？リリー？あなたはこの石像の』

『うふふふ、頑張ってくださいね』

『今日の特訓はどうだったかね、うまくいったか？』

『天馬族万歳！万歳！！』

誰が誰で誰が誰なのか光は手に取るように分かった。ずっと知り  
たかったあの子の名前も何もかも。楽しかったあの日々、時間、か  
けがえのなかった家族、笑顔で溢れた民たちの顔．．。そして、炎  
に燃え盛れたあの日の夜の出来事。

『なんで．．？なんでこんなことを．．ツ！お兄様．．．』

止まっていた時が動き出したように次々と溢れ出た。思い出してしまった、ずっと心の中に閉まってきた一億年間の記憶が。

光「ふふ・・・あは、あはははは！！！！！」

狂ったように笑い声を上げ、静かに瞳を細める。手を顔に当て、歪んだ表情がさらに歪む。綺麗だった涙は黒く染まり、憎悪を表わすかのようにとんとんと瞳から溢れてゆく。瘴気はますます濃くなっ  
ていく一方だった。

馬鹿だな・・・私      いつの間にかゼロたちなら信じてもいい  
んじゃないかと

思っていた自分がいた・・・

それだけじゃない

忘れてはならない      あの夜のことも・・・

あの血に染まったカンタルダ国の最後を      憎きアイツの顔も

ティアラの心に      ライトとダーク      二つの真逆な意志が生ま  
れたわけ

そして思い出した　私の存在理由・

それは・・・

涙腺が壊れたかのように目から黒い涙をどんと流し続け、額と眉には皺が寄り光は腹が千切れると思われんばかりに笑い狂気に飲み込まれていった。

（　殺りましょう、妬みましょう、傷つけましょう、狂いましょう）  
（　　）

あははは！あは、あはははは！！！！！

くすくす・・・

うふふふふ・・・

知らない幼い子のくすくすと唄うような嫌な声が脳内に響く。悲しみの色で彩られた自分の心はもうどうすることも出来なかった。相手を憎み、疎み、嫌い、蔑むことしか考えられない残念なもう一人の自分がいる。解放された絶望は止められはしない。心の隅に置いていた憎しみの炎がまた火を灯し始めた。光は眼から黒い涙を垂れ流し笑い声を止ませ、ただあることを考える。

壊してしまおう 何もかもこの世界もあの世界も何もかも砕  
け散るまで

あんな嘘のように楽しかった時間は 二度と戻ってはこないのだ  
なら存在するものを 無 にしてしまおう 生きとし生きる  
ものはみな消えればいい

だって、そうすれば この痛く辛い気持ちも無くなるはず

そう、全てを失くせばきっと もう誰も亡くならなくて済む  
はずだから・・・

破壊衝動に身を任せ、光は闇に意識を葬った。白い机に置いてあ  
る花瓶が合図を教えるかのように落ちて、割れた音が枯れた空気に  
響き渡る。

グレン「誰だ!？」

グレンは人の気配を感じ、割れた硝子の花瓶のところへいち早く  
来たがもうそこには光の姿はなかった……。

エメラナ姫「んー・・・ッ!」

（私くしとしたことが・・・寝坊をしてしまいましたわ・・・）

手を空に思いっきり伸ばし、左手を口に当て欠伸をするエメラナ姫。どうやら、起きたばかりらしくいつもは長く美しいロングヘアにぐるりと小さなお団子が二つくっ付いているがまだセットをしていないらしく髪も乱れている。姫と言う言葉には少し似合わない格好だった。ふんわりと白く輝くドレスは光の反射で一層美しく見える。そんなエメラナ姫が窓を眺めていると、建物の隙間から光が歩いているのが目に入った。

エメラナ姫（あっ！光だわ!）

声を掛けに行こうとしたその時、エメラナ姫は光の様子がいつもと違うことに気が付いた。周りには風が絡みつくように僅かに光を中心に円を書くように吹いていた。エメラナ姫はよく分からないがそれはとてもよくないもののような気がした。光はフラフラと不安定ながらも次の建物隙間へと姿を隠す。残念ながらもエメラナ姫の見ている窓からではもう光の姿を追えなかった。

エメラナ姫「光・・？」

闇に呑まれるその光（後書き）

次は少し短めかもしねません。

## 壊れた心

『ゼロ……』

ゼロ「！」

ゼロは辺りを見るがグレンファイヤーたちやタロウの姿しかなかった。気のせいか？と思つて頭を傾げるが次の言葉ではつきりとした。

『ゼロツ……！』

ゼロ「その声……ライトか！？」

ミラーナイト「え？」

突然ゼロから出てきたライトの名にミラーナイトたちも思わず振り返る。ゼロの頭で聞く声はとても苦しそうな感じだった。

ライト『光が記憶を取り戻しました……！』

ゼロ「……！」

ライト『記憶を取り戻したことで光の意識が天馬の鍵を暴走させてしまっています……ツ！このままでは光の体は力に耐えきれず

精神と共に死んでしまいます!!」

ライトはゼロに大体の経緯いきさつを話し、ゼロはその場にいる者にそれを教えた。

ミラーナイト「なんてことを・・・ッ！」

ジャンボット「たったそれだけの為に光の両親を殺したっていうのか・・・!あいつは!!」

グレンファイヤー「相変わらず卑劣な野郎だ・・・!!」

ゼロ「許せねえぜ・・・!カイザー・ベリアルッ・・・!!」

ライト『急いでくださいゼロ・・・。私ではもう・・・!止められません・・・ッ!!思った以上に精神の崩壊が早い・・・!!』

ゼロ「待ってくれ!光は今どこにいるんだ!？」

ライト『白いドレス・・・スを着た・・・ひ・・・め・・・その子が答えを知っています・・・』

ゼロ「白いドレスをつて・・・！何のことだ！！」

『後は・・・任せましたよ・・・ッ！ゼロ・・・』

ゼロ「ライト！どうした？！しっかりしろ！！おい！」

(ぐんぐんいうことだ？)( )

もうその声の返事は二度と返ってほこなかった。ゼロは謎の言葉に頭を悩ませたがある単語で閃いた。

ゼロ「姫・・・?!!!・・・そういうことか・・・ッ！」

グレンファイヤー「お、ちよっ！待てよ！！ゼロオー！！！」

勝手に閃いた様子でその場から飛び出すゼロ。慌ててグレンファイヤーはその後を追いかける。

タロウ「私はこのことを兄さんたちに伝えてくる！」

ジャンボット「了解した!!」

タロウもこのことを急いで他の兄弟とウルトラマンたちに伝えなければ飛び立つ。最悪、光の国に住むウルトラマンたちを非難させなければとタロウは考えていた。

.....

ゼロ「エメラナ！」

神殿にいるエメラナ姫に声を掛けるゼロ。エメラナ姫もゼロたちに気づきドレスの裾を上品に持ち上げ階段を降り、駆け寄る。

エメラナ姫「あっ・・・！ゼロ、丁度よかったさつき光が・・・」

グレンファイヤー「何ーッ！！光だって!？」

ジャンボット「姫様それはどこで見たんですか！」

ジャンボットたちの異常なほどの慌てぶりにエメラナ姫は少々ビツクリはしたが指を差しゼロたちに教えた。

ゼロ「あの方向は・・・上へ逃げたのか？」

ミラーナイト「ありがとうございます、姫様」

エメラナ姫「あ・・・光に何かあったんですか？」

先ほどのジャンボットたちの様子といい間違いなく何かがあったんだとエメラナ姫は察した。エメラナ姫も光を一人と友として心配なのだ。ゼロたちもそこはちゃんと分かっていてエメラナ姫を心配させないように優しく言う。

ミラーナイト「何でもありませんよ。光さんがいつものようにゼロと喧嘩をしまして・・・」

ゼロ「おい！俺は喧嘩なんか・・・うぐっ！・・・!!?」

黙っているとゼロの口を塞ぎ小さくアイコンタクトを取るジャンボット。ゼロは何か言いたげな様子だったが静かに黙っておくことにした。グレンファイヤーはエメラナ姫をいつもの笑顔とおちゃら

けたキャラで誤魔化する。

グレンファイヤー「そうそう。エメラナは余計な心配しなくていいんだぜ」

エメラナ姫「そ、そうですか・・・」

エメラナ姫は頷くしかなかった。急ぐかのようにゼロたちはエメラナ姫と別れた。ただ黙ってエメラナ姫はその後ろ姿を見た。

.....

長い階段を抜けようやくたどり着いたところは何もなくなただ体を撫ぜる風と無限に広がる空だけだった。

グレンファイヤー「ホントにこんなところ居んのかよ・・・？」

ジャンボット「おい、あれ！もしかして光じゃないか！？」

ジャンボットが指差す先には光の国を見渡すかのようにギリギリのところまで建物に踏みとどまってる光の姿があった。もし地面から何百メートルもあるここから何の力も持たない人間が飛び降りたら間違いなくその人間は死ぬだろう。だが、光は恐怖もせず刹那に世界を見る。

ゼロ「こんなところで何やってんだ！光！」

ジャンボット「みんなお前のことを探しているぞー！」

ジャンボットは心配そうに光に言うが肝心な光からは何の応答もなかった。それどころかピクリとも体を動かさずともしなかった。

ミラーナイト「光さん・・・？」

いぶしげな表情をしながらゆっくりと光の元へ近づくとミラーナイト。その直後今まで沈黙を守っていた光の口が開き、足をふっと止

める。

「ようやく来たか・・・」

何の心もその言葉には詰まっていなかった。まるでロボットのように感情が無くなっている。

「だが・・・もう遅い」

淡々と光は話し続ける。

「この世界も宇宙ももうじき消える・・・」

グレンファイヤー「はぁ・・・？」

意味が分からんと頭に？マークを浮かべるグレンファイヤー。ちまちますることが嫌いなグレンファイヤーはもう我慢しきれんと言わんばかりに口調を荒くする。

グレンファイヤー「一体何が言いてえんだ！」

「まあ、貴様たちにも時期に分かる・・・」

天に右手を差し出し、ブツブツと小さな声で何やら呟く。青紫の石の中で白色と黒色に交互に光る。反応を示すかの如く天馬の鍵に高密度なエネルギーが発生し右手へと集まり球体状になる。光は何のためらいもなくそれを光の国の近くにある森へと投げ入れる。その球体は力を表わすように凄まじい音を立て森を破壊した。

「うふ あは、あはははは！！！！！！」

ゼロ「やめろ！光！！」

不気味な光の笑い声が空に響く。ゼロの声でも決して攻撃をやめようとは光の瞳は語っていないかった。そして光は両手で両方の腕を握りしめ震える体を無理やり抑える。

光「怖い・・・怖いのよゼロ。私は・・・今の今まで生き物の命は心は余りにも果かなく崩れやすいものだとは知っていたからわざと遠ざけ近寄らないようにしてきた・・・。けど、お前たちと出会ったせいでそれは変わった！私は愛も家族も友も・・・思い出さなくなかったのに・・・ッ！なんで！なんで思い出させたのよ！！ゼロ！！！！」

ゼロ「お前、何言ってる……」

光「でも、これでもう怖くない。だって、みんな死ぬんですもの！」

今までにない強烈な殺意がその場に張り詰める。光はくすくすと悪戯をする子供のように可笑しそうに笑う。

ゼロ「話を聞いてくれ！光！！」

ジャンボット「どうやら……大人しく話を聞いてくれないようだな」

グレンファイヤー「ゼロ！ボツさとすんな！！行くぞ！」

ゼロ「くっ……！」

( ) 戦うしかないっていつのか……！ ( )

「さあ、この命燃え尽きるまで戦おう・・・」

静かに光との勝負の幕は開けた。

壊れた心（後書き）

わあゝ・・・なんかめっちゃシリアス入ってる・・・（汗）

大丈夫ですかね？これ

後、読者のみなさんに少し早いメリークリスマス！！  
サンタさん来るといいですね！

暴走の果てに・・・

薄黒い膜がいつの間にかにゼロたちを閉じ込め逃げられないようにバリアを張る。これで外の関わりが一切できなくなった。でも、はなから逃げるつもりないゼロたちには余り関係のないことで気にも留めなかった。

「絶望なる闇に告げる・・・。血にまみれ、欲望に穢された漆黒の翼たちは混沌を生み、ただ恐怖と叫びを求める・・・。わが身を滅ぼすほどの貪欲なる果実は、黒く垂れ落ち、雷のごとくすべての生き物たちを灰にへと消え失せるだろう・・・」

青空が暗雲によって光が隠され、影と暗闇の世界へと変わっていった。他のウルトラマンたちも異変に気付いたのか騒ぎ出す。ゴロゴロと不吉な音を立て光の国へと黒い雷が落ちた。建物が崩れ落ちて火があつという間に回っていき悲鳴と叫び声で下は埋め尽くされていった。それでも構わず光は呪文をいうかのように手を大きく広げ光の国を舐めるように見て呟く。ゼロは阻止しようと光へと突撃する。

ゼロ「やめろお!!」

勢いよく飛び出すが目の前と突然青い火の粉のようなものがちらつく。条件反射で身を捻じりなんとか攻撃を回避する。

ゼロ「なんだ！？今は・・・！」

「誰も信じるな。孤独を抱きし、青き炎よ・・・。怒りと悲しみを力に変え、煉獄の炎で全てを焼き尽くせ」

次の言葉を言った瞬間、火は自分の役割を知ったかのように形を作り始めた。その姿を見てゼロたちはぎよつとする。青い火は巨大な大蛇の形になり舌をちよろちよろと見せびらかし、口を開ければ凶悪で鋭そうな炎の牙がはつきりと見える。本当に生きているかのようにぐねぐねと体を揺らし目標を捕え獲物を狩る時みたいに冷徹な眼でゼロたちを見下ろす。

ジャンボット「なっ・・・！」

グレンファイヤー「なんじゃこりやあー！？」

一瞬の隙も与えまいと青き炎の巨大な大蛇は喉から醜い掠れた声を出しながら襲いかかってきた。その場から空中に退き攻撃をかわすウルティメイトフォースゼロ。

ミラーナイト「くっ・・・！シルバークロス！！」

両手をクロスし手から鏡のように輝く手裏剣が飛び出す。大蛇の凶体を容赦なく切りつけるが大蛇の体はトカゲの再生みたいに速く傷口は消えていく。傷が治ると大蛇は何事もなかったかのように動きだし、またゼロたちに襲いかかる。

ミラーナイト「なんだと・・・ッ!？」

ミラーナイトはその再生力は予想していなかったのか驚いて体を固める。大蛇はその隙を見逃しはしなかった。グレンファイヤーを攻撃していた頭は猛スピードでぐにやりと体を通り抜け、ミラーナイトに牙を剥く。

ジャンボット「ミラーナイト！逃げろ！！」

ミラーナイト（しまった・・・!）

だが、既に時は遅くミラーナイトの右腕に炎の牙が切りつける。

ミラーナイト「うわあああああ！！」

ゼロ「ミラーナイトッ!？」

ミラーナイトは力を失ったように地面へと叩き落される。

グレンファイヤー「畜生・ッ!この野郎ッ!ファイヤーフラッシュュ!!!」

ジャンボット「ジャンナツクル!」

大蛇は勝利の咆哮のように掠れる声で吠え、グレンファイヤーの熱い炎のエネルギーのパンチとジャンボットの左腕に搭載されているロケットパンチのW攻撃を物ともせず鳴き続けた。ゼロは怒りに震え拳を握りしめる。

ゼロ「うおおお!!!」

今すぐ光の元に行こうとするが大蛇は主人の元へとは行かせまいと巨大な凶体を動かし暴れまわり行く手を塞ぐ。

ゼロ「くそお・・・!!」

悔しそつに顔を歪め、光の国を眺める光を大蛇の隙間から見つめる。

「荒ぶる魂は、運命を狂わせ死にへと追いやり、神と光をこの世から抹殺する」

雲行きはどんどんと怪しくなり嵐の海ごとく荒れていった。

「さあ、憎め！さあ、殺せ！！我を生み出した哀れな下等生物共よ……。闇に吞まれ、眠り続けるがいい」

その姿は魔女のように綺麗で恐ろしく魔力なようなもので満ちていた。手で顔を覆い恐怖に怯えているが顔は狂い目を大きく開け笑っていた。

「暗黒なる鐘と破滅の歌は揃い、復讐の時は来た……。っ！完全なる未来よ……。今こそ滅びるがいい！！」

エメラナ姫「もうやめて！」

「……！」

僅かに震えているが力強い少女の声が響いた。光は今まで一つも動かさなかった体をようやく動かせ後ろを振り返る。そこには白いドレスを着こなしたエメラナ姫の姿があった。

ミラーナイト「姫……ッ!？」

ジャンボット「しまった！いつの間に・・・！！」

慌ててジャンボットは大蛇から距離を取り、エメラナ姫に訴えかけた。

ジャンボット「姫様！！急いでその場から避難してください！」

ジャンボットの必死の訴えも虚しくエメラナ姫はそこから退こうとはしない。

エメラナ姫「この国を・・・！光の国を滅ぼして何の意味があるというのですか！？」

二人の姿はまるで光と闇をはっきりと表すかのように境界線が張り巡らされていた。

エメラナ姫「光の国を滅ぼしたつてもう、貴方の国は戻っては来ないのですよ！」

「！」

エメラナ姫「この前ミラーナイトから話は聞いておりました・  
。でも、こんなことをしたって誰も・。死んだ人も戻っては来ない  
んですよ!」

今まで無表情だった光の顔がようやく少し驚きの表情へと変わる。  
エメラナ姫は悲しみの瞳を揺らがせ光を見つめる。

エメラナ姫「貴方天馬ヘガサスさんですよ。昔、封印されたっていう・  
。なら、自分の国を失う辛さは知っていますでしょう・。!? こん  
なの・。こんなの間違ってますよ!」

「そうだ・。私は天馬ヘガサスだ・。今は天馬の鍵を通してこの場に  
いる」

ようやく正体を明かした天馬。エメラナ姫はそれでも困惑の表情  
を変えようとはしなかった。

「小娘・。よく私が天馬ヘガサスだと分かったな」

エメラナ姫「どうしてなんですか・。? 人の痛みも悲しみも、  
もう知っているはずの貴方が・。どうしてこんなことを・。!」

「それはこの娘・。私の唯一の子孫が望んだことだからだ」

ゆつくりと天馬は光の胸の真ん中あたりを指す。天馬もまたエメラナ姫のように光の体を哀れんだように見て悲しんでいた。

エメラナ姫「光が・・・？」

「そうだ・・・」

遠い時でも過ごしてきたかのようにその声は落ち着いていて目を細めエメラナ姫を見据える。そして長い物語を話すかのように語り始めた。

「人は心を持っている・・・。だから人は喜び、人の繁栄を願う・  
・だが、人の言葉で傷つき癒えぬ傷を負い、その生涯を呪い憎む奴  
もいる。人のいう心とは面倒だ・・・」

疲れ切った顔で可哀そうな動物を見るかのような瞳で胸をそっと撫でる。

「この娘は知ってしまったのだ。自分が何者で何の目的のために生み出されたかを・・・」

エメラナ姫「生み出された？」

「それは遠い昔の話・・・天馬の鍵は最初は一つの意志だけだった」

子守唄を唄うかのように物語を語り始めた。天馬はそこで小さなおとぎ話をする。

「鍵はずっと一人だった・・・。だけど、たくさんの人々の血を浴び続けそこにもう一つの小さな小さな意志が生まれた。その者が生まれやがて光と闇と呼ばれるようになり、人々はその力を求め、恐れた・・・鍵は嘆いた。自分が穢されていくことを、そして、使われなくなっていくことを・・・そんな哀れな二人を見るに見かねて神は一つの赤子の肉体を差し出した。神は二人が幸せになっしてくれることを願い、もう二度と人を殺めることのないように禁じた・・・。だが、闇はそれを恐れた。殺しは自分の存在理由だと思っていただけ・・・。闇は光を乗っ取ることで自分だけが世界に生まれようとした。だけど、逆に光に封印され、眠るしかなかった。光は体に入ろうとしたが自分が入れば闇がいずれ封印を自力で解き、この世界を壊すことを知ってしまった。だから光は考えある答えを見つけた。それは・・・。」

光と闇を中和させ、新たなる存在を造ることだった・・・

エメラナ姫「もしかして・・・!」

「そう・・・」

エメラナ姫は手をそつと口へ持って行き抑える。綺麗な白い肌は薄らと青ざめている。天馬は物語のクライマックスを語る風に静かにその場に告げた。

「中和された存在、それが光の名を持つ闇・・・あの娘の存在意義だ」

エメラナ姫「そんな・・・」

ライトとダークこの二つの存在から光は生まれたことを知るエメラナ姫。だけど、この先がとても残酷なことだった。

「地球で育ち、大切だったあの世界で唯一信じていた両親もこの世界で出会って自分を認めてくれた仲間も全て偽物・・・幻想だったことを彼女は知り、心を闇へと葬り堅い扉に鎖を巻いて心を閉ざしてしまった・・・」

エメラナ姫「偽物って・・・私たちは別にそんなこと気にしてなんか・・・」

「そんなの他人が言うことだ。お前の今の言い方はただの他人事にしかにすぎない」

エメラナ姫の無責任なその言葉が気に障ったのか声が少し低くなり唸るように言う。エメラナ姫もその怒りに気づいたのかゴクリと喉を鳴らす。

「お前たち他の生物はいつもそうだ。勝手にルールを決め自分たちが必ず正しいと秩序を振りまわす。弱者はそれについていけず大地に倒れ死ぬ」

ギロリと目を三角にして黒い瘴気がエメラナ姫の体に巻きつく。

「もし自分が他のものから造られていた物だったらどうする！それでも貴様はそんなふざけたことを言えるのか！！」

ミラーナイト「姫様！」

天馬は初めて声を荒上げた。いきり立つ天馬に答えるように黒い霧はエメラナ姫の首を締め上げる。エメラナ姫は恐怖に怯えたがこれではダメだと自分に言い聞かせ恐怖で震える唇をなんとか動かす。

エメラナ姫「もし、今の私の言葉で怒ったのならそれは謝ります！でも、これじゃ貴方も同じではありませんか！」

「！なん・・・だと・・・？」

ゆつくりとエメラナ姫の気管を締めていた黒い霧が解除されていた。ようやく解放されケホケホと苦しそうに咳き込むエメラナ姫。それでもエメラナ姫は話を止めようとはしなかった。

エメラナ姫「一時的の感情に任せ、人を傷つけてしまったは何も・貴方の言う、人間と変わらないじゃないですか!!」

「・・・!!」

崩れを落ちるようにその場に蹲すくまり不安定な様子でブツブツとまた  
呟く。

「ちがつう・・・!そんなつもりはなかった・・・!あんな殺し方死ぬと思っってなかった!嫌だ!!殺したい!やめる!!違ちがうッ・・・!違ちがうッ!!」

エメラナ姫は哀れむ瞳で天馬を見据えた。さっきまで動かなかった足が不思議と動く。静かに足音を立て闇に怯えている少女に近づく。

「来るな・・・!来るな・・・ッ!!」

小動物が威嚇するように少女はエメラナ姫に黒い瘴気で切りかか

った。足や腕、頬、ドレスまでもナイフが入るように小さく切り裂かれる。傷口から血が出てもエメラナ姫は気にも留めなかった。だって、光が受けた傷よりもこっちの方が何倍もマシだから……。

エメラナ姫「もう怖がらないでいいんですよ……？」

そう言い優しく光の体をギュツと抱きしめる。エメラナ姫の体が緑に輝き、黒い瘴気を鎮めるかのように包み込む。天馬は瞳から一筋の涙を流す。

「ありがとう……」

後ろで戦っているゼロたちの戦闘が激しかったのか下に罅<sup>ひび</sup>が入る。そして、そんな二人の仲を切り裂くかのように二人の繋いでいた手は右と左へと別れる。右に倒れ込むエメラナ姫はミラーナイトに助けられるが左に落ちた光の体は宙へと放り出された。意識がない光の体はただ何百メートルから下へと落ちる。力を失くしたように巨大な青い炎の大蛇は悲鳴を上げながら形を崩し、宙にへと姿を消す。

エメラナ姫「光！」

手を伸ばすが後少しのところでは届かない。

ミラーナイト「危ない！姫様！！」

手から飛び降りそうなエメラナ姫を慌てて止め、崩れ落ちる地面から負傷しているとは思えないほどの俊敏な動きで安全な地面の上にと移る。

ゼロ「光イイイ！！！」

光の体を追いかけて屋上から猟犬のように飛び降るゼロ。建物の破片と力を使い果たしたのか小さくなっている光の体を空中の上で捕まえるのは至難の業だ。後少し、後少しで手が届きそうだ。

ゼロ「届けえええええー！！！！！！」

ここでもし光を連れ戻すことができなかつたらリリーにどんな顔を向ければいいのか分からなかった。また一緒に喧嘩をしたい、もつと色んなことを教えてもらいたい、光の国の良いところもまだ全部伝えきれてない、まだまだ話すことはいっぱいあるじゃないか。ゼロの頭の中ではそんなことばかりが過る。

( ) ぜってえ、こんなところで死なせねえ！！ ( )

ついに光の体を掴みとるゼロ。だが、もうこの距離では地面に激突する。光を守るように腹部らへんに両手を入れ大事そうに持つ。痛みを覚悟し、目を瞑った。だが、風が勢いよくそよ風のように体に当たり背中に突如フサフサな感触がし覚悟した痛みも何時までもやってこなかった。ゆっくりと目を開けると銀色の狼が背中の上に乗せてくれていた。

リリー「間に合ったようですね」

ゼロ「リリーなのか・・・!？」

銀色の狼の背中をゆっくりと退きマジマジと姿を見るゼロ。まるで童話の中にも出てきそうなほどの綺麗な銀色の毛並だった。力を抜くように深呼吸をし、リリーは狼の姿から元の姿へと戻った。

リリー「私の能力についてまだ言ってませんでしたね・・・。私の能力は生きているものに変身できる能力・・・。もちろん、生命がないものには変身できませんけど」

ゼロ「・・・そうだッ!光は!？」

手の平の中にいるはずの光の姿を見る。だが、光は死んだ雛のようにピクリとも体を動かさない。

リリー「ゼロ・・ッ！」

ゼロ「急いでメディカルセンターに行くぞー！」

リリーは顔を真っ青にし、ゼロは光を運びながら急いでメディカルセンターへ向かった。

暴走の果てに・・・（後書き）

みなさん忙しいのでしょうか・・・？年賀状やらクリスマスやらで・・・

最近、また感想がこなくなってしまいました・・・><。

銀色の闇はとても寂しいのです

べ、別に泣いてなんかないんだからね！！ちょっと目にゴミが入っただけなんだからね！（泣）

追伸 もうそろそろ過去編に突入する予定です、みなさん楽しみにしてください^^

天の書物（前書き）

そろそろ今年も終わりますね。

ということでもウルトラマンゼロ、銀河を駆ける天馬、を簡単に設定をまとめてみました。まだ最初から読んでいないという方はネタバレと意味があまり分からないと思うので、最初から読むことをお勧めします。

全部見てるよー！！という方はどうぞー！！歓迎いたします

## 天の書物

オリキャラ ～紹介～

梅崎光 十五歳の女の子。職業は高校一年生（学生）。五歳の時、両親を失う。つい最近までそれは事故だと思っていたが、ベリアルの中から真実を知る。髪の色はこげ茶で肩にあたる位の長さで瞳の色は黒でその目は少し切り目。性格は荒っぽく極度な人嫌いで口調も男勝りで物凄く男前である。でも、内心はゼロたちを認めていてリリーを本当の家族のように思う少し不器用な心優しき少女。ゼロたちにはまだ隠しているがドジなころや抜けているところもある。ティアラという姫の生まれ変わりで、地球で育ちずっと生きていた。

リリー・ビースト 元天馬族・カンタルダ国の王家に仕えていた騎士。ティアラのことをとても大切に思っていて、自分に心といたものを教えてくれたと言い、本当の忠誠を誓っていた。だが、突如国を襲撃してきたベリアル軍に破れ、違う宇宙へと送られ一億年間彷徨うことになる。地球で光を見つけ今度こそは姫をお守りすると決意を固めリスの姿となり、光と共に地球で暮らしていた。上半身には薄黄色のラインと下半身には銀色に輝くシルバーが強調整されおり、どこか野生を連想させるちょっとワイルドな顔だが、にっこりと笑うと青少年のような無邪気さを感じられ可愛いと光の国の女のウルトラマンからの噂。昔と違い随分と性格は変わっており、誰にでも優しく人当たりがよい。まさに紳士。もしかしたらそれもモテている理由・・・？光の亡くなった両親の代わりで保護者的な存

在。光もリリーにだけは心を開いており安心している。能力は生命のあるものになら姿を変えられること。でも、逆に言えば生命のないものには姿を変えられない。

天馬の鍵 　　＼二つの意志＼

プリンセス・ライト　　純白の心を持つ姫と言われ、人々の平和を願いまさに光と言われに相応しい存在。得意なのは攻撃より防御。その力は他人を守ることによって真の力を発揮する。性格はしつかりしており、慈愛に満ち溢れている。変身している時の状態は髪は真っ白で海よりも深い青い瞳。ドレスは何一つ汚れもない白いドレス。ダークを自分の（人々の平和を脅かす）敵だと思っている。ティアラの半分の魂から生まれた。

プリンセス・ダーク　　漆黒の心を持つ姫と言われ、人々を狂わせ破壊を願う闇の存在。ライトとは鏡のように正反対な性格で残虐で人を決して信じることをしないナイフのように鋭い心の持ち主。それは性格だけではなく見た目も同じで変身状態は、真っ黒な髪に瞳は血のように赤く鮮血な色。ティアラの魂のもう片方を持ち、誰かを深く恨んでいる。その誰かはまだはっきりしてはいない・・・。

天馬の鍵　伝説上で恐れられている最強最悪の兵器。見た目はただの薄紫色の不思議な形を石だが、その中には強大なエネルギーとライトとダークが眠っていた。鍵という役割だけなのにここまで破壊力があると扉の中にある本体・クラウンクラウンには一体どれだけの破壊力があるのだろうか？扉を開けるには、扉を開ける許可証を持つ者と天馬の鍵を含め、三つの鍵が必要。その他の鍵がなんなのかはまだ分かっていない。

天馬　約一億千年前、カントルダ国に封印されたという伝説の生き物。とある事故で機械生命体の群れから逸れ、偶然近くにあった惑星カントルナにへと墜落する。天馬族の先祖であり、王家の家柄のものだったものは歌を語り継ぎ、昔起きた悲劇を忘れないようにしていた。

質問コーナー！！　実際に読者のみなさんから質問されたこと疑問に思ったことを紹介していくよ

Q1天馬の鍵はペンダント？それとも光自身？

一応ペンダントが天馬の鍵です。光の魂はライトとダークか

ら中和された存在でペンダントに眠る二つの意志はそれに通じて光の体を使っています。

Q2 禁忌の法でティアラの魂が同化したのは光？ペンダント？

はい。ペンダントです。まあ、何故ティアラはそこまでして自分の魂を守らなきゃいけなかったのかはまだ秘密で^^

Q3 ライトとダークが融合して光が生まれたのに、まだライトとダークが残っているのは何故？

融合してといっても全ての力を融合させてわけではありませんせん。ライトの力とダークの力を二つに分けてそれをたしたものが光なのです。

Q4 ライトとダークの二人はティアラとどう関係している？

ライトとダークは光と影のような存在。ティアラの心から影響して生まれました。けど具体的なことはネタバレになってしまうので今はここまでしか言えません。

Q5 リリー・ビーストがウルトラマンと良く似た姿をしているのは何故？

これは結構多かった質問でした。でも、それは過去編でお教えする予定なんでもう少し待っててください。

クラウン・クラウン  
Q6 王の王冠とは何？

天馬の魂が具現化したものです。昔は力が強すぎて消滅させることができず仕方なく封印という形でその場は納まりました。天馬の体（本体）は長時間魂と別れ過ぎていて、もう二度と戻ることにはできなくなり、天馬族がそれは大事にしまっていた。だけど、その後ベリアル軍によって襲われ天馬族の前から姿が消えた。

Q7 リリーの昔の名は？

それも過去編で分かることだと思いますのであしからず。

Q8 炎の海賊が天馬の鍵を狙った事があるらしいですが、光が生まれる前は別の宇宙にあったと言っ事？

そうですね、その通りです。天馬の鍵は色々な怪獣や怪人たちの手に回っていったのでその際に別の宇宙に連れてこられたりして地球へとたどり着きました。

Q9 そもそも天馬が昔いた宇宙はこの宇宙？

別の宇宙です。

## 過去編について

ティアラとリリー、そして昔カントルダ国に何が起こったのかについてお送りしたいと思います。何故、カントルダ国は滅んでしまったか？リリーがウルトラマンに姿が似ている訳とティアラだけが知っていたあの夜の裏に眠る悲しい事実とは？裏切り者もついに暴かれる・・・！？この過去編が終わり、話しも少し落ち着いたら、ベリアルから差し向けられた怪獣や怪人たちが光を狙ってきてそれをゼロたちが倒すお話みたいなのを書きたいです。

## 天の書物（後書き）

どうでしょうか、みなさん？これで少しは疑問が減りましたか？読者のみなさんにウルトラマンのことについて色々教えてもらってとてもいい刺激になりました。いっぱいご意見をいただいて非常に嬉しいのですが時に物凄い長い感想がきて文章を読んでいる内に頭が混乱して何が何だか分からなくなってしまうました。長い感想は字がいっぱいで読むのすごく大変です。やっぱり適度が一番ですね・・・”。後、私の小説あんまりクオリティも高くないしちよつとウルトラマンぽくないけど・・・（泣）あんま期待しないでくださいね！！？マジ心折れますから！！！まあ、多少辛口な意見もありましたがこれからも気楽に頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします。

## 前世と今世

メデイカルセンターに着き急いで運ばれる光。ウルトラの母が直々に出てき、全力で治癒をしたが光は一向に目が覚めなかった。今は石のように固くなった小さな光の体はベットに横になっている。

ゼロ「畜生ッ！」

静かに怒りに震えるゼロ。拳を堪らず壁を殴ってしまった。光をあそこまで追い詰め、悲しみの色に染めてしまったのは自分たちのせいだと責めた。

グレンファイヤー「やめろよ、ゼロ。ここは仮にもメデイカルセンターだぜ？」

壁に打ち付けられたゼロの手を優しく降ろす。ジャンボットもいつもの冷静を保ち、ゼロを宥める。

ジャンボット「グレンの言う通りだ。取り合えず、光の意識が戻るまで待とう・・・それしか今の私たち出来ることはない」

最後のセリフのトーンが一気に下がるジャンボット。平常心をな

るべく心がけているが不安によってそれは掻き乱されていることが著しく分かった。そんな今にも押し潰られそうな暗い空気の中、リリーがあるテレパシーを感じ取った。

『リ……リッ……』

リリー「……？」

『リ……リ……よ……、……リリー……よ……ッ……』

リリー「！」

ゼロ「どうしたんだ？リリー」

リリー「シッ！何か……声がッ……！……」

リリーは耳を澄ませ周りの音をよく聞く。雑音が少し混じっているが、リリーにはすぐ声の主が分かった。

リリー「もしかして、貴方様は……！……」

『我が純潔の血を引くもう一人の子孫よ・・・私の元へ来い・・・』

リリーはベットに横たわる光を目線に移す。よく見ると天馬の鍵が点滅をしていた。ゼロたちは訳も分からなかったが取り合えずリリーについていった。

ミラーナイト「リリー？一体貴方は誰と話しているのですか？」

リリー「私たち天馬族を生み出した天馬様ベカサス・・・」

ジャンボット「何っ!？」

そう意識をすると不思議と天馬の気配を感じられた。ゼロは空かさず鋭い声音で天馬に言う。

ゼロ「何の用だ？」

『真実を告げにきた・・・ただそれだけだ』

グレンファイヤー「そんなこと言っただけでまた光の国を滅ぼそうと  
してんじゃねえだろうな？」

『もうそんなことせん……。あの娘のおかげで目が覚めた……。』

それはとても弱弱しくさつきあんなに暴れていた張本人とは思えないくらいだった。

『何故だろうな……。人を殺める時の辛さは私が一番知っていたはずなのに……。』

悲しそうに小さな声で呟く天馬。人を傷つけ、人々が自分を求め戦火の火に吞まれていくあの哀れな姿。天馬は昔のあることを思い出した。まだそれは封印される頃の前の話とある少年の話。もちろん人や怪獣、怪人にだって自分を他人のため世のために使おうをしてくれる者もいたけど、その中でその少年は特に印象が濃かった。だが、結局は他人に殺され奪われまた自分はあの辛い現実に戻った。だが、少しの間だったが自分を良いことに使ってくれていたあの者は何故かいつも幸せそに笑っていた。自分を大切そうに磨いき話しかけてもくれた。星が瞬く夜空の日によく聞く話は少年の夢の話。自分は喋れないというのに目がビー玉のようにキラキラと輝かせ、頬はほんのりとピンク色に染まって、「この土地をいつか必ず緑溢れる土地にするんだ」と話し、馬鹿のようにただ笑っていたあの笑顔が最高に素敵だった。いつの間にかアイツの笑顔が好きになっていた自分がいた。だから、自分のせいであの者が死んだ時には絶望した。時に人を恨んだ、けど結局は本当に人を嫌いになんてなれなかった。

(あの小娘の目・・・とても似ていたな・・・少年に・・・)

エメラナ姫の瞳で思い出した。人の素晴らしさを、人とはどういうものなのかをやつと天馬は思い出せたのであった。リリーは急に黙り込んでしまった天馬を心配し声を掛ける。

リリー「天馬様・・・？」

『ついに真のことを話す時がやってきたようだな』

ミラーナイト「真のこと？それは一体どういう・・・」

『我が見てきた天馬族の真実を教えよう・・・炎の海に吞まれた夜ことも』

天馬の鍵が示すように閃光を放つ。リリーは振り返りゼロたちに確認するように問った。

リリー「どうしますか・・・？引き返すなら今の内ですよ。私は例え一人でも行きます。私はあの夜一体何があったか知る権利と騎士として義務があるんです」

リリーの目には決意の炎が揺らいでいた。ゼロたちも頷き合い天馬の真実とやらを知る覚悟をした。リリーは何も言わなくてもゼロ

たちの気持ちを感じ取ったのか、右手の甲をゼロたちに差し出す。ゼロ、ミラーナイト、グレンファイヤー、ジャンボットという順番に次々と手を乗せていく。

リリー「行きますよ・・・タイム・トラベル時間旅行!!」

リリーは自分と天馬の中に流れる血を共鳴させ、天馬の見てきた記憶を覗き見た。物凄い情報量が流れており探すのに苦労したがようやく見つけた。それは・・・。

ティアラ「じゃあ、今日から貴方の名前はビーストね！」

ティアラがリリーに名を初めて授けたあの日からだった・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1843w/>

---

ウルトラマンゼロ～銀河を駆ける天馬～

2012年1月5日19時51分発行